關西大學図書館シリーズ　第十五輯

関西大学所蔵

岩崎美隆文庫
五弓雪窓文庫目録

関西大学図書館

關西大學所蔵　岩崎美隆文庫・五弓雪窓文庫目録

昭和五十一年

關西大學図書館シリーズ　第十五輯

関西大学所蔵
岩崎美隆文庫
五弓雪窓文庫
目録

関西大学図書館

關西大學図書館シリーズ　第十五輯

関西大学所蔵

岩崎美隆文庫
五弓雪窓文庫目録

関西大学図書館

序

本館に蔵する特殊文庫については、既にいくつかの目録を出刊して来たが、今回は、岩崎美隆文庫・五弓雪窓文庫の目録を加へるに至ったことを、悦びとする。

美隆は河内住の歌人にして国学者。想像するに、記録・故実の学を志したのではないかと思はれるが、体質・環境のしからしめる処もあって、完成を見ずして中道に逝いた。雪窓は備後出の漢学者にして史家。かの有名な、神史や、事実文編の著編を持つ人物である。この人は行動範囲も知人も広く豊かである。各の伝は附録の略伝に就かれたいが、共に地方の学者ながら、幕末の実証的学風を典型的に身に付けていて、和歌、そして文章もすぐれてゐる。これも亦幕末の学者の一風であるが、共に健筆家であった。それぞれの著述以外に、自ら筆写した、尨大の資料を止めた。文庫と称するが、ここに収まる旧蔵書は、各のその全部ではなからう。しかし筆写類は、かなりまとまって残ったのは幸である。雪窓の事実文編も、国書刊行会刊の五冊に収まる正・次編百余巻の外に、なほ未刊の雑編十二巻・後編三冊の外、必読書題言彙纂・晩香館筆叢・牛溲馬勃などにも、その種の伝記資料をかなりに含む。美隆にも藤門雑記の外百数十冊、当代の学問と風流韻事を伝える。これらに写された資料の中には、今日求め難いものも含まれてゐる如くである。

これからも更に詳しく調査研究さるべき美隆・雪窓二先生の研究の為には勿論、学問の広範囲にわたる好資料に富むものであらう。この目録刊行を期として、あまねき活用を希望するものである。

最後に、本目録作成に努力された嘱託肥田晧三氏に謝意を呈する。

昭和五十一年三月

関西大学図書館長

中村幸彦

岩崎美隆文庫目録凡例

一、本目録は関西大学図書館所蔵の岩崎美隆旧蔵書約二百八十点（総計千七百八十二冊）を収録したものである。
一、図書の分類は本館の分類表によった。
一、同一分類内の配列は著作の成立年代順を原則とした。
一、各書の記述は次の通りである。
　書名を上段に示し、巻数・冊数・欠本の有無を中段右側に、編著者、刊本写本の別・出版事項を中段左側に記した。とくに別書名のあるものは中段右側に括弧の中に示した。
　写本のうち、岩崎美隆自筆手写になるものは「岩崎美隆手写本」と記し、その他の写本のうち書写年代および筆者の明らかなものはそれを記した。たんに「写本」としたものは江戸時代写本である。
　刊本のうち、刊記の存しないものはたんに「刊本」とした。これはすべて江戸時代刊本である。
一、請求番号は下段にゴチック活字で示した。
一、本文庫の大部分の書冊には、岩崎美隆の校合と考勘の書入れがあり、そのうち校合年次ならびに書入れの年次を示す美隆識語は、その全部を収集して＊印以下に掲出した。
一、美隆の編纂した「藤門雑記」には諸家の著述を多数筆写してある。そのうち主要なものは該当分類内に書名を副出して検索の便宜とし、†印以下に藤門雑記の所収巻数を注した。
一、岩崎美隆略伝を二七頁以下に附載した。
一、書名索引は巻末に附載した。

文庫記号

岩崎美隆文庫
五弓雪窓文庫
LG2 LI2

五弓雪窓文庫目録凡例

一、本目録は関西大学図書館所蔵の五弓雪窓遺稿（総計五百二十冊、このうち雪窓旧蔵書若干を含む）を収録したものである。
一、本目録では文庫の所蔵内容にてらして独自の分類を立て、次の四項目に区分した。㈠自著　㈡編著　㈢自伝資料　㈣旧蔵書
一、五弓雪窓の著述は自著・編著の区別の明瞭でないものが多く、正確にそれを類別することは困難であるが、幸い雪窓の編纂した「晩香館著述目録」が遺されていて、雪窓自身がそこに自著・編著の区別を立てている。よって、本目録はその区分を踏襲して雪窓の遺志を尊重することにした。自著の部はさらに漢文による著述と国語による著述に区分した。これも「晩香館著述目録」の記述にしたがったものである。自伝資料の項目は本目録で新しく設けた所であるが、これは「晩香館日記」をはじめとする雪窓の自伝資料に該当する書物が大部の分量をなすため、それを考慮した処置である。
一、自著・編著・旧蔵書の各項目内の配列は本館の分類表により、その順序で記載した。
一、各書の記述は、書名（別書名）・巻冊数・請求番号の順に記した。第二行以下に各冊の丁数を記し、その次ぎに簡単な解題を添えた。とくに主要なものについては内容細目をあげた。
一、この文庫の書冊はすべて一定した体裁に仕立てて半紙本の型に統一されている。よって書型については一々注記しない。また、一冊の中に数種の著述を合綴したものが多数ある。これはそれ〴〵該当分類内に書名を分出し、†印を付して合綴の一部分であることを注した。
一、雪窓の稿本は一冊の著述の中に自筆の部分と門弟をして筆録せしめた部分の混在しているものが多く、その区別を示すことはあまりに複雑かつ煩瑣にわたる。よって自筆・他筆の注記は一切省略した。
一、旧蔵書の記述は、書名を上段に、巻冊数を中段右側、著者名を中段左側に記した。写本は丁数を記して分量を示した。
一、五弓雪窓略伝を六〇頁以下に附載した。
一、書名索引は巻末に附載した。

岩崎美隆文庫目次

総記……一
書目　事彙
叢書　随筆
神道（附国学）……六
歴史……七
日本史　古記録
有職故実　河内国誌料
法制……一三
理学……一四
諸芸……一五
語学……一五
文学……一六
和歌（付歌謡）　小説物語
随筆（枕草子）　日記消息
漢詩文
岩崎美隆略伝……二七
書名索引……六四

五弓雪窓文庫目次

自著……三三
漢文撰述……三三
仮名撰述……三七
編著……三八
自伝資料……五六
旧蔵書……五七
（付）大橋香陵遺墨……五九
五弓雪窓略伝……六〇
書名索引……六四

岩崎美隆文庫目録

総記

書目

杠園書目録　一冊　中西多豆伎・友田義延・荒木美蔭編　弘化三年写本　〇三九・九　N一

＊惣計八百二拾七部／美隆写本之部二百八十二部／合千百九部／冊数四千百四拾七冊／弘化三丙午年七月かくあらたむるものは／喜里川里中西多豆伎／八尾神主友田義延／花園荒木美蔭

＊美隆家号始藤乃門ト云／コハ春門大人ノ名ツケ玉ヘルナリ／後自ラ杠園ト改ム

事彙

拾芥抄　三巻二冊　洞院公賢　明暦二年村上勘兵衛刊本　二〇・〇九九　F二

＊右拾芥抄以鳥居氏蔵本校合畢文政八酉年五月十五日村田春門々人

河内国河内郡花園里岩崎美隆(花押)／美隆再云鳥居氏蔵本者以京師山田大炊介藤原以文蔵本校合者也大祕不可出函底

宝石類書　十五巻五十冊　紀宗直　写本　二〇・〇九九　K四

第一—四冊　巻一　儀式

第五—六冊　巻二　天子・皇后・官女・婦人

第七—十二冊　巻三　官位・職掌・位署・姓氏

第十三—十五冊　巻四　公事・礼事・歳事・行事

第十六—十七冊　巻五　大嘗会・新嘗会

第十八—十九冊　巻六　作法

第廿—廿二冊　巻七　冠履帯劔・車馬弓箭

第廿三—廿六冊　巻八　衣服

第廿七—卅冊　巻九　調度・器物

第卅一—卅三冊　巻十　神事・仏事

第卅四—卅七冊　巻十一　文書・書籍・殿舎・第宅

第卅八—四十冊　巻十二　雑

第四十一—四十四冊　巻十三　詩歌・遊興

第四十五—四十六冊　巻十四　雑

第四十七—五十冊　巻十五　年中行事

叢書

藤門雑記　七十三冊　岩崎美隆編　岩崎美隆手写本　九二・二〇四　I二ノ一

第一至卅四冊　〔藤門類纂〕

〔藤門類纂のうち次の各冊には以下の書を収める〕

(第一冊)　殊号事略

(第二冊)　伴信友占卜考

(第四冊)　河内国上古水土考

（第五冊）　吉野花見の記・河内扇の記・播磨路の日記
（第六冊）　葦手書考・柏伝
（第十二冊）　日中行事・女房私記
（第十四冊）　後漢金印略考
（第十五冊）　清石問答
（第十八冊）　てにをはのあけつらひ
（第廿八冊）　三養雑記抄・知命記・枕草子の中の説・枕草子考

第卅五至四十五冊　〔藤門類纂索引〕
第四十六冊　〔藤門類纂補〕
第四十七至五十三冊　〔近代和歌集〕
第五十四至六十一冊　〔田鶴舎社中月並歌〕
第六十二至六十四冊　〔古歌抄〕
第六十五冊　建春門院北面歌合・玉撰和歌集抄・蔵山集・隣女集抄
第六十六冊　うけらが花抄・写本六帖詠藻抄
第六十七冊　新猿楽記・本朝世紀設楽打条・嚶々筆語二篇抄・但馬考抄
第六十八冊　建武年中行事略解
第六十九冊　玉たすき抄・梧窓漫筆抄・枕草子私記・燕石雑誌抄・詞捷径
第七十冊　服飾管見・山多豆考
第七十一冊　和漢今古文集
第七十二冊　俳文集
第七十三冊　杠園愚草・〔雑記〕

＊（第二冊）　右伴信友ト占論平岡鳥居氏所蔵之本をもてうつす文政十亥正月十一日よしたか
＊（第六冊）　〔葦手書考〕右天保六未年八月卅日以中西氏之本書入早美隆
＊（第廿八冊）　右三養雑記四冊の中ぬきかき天保十二丑年八月十四日ニ筆トリテ同十五日終功　〇〔知命記〕天保十二丑年七月十七日午の時より筆とりて十八日のくれにうつしをへぬ
＊（第六十五冊）　右建春門院北面歌合以或人所蔵之本写早天保七申年二月十三日美隆　〇この蔵山集といふもの或人のみせたるをかりてとみにうつしぬ／所〻写しあやまりとおほしきこともあれとみな本のまゝ也／天保十四年二月美隆
＊（第六十七冊）　右新猿楽記一巻以中西氏所蔵之本紀氏辰書写之本也書写畢訓点等雖多不審不加私案天保十三壬寅年八月岩崎美隆／同癸卯年以群書類従百三十六巻一校了　〇右本朝世紀設楽打の条抄書ハ和歌山加納氏のもたれたるを界人尾崎正明主の手よりかりて写しつ／本文のあハひに書入たる考は加納氏の考なるへし／さて此本朝世紀ハ実ハ史官紀といふへきよし錦所談にみへたり／天保十三寅年九月十七日美隆しるす　〇この嚶〻筆語といふふみはちかきほとにゐりいたさるへきよしなれどそれが草稿とて鈴木重胤といふひとのもたるゝを塩川正明のかりて見せられたる中よりうつしつ天保十三寅年十月三日美隆

藤門雑記〔第二〕　三十一冊　岩崎美隆編　岩崎美隆手写本

九二一・二〇四　I　二ノ二

第一至廿九冊　群書類従抄
〔群書類従抄のうち次の各冊には類従所収と別に以下の書を収める〕
（第四冊）　神楽歌新釈・装束温故抄・伏見院宸翰装束抄・女官飾抄
（第五冊）　本朝世紀抄
（第十三冊）　東鑑不審問答・白川尚歯会記
（第十四冊）　勝五郎再生紀聞
（第十七冊）　醍醐雑事記巻十・比那能歌語
（第廿八冊）　蘿月庵国書漫抄抄
（第廿九冊）　礼物数

第卅冊　法隆寺伽藍縁起并流記資財事・大安寺縁起・大鳥神社流記・祇園執行日記・平家人物論・平家公達巻

第卅一冊　清少納言記校異

*（第一冊）　右賀茂保憲女集以加納諸平所蔵之古写本書写了天保十四癸卯年二月晦岩崎美隆／三月三日以群書類従一校了　○右和泉式部集以群書類従本書写了天保十四年癸卯三月四日岩崎美隆　○右和泉式部清少納言紫式部経信卿母四家集以群書類従本書写畢天保十四年三月五日岩崎美隆

*（第二冊）　右二家集〔嘉熹門院御集俊成卿女集〕以群書類従本書写畢天保十四癸卯年三月六日岩崎美隆　○右実方相如重之三家集以群書類従本書写了天保十四癸卯年三月七日岩崎美隆　○右為忠朝臣在良朝臣二家集以群書類従本書写了天保十四癸卯年三月十三日岩崎美隆　○右基俊集北院御室御集以群書類従本書写畢天保十四癸卯年三月十五日岩崎美隆

*（第三冊）　右源賢法眼俊忠卿雅兼卿成通卿実国卿資賢卿併六家集以群書類従本書写了天保十四癸卯年三月十六日岩崎美隆　○右長方卿隆祐朝臣二家集以群書類従本書写了天保十四癸卯三月十八日岩崎美隆　○右諸家集〔光経集隣女和歌集亜槐集為重卿集為和卿集言継卿集夢窓国師集〕以群書類従本書写畢天保十四癸卯年四月六日岩崎美隆

*（第四冊）　右延慶両卿訴陳状定為法印申文正治奏状歌仙落書続歌仙落書以群書類従本書写了天保十四癸卯年四月廿六日岩崎美隆

*（第五冊）　右源氏論義最秘抄仙源抄以群書類従本書写了天保十四癸卯年四月晦岩崎美隆　○右本朝世記原本廿四得一本抄出了雖多不審暫随原本書写而已天保十四癸卯年五月七日美隆

*（第六冊）　〔続詞花和歌集〕天保十四年　五月廿四日　以群書類従本百四十八巻書写了美隆　○〔二条大皇太后宮大弐集〕天保十四癸卯年六月十日以群書類従本書写了美隆　○〔待賢門院堀川集〕天保十四卯年六月十日以群書類従本書写了美隆

*（第七冊）　右久安百首以群書類従本書写了天保十四癸卯年五月廿六日美隆　○右五家集〔伊勢大輔集康資王母集弁乳母集出羽弁集紀伊集〕以群書類従本書写了天保十四癸卯年六月九日美隆　○〔小待従集〕以群書類従本書写了天保十四癸卯年六月十日美隆

*（第八冊）　右今川大双紙以群書類従本巻四百十二書写了天保十四癸卯年五月廿八日美隆　○右自連阿口伝抄至物具装束抄以群書類従本百十八巻書写了天保十四癸卯年　五月卅日美隆　○〔玉造小町子壮衰書〕天保十四癸卯年六月二日以群書類従本巻百卅六書写了美隆　○右寛治二年永久元年記以群書類従　四百五十三巻　本書写了天保癸卯年六月四日美隆

*（第九冊）　右源氏奥入以群書類従本三百十五巻　書写了天保十四癸卯六月十二日岩崎美隆　○右僻案抄三代集間事以群書類従本書写了天保十四癸卯年六月十三日　美隆　○〔了俊不審条々弁要抄落書露顕〕天保十四癸卯六月十八日以群書類従本書写了美隆　○〔徹書記物語〕天保十四癸卯年六月十八日以群書類従本書写了美隆　○〔東北院職人歌合〕右以群書類従本書写了天保癸卯年六月十八日美隆

*（第十冊）　〔東野州聞書〕天保十四癸卯年六月廿日以群書類従本書写了岩崎美隆　○右兼載雑談以群書類従本抄出天保十四癸卯年六月二十日美隆　○〔鶴岡放生会職人歌合三十二番職人歌合〕右以群書類従本書写了天保十四癸卯年六月廿二日美隆　○右入木抄夜鶴庭訓抄才葉抄以群書類従本書写了天保十四癸卯年六月廿二日美隆　○〔残夜抄〕天保十四癸卯年六月廿四日書写了美隆　○〔惟澄申状武朝申状〕天保十四癸卯年六月廿四日以群書類従本書写了美隆

*（第十一冊）　〔御ゆとのゝうへの日記〕右以群書類従本書写了天保十四癸卯年六月廿七日美隆／六月の末つかたよりおもハすなることの出来ておほかた心もそらに筆とることものうくてしはしとさしおきつるほとにはやう百日はかりむなしく過にけりやう〳〵すこしこゝろをのとめて藍もて傍に記しつるハ　閏九月十三日　○〔保暦間記〕天保十四癸卯年閏九月廿日以群書類従本書写了美隆

*（第十二冊）　右醍醐雑事記以群書類従本書写了天保十四癸卯年六月五日岩崎美隆　○〔洞然長状〕天保十四癸卯年閏九月廿四日以群書類従本書写了美隆　○〔将門記〕天保十四癸卯年閏九月廿六日以群書類従本書写了美隆　○〔後三年記〕天保十四癸卯年閏九月廿八日以群書類従本書写了美隆　○〔白箸翁伝〕天保十四癸卯年十月三

日以群書類従本書写了美隆　〇〔建暦宣旨〕天保十四癸卯年十月四日以群書類従本書写了美隆

*（第十三冊）〔二判問答〕天保十四癸卯年十月四日以群書類従本書写了美隆　〇〔三内口決〕天保十四癸卯年十月十日以群書類従本書写了美隆　〇〔御産所日記〕天保十四癸卯年十月十三日以群書類従本書写了美隆　〇〔御事始之記〕天保十四癸卯年十月廿二日以群書類従本書写了美隆　〇右東鑑不審問答以或人所蔵本書写了天保十四癸卯年十月廿六日美隆　〇〔白川尚歯会記〕弘化二年巳八月朔日書写了岩崎美隆

*（第十四冊）右諸家系図以群書類従本書写了天保十四癸卯年十一月四日美隆

*（第十五冊）右歌合以群書類従本書写了天保十五甲辰年二月廿五日岩崎美隆

*（第十六冊）右諸歌合以群書類従本抄出了天保十五辰年三月十三日岩崎美隆

*（第十七冊）右醍醐雑事記は西田翁のひめもたれたりしをかり得てうつしつ天保十五年四月二日の朝より筆とりて同日の申の時はかりにうつしをへぬ岩崎美隆　〇〔北野縁起〕以群書類従本書写了天保十五辰年九月二日岩崎美隆

*（第十八冊）右諸歌合以群書類従本書写了天保十五辰年五月廿日岩崎美隆　〇〔諸歌合〕天保十五辰年五月廿一日以群書類従本書写了岩崎美隆

*（第十九冊）〔諸歌合〕天保十五辰年五月廿二日以群書類従本書写了岩崎美隆　〇〔諸歌合〕天保十五甲辰六月六日以群書類従本書写了岩崎美隆

*（第廿冊）右諸歌合以群書類従本書写了天保十五年甲辰五月廿八日岩崎美隆　〇右諸歌合以群書類従本書写了天保十五甲辰年六月六日岩崎美隆

*（第廿一冊）右諸歌合天保十五年甲辰六月十一日書写了岩崎美隆

*（第廿二冊）〔五百番歌合〕天保十五年甲辰六月廿三日以群書類従本書写了岩崎美隆

*（第廿三冊）〔諸歌合〕天保十四年甲辰孟秋初四以群書類従本書写了岩崎美隆

*（第廿四冊）右大鏡裏書以群書類従本書写了天保十四年甲辰七月廿三日岩崎美隆

*（第廿五冊）〔多武峯縁起〕天保十五甲辰年八月廿四日書写了岩崎美隆　〇右仁和寺諸堂記以下以群書類従本書写了天保十五甲辰八月廿六日美隆　〇自大安寺縁起至干観心寺縁起以群書類従本書写了天保十五辰年八月廿九日美隆　〇〔賀茂皇太神宮記〕右群書類従本書写了天保十五辰年八月晦日岩崎美隆

*（第廿六冊）〔古今序註〕以群書類従本書写了天保十五辰年九月四日岩崎美隆　〇〔新卅六人撰〕以群書類従本書写了天保十五辰年九月九日美隆

*（第廿七冊）〔西宮左大臣集他九〕以群書類従本書写了天保十五辰としなか月の八日美隆

*（第廿八冊）〔承久軍物語〕弘化二年巳二月朔日以群書類従本書写了岩崎美隆　〇右おくにの絵巻物の詞尾崎雅嘉か蘿月庵国書漫抄といふ随筆に抄出したり僻書いとおほくてこゝろゆかねと本のまゝにうつしつ美隆／右膳部雑記蘿月庵国書漫抄ノ中ニ抄セリ弘化二年巳七月写美隆

*（第廿九冊）右梅松論上下二巻以群書類従本書写了弘化二年巳二月四日岩崎美隆　〇右鎌倉大草紙以群書類従本書写了弘化二年巳三月五日岩崎美隆

*（第卅冊）〔法隆寺伽藍縁起并流記資財事〕此書は豊前国小倉の人西田直養翁の人にうつさせて巻軸にしてひめもたれけるをかりてうつしたるなり／彼翁のはいとうるハしく古代の字躰をすきうつしにしたれバいとめてたし／今もさせまほしけれどいといとまいりぬへきわさにて病かちによろつものうきおのれがたふべきことならねバさやうにハえものせず／されど大かた字のかたちハもとの様をたかへすうつしとりぬ天保十五年甲辰六月朔日岩崎美隆

○右大安寺縁起并流記資財帳八月廿八日以群書類從一校了 大鳥神社流記
祇園執行日記以西田直養翁蔵本書写了天保十五年甲辰六月四日岩
崎美隆　○右平家人物論平家公達卷以西田直養翁蔵本書写了天保
十五甲辰年六月五日岩崎美隆

藤門雑記〔第三〕

二冊
岩崎美隆編　岩崎美隆手写本　九二・二〇四 I 二ノ三

第一冊　故実拾要抄・安米都知・和歌庭訓抄・和歌用意条々
第二冊　南朝紹運録・大平記武器談・菅像弁・軍記叢書抄
・寝覚の塵抄・故実拾要諸家消息・北面初記・服暇
雑穢令

*（第二冊）この南朝紹運録は或人のひめもたるをかりつれどいといたくいそくへきよしありて筆とく写しものしつれは文字やうわかれかたきところもおほかるへしのち見ん人よく正してよ天保の十とせといふとしの四月七日の日の巳の時より筆をとりて同しき夜の子の時はかりにうつし終ぬ美隆　○〔菅像弁〕このふみは亥のとしの冬ふみあきひとのもてきてみせたるをかりおきつれとなにくれと世のことわさのしけきにまきれて打すておきつるをけふしも筆とるついてにおもひおこして写しつ天保十一年庚子正月元日岩さきの美隆　○〔服暇雑穢令〕天保十三壬寅年四月廿八日以紀氏辰書写之本写訖美隆

諸書抜書

存三冊（巻二・九・十）
岩崎美隆編　文政六年岩崎美隆手写本　九一四・五 I 一ノ二

第一冊（巻二）　秋斎随筆抄・南留別志抄・年々随筆抄・雨中問答抄・亮々草紙抄・閑散余録抄
第二冊（巻九）　玉勝間抄・万葉集私記
第三冊（巻十）　玉勝間抄

*（第一冊）文政六未九月四日かきあつめをへぬよしたか
*（第二冊）文政六年未三月八日写畢岩崎美隆

杜園雑記

〔諸家随筆抜書〕一冊
岩崎美隆編　岩崎美隆手写本　九一四・五 I 一ノ一

藤門拾葉

一巻
関西大学図書館編　二八九・一五 I 一

〔岩崎美隆文庫本各書冊の中に挿み込まれてありし零紙断片のうち主なるものを取集して一巻に装幀せり〕

一　折口信夫ハガキ（岩崎清平宛）　一通　昭和十年八月十二日
*まことに御無沙汰いたして居ります。先日、大阪へまゐる折、拝借の御本持参いたすつもりで居りましたが急用で帰京いたしましたので、又そのまゝになりました。唯今旅行中です。出発前、杜園抄と私見とを書留便でさし出しました。まことに長々ありがたく存じます。いづれ長い手紙の御挨拶ハ申しますが、あまり突然になりますから、ちょっと御案内まで、一筆失礼いたしました。
信州北安曇郡中土村小谷温泉　折口信夫
二　伴林光平詠草（首夏二首）　一枚
三　多豆舎東脩請取　一枚
四　村田嘉言書簡（岩崎美隆宛）　一通
五　〃　（〃）　一通
六　書肆柏原屋半兵衛書価書付（岩崎宛）　一通
七　〃　（〃）　一通
八　書肆奈良屋長兵衛書価書付（岩崎宛）　一通
九　〃　（〃）　一通
十　書肆加賀屋善七書価書付　一通
十一　鹿の屋真萩製元興寺鬼味噌引札　刊一枚
十二　摂津中山寺若戎屋請取書付　一枚
十三　刊本賀茂下流梅合ノ包紙　一枚

随筆

輶軒小録

存巻上　一冊
伊藤東涯　写本　九一四・五 I 二

安斎叢書

〔安斎随筆〕三十巻三十冊
伊勢貞丈　写本　二一〇・〇六九 I 二

好古小録　存巻上　一冊　藤貞幹　刊本　九一四・五　F一

好古日録　一冊　藤貞幹　寛政九年林伊兵衛等刊本　九一四・五　F一

槻の落葉信濃下向病床漫筆　一冊　荒木田久老　文政四年岩崎美隆手写本　九一四・五　A二

＊文政の四とせといふとしのなぬかの日うつしをへぬ岩崎美隆

錦所談　二巻二冊　山田以文　天保十一年岩崎美隆手写本　九一四・五　Y一

＊右錦所談二巻以田中芳樹主之本書写畢干時天保十一年五月十一日起筆同十二日々暮写畢岩崎美隆

落葉の下草　一冊　藤井高尚問・中村歌右衛門答　岩崎美隆手写本　九二一・二〇四　I二

†藤門雑記第七十二冊に収む

〔寄居雑著〕　大江匡房卿伝・みをつくし・葦手考・歌絵考・玄上考　合一冊　田中芳樹　岩崎美隆手写本　二八九・一三八　O一

不知火考　一冊　中島広足　天保十二年岩崎美隆手写本　二八九・一三八　O一

＊上にうつせる不知火考といふものハ板本なれど難波の書屋なともいまだえしらざるを長崎にゆきし人のもたるを或人のかりたるをやかてうつしこしたる也天保十二丑年三月廿三日朝より筆とりて同し日のくれつかたうつしをへぬ

†〔寄居雑著〕と合綴

安米都知　一冊　加納諸平　天保十二年岩崎美隆手写本　九二一・二〇四　I二ノ三

＊この加納氏の天地の歌の考浪速人殿村茂済主のもとよりひとわたり見よとておこせられたるをうつしつ本書ハ紙の員三十枚片面十行ツ、にいとうるはしくかゝれたれど此ころよのわたらひのいとまなくてみたりかはしくはしりかきしたれはひかこともやあらん天保十二年十一月廿三日朝より筆とりておなしき夜うつしをへぬ美隆

†藤門雑記〔第三〕ノ第一冊に収む

山多豆考　一冊　加納諸平　天保十三年岩崎美隆手写本　九二一・二〇四　I ノ一

＊右山多豆考尾崎氏のみせられたるをいとめてたくおほえてうつしとゝめつ美隆干時天保十三寅年四月十日

†藤門雑記第七十冊に収む

藤門随筆草稿　一冊　岩崎美隆　自筆稿本（二十三丁）　九一〇・四一　I一

私考雑録　（雑録）一冊　岩崎美隆　文政六年自筆稿本（十四丁）　九一四・五　I二ノ二

＊文政六年未三月集録之岩崎美隆

世事雑記　一冊（嘉永二至四・文久二至三年記事）　岩崎清兵衛　岩崎清兵衛自筆稿本（二十八丁）　九一四・五　S一

神道　附国学

神道

先代旧事本紀　（鑑頭旧事記）十巻五冊　出口延佳校　延宝六年跋刊本　二一〇・三K　W一

伊勢二所太神宮御鎮座伝記　一冊　出口延佳校　写本　一七五・八　I一

二所皇太神宮神名略記　（伊勢神名略記）一冊　出口延佳　元禄七年跋刊本ノ後印本　一七五・八　W一

内宮外宮弁詳解　二巻二冊　荒木田末寿　文政四年岩崎美隆手写本　一七五・八　A一

＊文政の四とせといふとしのうつきなぬかの日うつしをへぬ岩崎美隆

大神宮儀式解　三十巻九冊　荒木田経雅　文政六至八年岩崎美隆手写本　一七五・八六　A一

＊（第一冊）文政六年九月廿四日此一巻を写早岩岬美隆

＊（第九冊）右大神宮儀式解三十巻以村田大人所蔵之本書写畢　文

政八年乙酉正月十六日村田春門門人河内国河内郡市場里人岩崎美隆

国学

祝詞考　三巻三冊　賀茂真渕　寛政十二年浪華河内屋八兵衛等刊本　一七三　K一

＊文政九戌年二月廿七日書入了河内国花園里人岩崎美隆

呵刈葭　（上田秋成論難弁・鉗狂人上田秋成評弁）二巻三冊　本居宣長　写本　八五　M六

答問録　（鈴屋答問録）二巻二冊　本居宣長答　文政三年岩崎美隆手写本　一三一・二五

＊文政の三とせといふとしの八月十日あまり四かの日うつしをへぬ　岩崎美隆

くす花　二巻二冊　本居宣長　文政三年岩崎美隆手写本　一三一・二五

＊文政三辰五月廿六日写早岩崎美隆

再難村田春海之答書　一冊　和泉真国　写本　一五五・二　I一

仏教

二十四輩順拝図会　五巻後篇五巻十冊　釈了貞　竹原春泉斎画　享和三年京都菱屋孫兵衛等刊本　一八八・七　R一

歴史

日本史

古事記　（竈頭古事記）三巻三冊　出口延佳校　貞享四年跋刊本　二一〇・三二　W一

古事記　（訂正古訓古事記）三巻三冊　長瀬真幸校　享和三年松坂山口兵助等刊本　二一〇・三二

日本書紀　卅巻七冊　寛文九年武村市兵衛等刊本ノ後印本　二一〇・三三

＊文政七甲申五月廿四日校合畢一柳春門々人河内国河内郡花園里人岩崎美隆

続日本紀　四十巻十四冊　立野春節校　明暦三年跋刊本　二一〇・三五　S一

＊（第一冊）〔巻三〕文政八年九月十日以古写本校合了河内国花園里人岩崎美隆

＊（第二冊）〔巻六〕文政八年九月十三日校合了河内国河内郡花園里人岩崎美隆

＊（第三冊）〔巻九〕文政九年（ママ）七月六日岩崎美隆鳥居並樹校合畢／同年同月廿四日傍書頭書了岩崎美隆

＊（第四冊）〔巻十二〕文政八年七月八日校合畢岩崎美隆鳥居並樹／同年同月廿五日頭書傍書了岩崎美隆

＊（第五冊）〔巻十六〕文政十丁亥年五月廿六日以浪華殿村茂済所蔵之古写本校合了岩崎美隆／〔巻十七〕文政十丁亥年以浪花殿村茂済所蔵之古写本校合了岩崎美隆

＊（第六冊）〔巻十八〕文政十丁亥年五月廿六日以浪速殿村茂済所蔵之古写本校合了岩崎美隆／〔巻十九〕文政十丁亥年五月廿八以浪速殿村茂済所蔵之古写本校合了岩崎美隆／〔巻廿〕文政十丁亥年六月

朔日以浪速殿村茂済所蔵之古写本校合了岩崎美隆

*〔第七冊〕〔巻廿一〕文政十丁亥年六月三日以浪速殿村茂済所蔵之古写本校合畢岩崎美隆／〔巻廿二〕文政丁亥年六月三日浪速殿村茂済所蔵之古写本校合了岩崎美隆／〔巻廿三〕文政丁亥年以浪速殿村茂済所蔵之古写本校合了岩崎美隆

*〔第八冊〕〔巻廿四〕文政十丁亥年六月五日以浪華殿村茂済所蔵之古写本校合畢岩崎美隆／〔巻廿五〕暦紀文政十年丁亥六月以浪速殿村氏所蔵之古写本校合了岩崎美隆

*〔第九冊〕〔巻廿六〕文政十丁亥六月五日以浪速殿村氏所蔵之古写本校合了岩崎美隆／〔巻廿七〕文政十丁亥年六月七日以浪速殿村氏所蔵之古写本校合了布知廼加登美隆／〔巻廿八〕文政十丁亥年六月七日以殿村氏所蔵之古写本校合了藤のかと美隆

*〔第十冊〕〔巻廿九〕文政十丁亥年六月八日以浪速殿村氏所蔵之古写本校合了岩崎美隆／〔巻卅〕文政十亥三月廿二日以浪速殿村茂済所蔵之本校合早岩崎美隆

*〔第十一冊〕〔巻卅一〕文政十亥三月廿二日以浪速殿村茂済所蔵之古写本校合了河内国人岩崎美隆／〔巻卅二〕文政九龍（ママ）輯丁亥年三月廿四日以浪速殿村茂済所蔵之古写本校合了岩崎美隆／〔巻卅三〕文政十丁亥年春抄廿四日以浪華殿村茂済所蔵之古写本校合了岩崎美隆

*〔巻十二冊〕〔巻卅四〕文政十龍集丁亥年三月廿四日以浪華殿村茂済所蔵之古写本校合了岩崎美隆／〔巻卅五〕文政十丁亥年三月廿六日以浪速殿村茂済所蔵之古写本校合了岩崎美隆／〔巻卅六〕文政十丁亥年三月廿六日以浪速殿村茂済所蔵之古写本校合了岩崎美隆

*〔第十三冊〕〔巻卅七〕文政十丁亥年三月廿七日以浪華殿村茂済所蔵之古写本校合了岩崎美隆／〔巻卅八〕文政十丁亥年三月廿七日以浪速殿村茂済所蔵之古写本校合了河内国人岩崎美隆

*〔第十四冊〕〔巻卅九〕文政第十暦歳舎丁亥季春二十有八蓂以浪速殿村茂済所蔵之古写本校合了岩崎美隆／〔巻四十〕文政十年歳在彊梧大渊献盂夏之吉以浪速殿村茂済所蔵之古写本校合了河内国人岩崎美隆／天保七年申七月廿七日以浪田侯文庫之本小篠道冲校本校合畢美隆

日本後紀　廿巻五冊　写本　廿巻十冊　寛政七年出雲寺林元章刊本　二一〇・三六二　S一

*以浪田侯文庫本小篠道冲校本校合畢天保七年申七月二十三日河内国人岩崎美隆

続日本後紀　（文徳実録）十巻三冊　寛政八年出雲寺和泉掾刊本　二一〇・三六六　N一

*以浪田侯文庫之本校合畢天保七年申七月二十五日岩崎美隆

日本文徳天皇実録　（三代実録）五十巻十五冊　松下見林校　寛文十三年跋刊本　二一〇・三六六　N二

*右三代実録五十巻以浪田侯文庫之本小篠道冲校本校合畢天保七年申七月廿五日河内国人岩崎美隆

日本三代実録　〔日本紀略〕十一冊　写本　二一〇・三四一

九代暦記　承平五・天慶元・二・四・五・八・寛和二・正暦元・四・五・長保元・四・五・治暦四・寛治元・康和元・五・康治元・二・天養元至仁平三年　廿冊　藤原通憲　写本　二一〇・〇九　F一三

本朝世記　存七巻（巻十九・廿一・廿四至廿七・卅）七冊　釈皇円　写本　二一〇・三　K五

扶桑略記　存十五巻（巻二至六・廿二至卅・抜萃一巻）十五冊　釈皇円　文政三年刊本　二一〇・三　K五

扶桑略記　一冊　釈周鳳　写本　二一〇・一八　S三

善隣国宝記　七巻七冊　釈慈円　宝暦十年山岡浚明写本ノ写　二一〇・四三　G一

愚管抄　六巻六冊　北畠親房　慶安二年風月宗知刊本ノ後印本　二一〇・三　K四

神皇正統記　三巻三冊　白井宗因校　文化九年加賀屋善蔵刊本　二八八・二　S一

*天保十二丑年九月以古写本一校了岩崎美隆

新撰姓氏録

*〔上冊〕文政六年三月十日書入竟岩岬美隆　〔中冊〕文政六年三月廿一日書入竟岩岬美隆　〔下冊〕文政六稔四月七日書入竟岩崎美隆

国史字類　一冊　白幡義篤　明治七年敦賀屋九兵衛等刊本　二一〇・〇三六　S一

古記録

伏見院御記　六冊（弘安十・正応元・三・六・延慶二）写本　二一〇・〇九　F一三

伏見院御記　三冊（弘安十・正応元・三・六・延慶二）写本　二一〇・〇九　F一三

李部王記　一冊（延長四至天暦六年）〔重明親王〕写本　二一〇・〇九　S一

九暦　一冊（天暦元至三・天徳元至四年）〔九条師輔〕写本　二一〇・〇九　K一

野府記　廿冊（天元五・治安三至長元五年）〔小野宮実資〕写本　二一〇・〇九　O一

権記　十六冊（長暦二至寛弘八年）〔藤原行成〕写本　二一〇・〇九　F一

法成寺関白道長公記　六冊（寛弘二至五・長和二年・別記）〔藤原道長〕写本　二一〇・〇九　F二

春記　十三冊（長暦二至永承七年）〔藤原資房〕写本　二一〇・〇九　F三

水左記　五冊（康平五至応徳三年）〔源俊房〕写本　二一〇・〇九　M一

大府記　五冊（寛治二・六・康和二・五）附顕隆卿記（康和五年）〔勧修寺為房〕写本　二一〇・〇九　K二

中右記　十冊（寛治元至八年）〔中御門宗忠〕写本　二一〇・〇九　N一

江記　三冊（寛治四・八・天仁元年）〔大江匡房〕写本　二一〇・〇九　O二

永昌記　十冊（長治二至嘉承二・天永元・二・保安三・五・大治元・四年）〔甘露寺為隆〕写本　二一〇・〇九　F五

*天保十一子年六月廿一日以一本校合了美隆

大外記師遠記　一冊（大治二年五至七月）〔中原師遠〕写本　二一〇・〇九　N二

時信記　一冊（天承元年十一・十二月）〔平時信〕写本　二一〇・〇九　T一

台記　廿七冊（康治元至久寿二年）附別記（長承四至仁平三年）〔藤原頼長〕文化十五年秦正康手写本　二一〇・〇九　F七

中内記　一冊（保延七年正・二月）〔藤原宗能〕写本　二一〇・〇九　N三

山槐記　三冊（保元四・永暦元・治承四）〔中山忠親〕写本　二一〇・〇九　N四

山槐記　十冊（治承三・四年）〔中山忠親〕写本　二一〇・〇九　N四

玉葉　百冊（長寛二至正治二年）〔九条兼実〕写本　二一〇・〇九　F四

玉海　六十八冊（長寛二至正治二年）〔九条兼実〕写本　二一〇・〇九　F四

明月記　廿五冊（建久三至天福元年）〔藤原定家〕写本　九一五・四九　F一ノ一　F一ノ二

明月記　四十四冊（治承四至嘉禎元年）〔藤原定家〕寛政五年写本　九一五・四九　F一ノ五

明月記　一冊（貞永二年二・三月）〔藤原定家〕写本　九一五・四九　F一ノ三

明月記　一冊（文治四至建保四年抄出）〔藤原定家〕写本　九一五・四九　F一ノ四

心記　一冊（建久三・四年）〔樋口定能〕写本　二一〇・〇九　S三

三長記　八冊（建久七至建永元年）〔三条長兼〕写本　二一〇・〇九　S二

自暦御記　二冊（建久九・貞応元年）〔吉田資経〕写本　二一〇・〇九　F八

玉藻　卅冊（承元三至仁治三年）〔九条道家〕写本　二一〇・〇九　K三

家光卿記　一冊（承久三年閏十・十一月）〔日野家光〕写本　二一〇・〇九　H一

平戸記　十冊（延応二至寛仁三年）〔平経高〕写本　二一〇・〇九　T二

後中記　一冊（仁治三年正至三・十月）〔葉室資頼〕写本　二一〇・〇九　O三

後中記　一冊（仁治三年正至三月）〔葉室資頼〕文政九年岩崎美隆手写本　九一五・四九　M一

＊文政九戌正月四日写畢河内国花園里人岩崎美隆

†家長日記・袋之図と合綴

資季卿記　一冊（仁治三年三月）〔平松資季〕写本　二一〇・〇九　H二

妙槐記　三冊（寛元二・文応元年附妙槐記宣旨抜書）〔花山院師継〕写本　二一〇・〇九　F九

吉続記　十六冊（文永四至乾元年）〔吉田経長〕写本　二一〇・〇九　Y二

勘仲記　三冊（建治二至永仁二年）〔勘解由小路兼仲〕写本　二一〇・〇九　K四

実冬卿記　一冊（弘安八年北山准后九十賀記）〔滋野井実冬〕写本　二一〇・〇九　F一〇

継塵記抄出　二冊（首破損至文保二年・嘉元四年堂供養）〔藤原実任〕写本　二一〇・〇九　F六

万一記　一冊（正安三年四至十月）〔万里小路宣房〕写本　二一〇・〇九　M三

久世相国具通公記　一冊（貞治五年元日節会拝賀）〔久我具通〕写本　二一〇・〇九　K五

後愚昧記　一冊（貞治六年正至十二月）〔三条公忠〕写本　二一〇・〇九　G一

実冬公記　一冊（応安四・永徳元・二・四年）〔三条実冬〕写本　二一〇・〇九　S四

康富御記　二十冊（応永廿二至康正元年）〔中原康富〕享保廿年奥平広業手写本　九一五・四九　N一

崇恩院内府惟房公記　二冊（永禄元・七年附天文十七年除目）〔万里小路惟房〕写本　二一〇・〇九　F一一

有職故実

儀式　十巻十冊　写本　二一〇・〇九九　G一

西宮記　存十一冊（恒例五月至十二月・臨時三月至十一月）〔源高明〕写本　二一〇・〇九九　M一／三

西宮記　存二冊（恒例正月）〔源高明〕写本　二一〇・〇九九　M一／二

西宮記　存廿一冊（恒例正月至十二月・臨時一月至五月）〔源高明〕写本（破損多シ）　二一〇・〇九九　M一／一

北山抄　十一巻十一冊〔藤原公任〕写本　二一〇・〇九九　F一

朝野群載　卅巻（欠巻十・十四・十八・十九・廿三至廿五・廿九・卅）十三冊〔三善為康〕写本　二一〇・〇九　M四

＊（第一冊）〔巻一〕天保十年亥二月廿三日以荒木田氏所蔵古写本校了岩崎美隆／〔巻二〕得荒木田久老所蔵古写本校合了天保十年亥二月廿三日岩崎美隆

＊（第二冊）〔巻三〕得宇治五十槻所蔵古写本校合了天保十年亥二月廿三日岩崎美隆／〔巻四〕得宇治五十槻蔵本校合畢天保十年亥二月廿三日岩崎美隆

＊（第三冊）〔巻五〕得荒木田久老蔵本校合了天保十年亥二月廿四日岩崎美隆／〔巻六〕得宇治五十槻蔵本校合了天保十年亥年二月廿四日岩崎美隆

＊（第四冊）〔巻七〕得宇治五十槻蔵本校合了天保十年亥二月廿四日岩崎美隆／〔巻八〕得宇治五十槻蔵本校合了天保十年亥二月廿五日岩崎美隆

＊（第五冊）〔巻九〕得宇治五十槻蔵本校合了天保十年亥二月廿五日岩崎美隆

＊（第六冊）〔巻十一〕得宇治五十槻蔵本校合了天保十年亥二月廿五日岩崎美隆／〔巻十二〕得宇治五十槻蔵本校合畢天保十年亥二月廿六日岩崎美隆

＊（第七冊）〔巻十三〕得宇治五十槻蔵本校合了天保十年亥二月二十六日岩崎美隆

＊（第八冊）〔巻十五〕得宇治五十槻蔵本校合了天保十年亥二月廿六日岩崎美隆〔巻十六〕得荒木田久老神主蔵本校合畢天保十年亥二月廿六日岩崎美隆

*（第九冊）〔巻十七〕得宇治五十槻蔵本校合了天保十年亥年二月廿六日岩崎美隆
*（第十冊）〔巻廿〕得宇治五十槻蔵本校合了天保十年亥二月廿六日岩崎美隆
*（第十一冊）〔巻廿一〕得荒木田神主久老蔵本校合了天保十年二月廿七日岩崎美隆／〔巻廿二〕得宇治五十槻蔵本校合了天保十年亥二月廿七日岩崎美隆
*（第十二冊）〔巻廿六〕以荒木田神主久老蔵本校合了天保十年亥二月廿七日岩崎美隆
*（第十三冊）〔巻廿七〕得荒木田神主久老蔵本校合了天保十年亥二月廿七日岩崎美隆／〔巻廿八〕得荒木田久老神主蔵本校合畢天保十年亥二月廿七日河内国河内郡花園里岩崎清兵衛源美隆久老本奥書云貞享三丙寅三月廿日書写了

江家次第　廿巻十九冊（欠巻十六）　大江匡房　承応二年洛下林鶴刊本　二〇・〇九九　O二
*右十九巻以鳥居氏之秘本校合了大秘不可出函底干時文政九戌年二月十日夜河内国花園里人岩崎美隆

江次第抄　七巻七冊　〔一条兼良〕　宝暦八年源元寛写本ノ写　二〇・〇九九　I一

江談抄　五巻一冊　〔大江匡房〕　写本　三八・一　O二
*天保十三壬寅年四月以延宝年間之古写本再校了岩崎美隆

吉部秘訓抄　存三巻三冊（巻一・三・四）　写本　二〇・〇九　Y一

吉部秘訓抄　存二巻二冊（巻四・五）　写本　二〇・〇九　Y一

三条中山口伝　二冊　写本　二〇・〇九九　S一

禁秘抄　三巻三冊　〔順徳天皇〕　刊本　二〇・〇九九　J一

蓬莱抄　〔非職事雲客所役秘鈔〕　一冊　〔葉室重隆〕　文化九年伴重賢手写本　二〇・〇九九　H一

抄物　一冊　〔一条兼良〕　写本　二〇・〇九九　I一

名目抄注　三巻三冊　文政四年岩崎美隆手写本　二〇・〇九九　M二
*文政の四とせといふとしのなか月四かの日うつしをへぬ不知廼嘉止美隆

宇槐雑抄　一冊　〔三条西公条〕　写本　二〇・〇九　F七

侍中群要　十巻五冊　写本　二〇・〇九九　T一

故実拾要抄　一冊　篠崎維章　天保十二年岩崎美隆手写本　九一・二〇四　I二ノ三
*右故実拾要ノ説ハ近代ノコトヲ記サレタルト見エテ上古中昔ノ例ニハタカヘルコト多シサレトモ近キ世ノサマヲシルモ又学問ノ一助ナレハ聊抄書シオクモノ也天保十二年丑正月写畢美隆
†藤門雑記〔第三〕ノ第一・二冊に収む

軍礼叢書抄　一冊　伊勢貞丈　岩崎美隆手写本　九一・二〇四　I二ノ三
*此書写本にて五巻あり軍礼のことをかきたる故人の書を伊勢平蔵のあつめられしもの也全体の中してここに聊抄しおく也
†藤門雑記〔第三〕ノ第二冊に収む

礼物数　一冊　溝口敬明　弘化二年岩崎美隆手写本　九一・二〇四　I二ノ二
*弘化二巳年八月朔書写了美隆
†藤門雑記〔第二〕ノ第廿九冊に収む

天皇冠礼部類記　〔土御門天皇元服記〕　写本　一冊　二〇・〇九九二　K一

大饗雑事　〔大饗雑事鈔〕　写本　一冊　二〇・〇九九八　D一

公宴部類記　一冊　写本　九一・一〇六　K一

年中行事秘抄　一冊　写本　二〇・〇九九六　N一

建武年中行事略解　一冊　谷村光義　岩崎美隆手写本　九一・二〇四　I二ノ一
†藤門雑記第六十八冊に収む

日中行事　一冊　宝暦六年高孟彪写本ノ天保五年岩崎美隆手写本　九二一・二〇四　I二ノ一
＊この日中行事は天保五年三月廿二日巳の時よりふてとりて未の時ばかりにうつしをへぬ美隆
†藤門雑記第十二冊に収む

近代年中行事細記　三巻二冊　〔柳原資廉〕　写本　二一〇・〇九九六　Y一

女房私記　一冊　岩崎美隆手写本　九二一・二〇四　I二ノ一
＊右女房私記は喜里川里中西氏之本を以写之誤字脱字等多く有之追〻可校合之也美隆
†藤門雑記第十二冊に収む

殿中以下年中行事　〔鎌倉年中行事〕〔海老名季高〕　二巻一冊　写本　二一〇・〇九九六　K一

雅亮装束抄　二巻一冊　文政八年岩崎美隆手写本　二一〇・〇九九八　M二
＊右雅亮装束抄二巻以鳥居氏蔵本写早文政八年酉五月々隠日河内国花園里人岩崎美隆／天保七年申二月三日以橋本稲彦所蔵本再校早

餝抄　一冊　文政七年岩崎美隆手写本　二一〇・〇八九八　T三
＊文政七年申三月廿八日夜写早河内国河内郡花園里人岩崎美隆

伏見院宸翰装束抄　一冊　天保十四年岩崎美隆手写本　九二一・二〇四　I二ノ二
†藤門雑記〔第二〕ノ第四冊に収む

女官飾抄　一冊　天保十四年岩崎美隆手写本　九二一・二〇四　I二ノ二
＊右二部装束抄〔伏見院宸翰装束抄女官飾抄〕以堤右岑所蔵古写本書写了天保十四癸卯年五月十九日岩崎美隆／同六月朔以群書類従本一校了
†藤門雑記〔第二〕ノ第四冊に収む

装束拾要抄　二巻二冊　元禄四年青木藤兵衛・太田長兵衛刊本　二一〇・〇九九八　S三
＊〔上冊〕文政六申八月廿日書入畢河内国河内郡市場里人岩崎美隆／〔下冊〕文政六申八月廿一日書入畢岩崎美隆

装束図式　二巻二冊　元禄五年〔京都〕冨倉太兵衛刊本　二一〇・〇九九八　S二
＊文政六申九月十日書入畢河内国河内郡市場里人岩崎美隆

装束温故抄　一冊　天保十四年岩崎美隆手写本　九二一・二〇四　I二ノ二
＊右装束温故抄以京師堤散拾遺右岑所蔵古写本書写了天保十四癸卯年四月廿三日岩崎美隆
†藤門雑記〔第二〕ノ第四冊に収む

直垂考　一冊　壷井義知写本　七五六・九　T一

服飾管見　十四巻（欠巻一至三）一冊　田安宗武　天保十一年岩崎美隆手写本　九二一・二〇四　I二ノ一
＊服飾管見十一巻みなつきの廿七日より筆とりて七月朔日写しをへぬ原本誤字脱文おほくていかにともよみとりかたきところいとおほしそはいかゝはせんみな本のまゝなりよき本を得たらん時あらためかむかふへし天保十一子年七月朔日岩崎美隆
†藤門雑記第七十冊に収む

服飾漫語　一冊　田安宗武　文政九年岩崎美隆手写本　二一〇・〇九九八　T一
＊文政の九とせといふとしのかむなつきみかのひうつしをへぬ岩さきの美隆

玉函叢説　八巻一冊　田安宗武　文政九年岩崎美隆手写本　九一四・五　T一
＊右玉函叢説八巻以鳥居氏恵書写了文政九戌年三月一日河内国花園里人岩崎美隆

〔装束考〕　一冊　文政十年小泉保敬手写本　二一〇・〇九　M二

装束集成　廿四冊　文政十一年岩崎美隆手写本　二一〇・〇九九八　S四
＊右装束集成五十三巻以田豆舎大人蔵本書写早原本衍文逸字不少然恐左計之失故強不加臆度後日以本書可点竄者也文政十有一年夏日岩崎美隆

古器考　一冊　賀茂真渕　文政九年岩崎美隆手写本　二一〇・〇九九八　T一

＊このふみ鳥居並樹ぬしのもたまへりけるをこひとりてうつしぬもしのかきひかめたる所〻おほくみゆるをよき本をえてまたもかうかへなんかしときは文政の九とせといふとしの神棠月五日岩崎美隆／天保十一子九月再校了

袋之図　一冊　文政七年岩崎美隆手写本　九一五・四九　M一

＊文改七年申八月廿八日以田豆舎大人之蔵本写早かふちの国河内郡花園里人岩崎美隆

†後中記・家長日記と合綴

傘笠考　存巻下　一冊　屋代弘賢　写本　三八三・二　Y一

化粧眉作口伝　附天児書・荘明綱目　合一冊　〔水島卜也〕　文政八年岩崎美隆手写本　二一〇・〇九九八　K二

＊文政八九月九日夜写早岩崎美隆

平義器談　一冊　伊勢貞丈　写本　二一〇・〇九九　I一

大平記武器談　一冊　伊勢貞丈　天保十年岩崎美隆手写本　九一一・二〇四　I二ノ三

＊右の書とみに写すへきゆゑありて十一月晦日のひるつかたより筆とりつれとひるのほどはなにがしかれがしなど人あまた出来てえものさずおなしき夜の亥の時はかりからうしてうつしをへつれど例のいそきてうつしとりつれはみたりかはしきをはいかゝはせん後いとまあらんをりあらため待るべし天保十年十一月晦日よしたか

†藤門雑記（第三）ノ第二冊に収む

諸鞍日記考注　一冊　伊勢貞丈　写本　七五六・九　I一

河内国誌料

河内名所記　（河内鑑名所記）　六巻六冊　三田浄久　延宝七年西村七郎兵衛刊本　二九一・二〇二　M一

河内志　（日本輿地通志畿内部河内国）　十七巻三冊　関祖衡　享保廿年茨城多左衛門等刊本　二九一・二〇二　S三

河内名所図会　三巻後篇三巻六冊　秋里籬島　享和元年京都出雲寺文治郎等刊本　二九一・二〇二　A三

増補改正河内細見図　一舗　高木容膝斎画　田原屋平兵衛等刊　二九一・二〇二〇一　N五

河内国上古水土考　一冊　伴林光平　岩崎美隆手写本　九一一・二〇四　I二ノ一

†藤門雑記第四冊に収む

河内扇の記　一冊　中西多豆伎　岩崎美隆手写本　九一一・二〇四　I二ノ一

†藤門雑記第五冊に収む

河内名流伝　二巻二冊　松尾耕三　明治廿七年著者刊本（活版）　二八一・二〇二　M一

法制

令義解　十巻八冊　林鵞校　慶安三年跋京都吉田四郎右衛門刊本　三三〇・二二三四　R一

＊（第一冊）　文政十一　稔九月以田豆舎大人之本校合了正従兵　岩崎美隆／美云此書書入之内集解之抄書ハ以田豆舎大人之本記セリ又美按ト記スルモノハ予ガ書入ル、者也且田豆舎本ノ書入ハ写誤脱字不少後日附本書可考

＊（第二冊）　文政九戌九月頭書早河内国人岩崎美隆／同十一年八月廿二日以田豆舎大人蔵本校合了／天保九年戌八月以荷田在満校本再校了

＊（第三冊）　文政十亥年三月六日頭書傍書早河内国人岩崎美隆／同十一年子八月十八日以多豆舎大人之本校合了／天保九年戌八月以荷田在満本再校了

＊（第四冊）　文政十亥正月頭書早河内国人岩崎美隆／文政十一子年

九月八日以田豆舎大人之本校合了／天保九年戌八月以荷田在満本再校了

*（第五冊）文政十亥正月頭書早河内国人岩崎美隆／文政十一子年十月朔校合了田豆舎大人之本ヲ借得テ了／天保九年戌八月以荷田在満書入本校了

*（第六冊）文政十亥三月頭書早岩崎美隆／同十一年戊子八月廿六日以田豆舎大人之本校合了／天保九年戌八月以在満校本校了

*（第七冊）文政七申十一月以鳥居氏本校合了美隆／文政十亥年四月頭書了／同十一子年八月廿九日以田豆舎大人之蔵本校合了此巻之内仮寧喪葬捕亡右三巻者先年鳥居氏之本ヲ以一校了今田豆舎大人之本ヲ以校合ス田豆舎本ハ田ノ字ヲ傍ニ注シテ分別セリ田豆舎本ニナキハ田無トシルス／天保九年戌八月以羽倉在満校本書入了

*（第八冊）右一巻文政七申十一月廿日校合畢村田春門々人河内国河内郡花園里人岩崎美隆（花押）／同九年戌十月十日頭書畢／同十一子年十月廿日以田豆舎大人蔵本校合了美云此一巻先年以鳥居並蔭主本校合セリ今更ニ田豆舎大人之本ヲ以校合ス混同スマジキ為ニ田豆舎本ニナキハ田無ト記シ鳥居氏ノ本ニナキハ傍ニ田ノ字ヲ記シテ目標トス田豆舎蔵本奥書云右以四天王寺明静院秘蔵契冲阿闍梨校本令校写一校了／天保九年戌八月以荷田在満校本再校了

令義解　存巻一ノ下　一冊　慶安刊本ノ後印本（村田春門旧蔵本）　三一〇・二三四　R一

令義解　十巻十冊　塙保己一校　寛政十二年跋刊本　三一〇・二三四　R一

令集解　四十巻（欠巻廿四至廿七・廿九・卅七）卅四冊　写本　三一〇・二三四　K一

令御抄　一冊　一条兼良　写本　三三一・一三四　I一

位職二令解　十二冊　壷井義知　写本　三一〇・二三四　F一

衣服令打聞　一冊　文政八年岩崎美隆手写本　二一〇・〇九九八　I一

*文政八年十月十六日夜以田豆舎大人之蔵本写畢河内国花園里人岩崎美隆

類聚三代格　存六巻（巻一・三・五・七・八・十二）六冊　天明二年写本　三一〇・二三五　R一

弘仁式　卅巻十五冊　写本　三一〇・二三五　K一

延喜式　五十巻五十冊　享保八年京師出雲寺和泉掾刊本　三一〇・二三五　E一

政事要略　存十五巻（巻廿五・廿七・五十一・五十三至五十七・五十九・六十一・六十七・八十一・八十四・九十五・不詳一巻）十五冊　（惟宗允亮）　写本　三一〇・二三五　K二

職原抄　二巻二冊　（北畠親房）　延宝七年井筒屋兵衛刊本　二一〇・〇九九七　K一

職原抄口訣私記　中家伝　二巻一冊　天明八年村田並樹写本ノ写　二一〇・〇九九七　S一

*（第一冊）文政七申年三月七日夜写畢岩崎美隆

*（第二冊）文政七申年三月十一日写岩崎美隆

職原抄弁疑私考　三巻三冊　壷井義知　文政七年岩崎美隆手写本　二一〇・〇九九七　T二

*文政七年申十月廿六日写早河内国花園里人岩崎美隆（花押）

理学

本草

本草和名　二巻二冊　深江輔仁　江戸和泉屋庄次郎刊本　四九九・九　F一

康頼本草　一冊　（丹波康頼）　写本　四九九・九　T二

妙薬手引草　一冊　独妙　天明三年大坂浅野弥兵衛刊本ノ後印本　四九九・九　S一

植物

柏伝　一冊　野田忠粛　天保七年岩崎美隆手写本　九一・二〇四 I ニノ一

＊右柏伝といふふみあるひとのもたるをかりてうつしとりぬ天保七申年二月美隆

†藤門雑記第六冊に収む

樺帖　一冊〔中井履軒〕写本　四七〇・四九　K一

算術

点竄問題集解式　一冊　写本　四九・一　T一

諸芸

薫集類抄　二巻二冊〔藤原範兼〕写本　七九二　F一

奕図　存巻四　一冊　服部立徹　文政五年京都植村藤右衛門等刊本　七五五　H一

語学

新撰字鏡　附考異　二冊　釈昌住（附）丘岬俊平編　享和三年大坂渋川清右衛門等刊本　八一三　S二

＊天保六年未十月九日夜以村田大人之本校畢河内国人岩崎美隆

倭名類聚鈔　廿巻五冊　源順　寛文七年大坂渋川清右衛門刊本　八一三　M一

＊文政六未年六月廿四日書入竟岩崎美隆／此和名抄ニ朱モテカケルハオノレマタイトワカヽリケルホド本居翁ノ書入本トテ多豆乃屋ノ翁ノモタマヘリケルヲカリテウツシヽ也サレド其本モジノカキタガヘナドイト多クテアカズオホエシカド私ニサカシラスヘクモアラネバ本ノマヽニウツシ置ツルヲコトシ或書賈ノ伊勢国ニテ得タリトテモテ来テ見セタル本ヲ見レハカノサキツトシウツシツルト大カタ同ジサマニテ文字ノアヤマリハヲサ〳〵見エズイトヨキ本ナリケレバヤガテ其書ヲカリテフタヽヒカウガヘアハセツ天保十己亥年十月岩崎美隆

伊呂波字類抄　十巻十冊　橘忠兼　天保十三年伴林光平手写本　八一三　T一

＊右全部十巻本尾崎正明蔵書手写以充杠園主人之誌本素柿園翁所伝自伴翁者也字々唯随旧本行々敢不容一介之私世務紛紜之際推以終功予有拙速之癖還恨成事過忽々耳矣天保壬寅冬十月十六日伴林光平

物品識名　二冊　水谷豊文〔文化六年〕刊本　八一三・〇二　M一

改正月令博物筌　欠十五冊（四月部欠）　鳥飼洞斎　文化五年吉文字屋市左衛門等刊本　九一・四〇七　T一

玉あられ　一冊　本居宣長　寛政十一年松坂柏屋兵助等刊本　八一五　M六

玉あられ論弁　（玉あられ論・玉霰附論・弁玉霰二論）一冊　加藤千蔭等　文化十二年銭屋利兵衛等刊本　八一五　T五

＊文政十三年三月五日書入早岩崎美隆

かたはみ艸　折一帖　殿村常久　文政十三年刊本　八一五　T四

てにをはのあけつらひ　一冊　岩崎美隆　自筆稿本（四丁二丁）　九一・二〇四 I ノ一

†藤門雑記第十八冊に収む

文学

和歌付歌謡

歌学

俊秘抄　（俊頼秘抄）二巻二冊　源俊頼　写本　九二・二〇四　M一

＊〔上冊〕天保九年戌正月元日以一本校合了岩崎美隆／〔下冊〕天保九年戌戌正月二日以一本校合了岩崎美隆

袋草紙　（清輔袋草紙）四巻四冊　藤原清輔　貞享二年京中川茂兵衛等刊本　九二・二〇四一　F三

＊天保十三壬寅年四月以延宝年間之写本一校了岩崎美隆荒木美穂

八雲抄　（八雲御抄）六巻七冊　順徳天皇　寛文元年洛陽中野道也刊本　九二・二〇一　J一

井蛙抄　六巻二冊　釈頓阿　文化三年長田鵠手写本　九二・二〇四一　T一

和歌庭訓抄　一冊　岩崎美隆手写本　九二・二〇四　I二ノ三

†藤門雑記〔第三〕ノ第一冊に収む

和歌用意条々　一冊　岩崎美隆手写本　九二・二〇四　I二ノ三

†藤門雑記〔第三〕ノ第一冊に収む

似雲聞書　一冊　写本　九二・二〇七　J一

比那能歌語　一冊　千家尊孫　岩崎美隆手写本　九二・二〇四　I二ノ二

†藤門雑記〔第二〕ノ第十七冊に収む

歌のあけつらひ　一冊　岩崎美隆　自筆稿本（三十六丁）　九二・二〇四　I二ノ一

†藤門雑記第六十二冊に収む

撰集

日本紀歌解槻乃落葉　三巻三冊　荒木田久老　文政元年跋刊本　九二・三一　A二

万葉集　存巻九至巻廿　六冊　寛永廿年洛陽安田十兵衛刊本　九二・三二

万葉集旁註　廿巻（欠巻之廿）十九冊　釈恵岳（寛政元年）刊本　九二・三二　K二

＊〔巻第二末〕文政三年二月廿八日書入畢岩崎美隆

詞林采葉抄　十巻三冊　釈由阿　写本　九二・三三　Y六

存十一巻十二冊（巻一・二・四至六・八・十二・十五至十八）　今井似閑　文政六年岩崎美隆手写本　九二・三三　I八

万葉緯

＊〔第一冊〕〔巻一ノ上〕此ふみつき〳〵かきもてゆくにもしのあやまれりとみゆるいとおほかりそかなかにはかうもやとおもはるゝもあれとおのかをちなき心もてあらためむはなか〳〵なることもやとてみな本のまゝにうつしおきつよき本を得たらむ時又あらためなむ文政六未四月廿二日うつしをへぬ岩岬美隆

＊〔第三冊〕〔巻一ノ下〕此書イト〳〵写誤多クテ見分カタキ所モアレト私ニアラタメンハ中〳〵ナルコモコソト思ヒテ皆本ノマヽニ物シツル也／又写シ行マニ〳〵思ヒ得タル今按ヲモイサヽカ頭書トシ又諸先生ノ説ヲモ用アリトオボユルフシ〳〵カキツケツ／トキハ文政六未四月廿七日写畢岩岬美隆

＊〔第四冊〕〔巻二〕文政六年未四月十八日写畢岩岬美隆／美隆イフ諸先生ノ説ヲ頭書ニイサヽカ物シツ文政六未四月廿八日夜

＊〔第七冊〕〔巻六〕文政六年未五月七日写之竟岩崎美隆

＊〔第八冊〕〔巻八〕文政六未五月二日写畢岩崎美隆

＊〔第十一冊〕〔巻十五〕文政六年正月八日夜写竟岩崎美隆／〔巻十六ノ上〕文政六年未正月十日夜写竟岩崎美隆

＊〔第十冊〕〔巻十六ノ下〕文政六年未春正月廿八日写竟岩崎美隆

*（第十二冊）〔巻十七〕文政五年十一月十二日写畢藤門美隆／天保十一年子年五月一校了／〔巻十八〕文政五年十一月十六日写早岩崎美隆／美隆いふ此書所〻誤字衍字脱字などをり〳〵みゆるを己レいまだうひまなびのほどなればようも考へたゝさずただいさゝかづゝ先達の説を傍にものしつ

万葉集私記　一冊　岩崎美隆　自筆稿本（三丁）　九四・五　I一ノ二

†諸書抜書第二冊に収む（但し未成書）

八代集抄　古今和歌集存二巻（巻十九・廿）・後撰・拾遺・後拾遺和歌集各廿巻・金葉・詞花和歌集各十巻・千載和歌集廿巻　卅二冊　北村季吟校　刊本　九二・三三五　K一

*〔古今集巻末〕文政七年正月廿八日書入竟岩崎美隆

古今余材抄　廿巻十二冊　契沖　写本　九二・三三五　K五

古今余材抄　存巻十九・廿　一冊　契沖　写本　九二・三三五　K五

古今和歌集打聴　存巻一至八・序一巻　九冊　賀茂真渕　〔寛政元年〕刊本　九二・三三五一　K六

金玉私抄　一冊　岩崎美隆手写本　九二・二四七　K二

歌仙家集　十五冊　正保四年中野道也刊本　九二・三三七　K一

歌仙家集補　三冊　冨士谷成章編　写本　九二・三三七　K一

*天保七年申二月大坂界筋本町角葛城長兵衛ニテ求之価銀五両

古今和歌六帖　六巻六冊　寛文九年刊本ノ後印本　九二・三三七　K二

*以田鶴舎翁所蔵之本書入早天保六未年閏七月十日河内国人岩崎美隆

月詣和歌集　十二巻附考一巻四冊　清水浜臣校　文化五年京都遠藤平左衛門等刊本　九二・三三七　K三

万代和歌集　二十巻七冊　文政五年岩崎美隆手写本　九二・二四七　M一

*此集はしも田豆舎のうしの人にうつさせ給へるをおのれまたうつしとりたる也されとそのもとの巻にうつしひかめたるはたもしのおちたるふしもみゆるは後にこそ考へあらたむへけれ今はうい〳〵しきかうへに書ひとつもたらぬ身のいかかはせんかくて文政の五とせといふとしの閏正月はつかあまり三日の日花まつほとの手つさみにうつしをへぬ岩崎美隆

夫木和歌抄　卅六巻目録一巻卅七冊　寛文五年皇都出雲寺文治郎等刊本　九二・二四七　F一

言葉の山くち　（言葉廼山口）四巻二冊　岩崎美隆編　天保四年自筆稿本　九二・三三七　I一

*言葉の山口はしかき　ことのはのみちにいりたゝんひとはそのこゝろをよくえたる師をとりてならひものすへくさしつきてハいにしへのよゝのうた書のよき歌をつねに見ならひくちならさんそまなひのむねにハ有ける　しかはあれといまのよに歌よみならふわらはへのともハこのふる道のしをリハなにとかやたと〳〵しうとみにはわきまへかたきふしもあれハなまわつらはしうおもひくしておほかたハちかき世にいてきたる紅塵集鰒玉集なとやうの書をしもまくらことゝハすめり　それはたほと〳〵にしたかひてハひたおもふきにあしともいふへきならねとその集ともよおほかたちかき世にその名きこえたるひとゝしいへはそれかしかれかしとおほくかそへつらねてその歌ともハこと〳〵にふかくこゝろしてえらひついてたるにもあらねハしかあまたか中にハいかにそやすこしなおくれてきこゆるもありしらへとゝこほりてきゝにくきあり又すかたハよけれと心のたよはしきこゝろハきこえたれとすかたのこち〳〵しきなとやう〳〵さま〳〵なれハかのうひまなひのともからさるけちめをもおもひたとらてならひまねハんにはなか〳〵なるものそこなひともなりぬへくや　わかひとそうの末〻にもしこのみちにいらんものゝするふみとものめちかきになつみてそのくちつきのあやしうほゝゆかみもてゆかハくちをしかるへきことゝあひなううちうめかるゝをり〳〵もあれハいかてちかき

よのうたとものしらへなたらかに心きこえたるをえりてのこしおかはやとおもひなりてこのふみハものしたるになん　さるは世に名高きひと〳〵のみにもあらすわかまなひのはらからさらぬおほよそひとのをもおかしときゝおきつるハもらさすかきつらねたりまたおのかあやしきたゝことのなかに師にみせまゐらせしをりをりさもやとゆるしさまにのたまへる歌ともをさへかつ〳〵かきましへたるハいと〳〵ひとわらへにものくるをしきわさなれど此ふみはしもおほやけさまのむね〳〵しきにハあらてたゝうまこのすゑ〳〵にも吾なきかけをしのふくさつむへきかたみかてらとてなりけり　そも〳〵此集の中に多豆廼屋の翁の歌をしもことにおほくつらねたるハ吾家の仏たふとしとにハあらねとこの大人のことのはわさとならぬにほひありていひしらすめてたくおほゆれはなり　題のついてさまのみたりかはしきなといますこしうるはしうしたゝめものすへきをさるかたにものうき本性なれハいかゝハせんとてもかくてもわたくしのすさひなれハなにかはとてなむ

天保四年十月河内国花園里岩崎美隆

近代和歌集　八冊　岩崎美隆編　自筆稿本　九二・二〇四 I 二ノ一ノ四七～五三　九二・二五七 C一

†藤門雑記第四十七冊至第五十三冊に収む

百人一首拾穂抄　二巻四冊　北村季吟　天和元年跋刊本　九二・二四七　K三

百人一首改観抄　五巻一冊　契沖　延享四年序刊本　九二・二四七　K一

＊文政六癸未年十二月十二日夜書入竟更考諸抄説抄書之聊加今按且以俗語解之者●印ヲ以為目標一柳春門〻人河内国河内郡花囿里岩崎美隆

百首異見　五冊　香川景樹　文政六年江戸須原屋茂兵衛等刊本　九二・二四七　K四

＊天保六未年後七月廿五日夜終業河内国花園里人岩崎美隆

家　集

〔後鳥羽院御集〕　一冊　承応二年刊本　九二・二四八　G一

恵　慶　集　一冊　釈恵慶　写本　九二・二三八　E一

四条大納言公任家集　一冊　藤原公任　寛政二年前波黙軒手写本　九二・二三八　F二

散木奈歌集　十巻三冊　源俊頼　安永八年小沢芦庵写本ノ写　九二・二三八　M一

薩摩守忠度集　一冊　平忠度　写本（入江昌喜旧蔵本）　九二・二三八　T一

†二条院讃岐集と合綴

二条院讃岐集　一冊　二条院讃岐　写本（入江昌喜旧蔵本）　九二・二三八　T一

†薩摩守忠度集と合綴

山　家　集　一冊　釈西行　写本　九二・二三八　S二

＊此本ハ京人紀ノ氏辰といふひとの貞享ノ比の人もたりしよし天保十四卯年なにはの書商人の手より得たる也かくてまたことし和泉国界人尾崎正明のもたれたる古写本をかりてかたはらに朱もてかきくはへつ天保十五辰のとしの九月十二日岩崎美隆

楢　園　集　一冊　小寺清先　天保三年京都河南儀兵衛等刊本　九二・二五七　K二

岩崎美隆歌集

渚のこつみ　一冊　岩崎美隆　自筆稿本　九二・二六　I一ノ一

＊渚のこつみ自序　よろつのさえひとつとしてたはやすきはなきをことに詞の花はつきにあちはひとしにかうかへてしたゝかにゆるくましき心のたねをうゑすはつきつきしき色あとにはさくへうもあらすなむ　おのれ多豆舎の大人の御教をうけてとし比このわさをこゝろにいれてまなふものからもとよりをれましきこゝろのさかにおかしとゆるさるゝばかりのことくさははつかにもえつみいてぬをわれなからいとあまりにもとうちうめかれてくちをしとも

くちをしきにまして人のおもはむことのいと〳〵やさしくおもてをおくかたもおほへねとさりとてとしころなきてをいたしてよみいてつるともを磯のこつみとかいやりすてむもあちきなくやとおもひとりてかうつき〳〵にかいしるしつるはなほ例のをこかましきこゝろくせならんかし　しかはあれとひとに見せててむいかれむのこゝろにはあらすたゝかのなにかしのきしにおしいなるくさをつゝましとてのわさにしあれはさりとも人見ゆるしてむかし
かふちの国花園さと人いはさきの美隆

杜園愚草　一冊　岩崎美隆　自筆稿本　九一・二〇四Ⅰ二ノ一ノ七三
†藤門雑記第七十三冊に収む

〔詠草〕　一冊　岩崎美隆　自筆稿本　九一・二〇四Ⅰ二ノ一ノ八七

詠草　一冊（文政三年四月至六月詠草）　岩崎美隆　自筆稿本　村田春門自筆批　九一・二五八Ⅰ一ノ三ノ二

備忘　六冊　岩崎美隆　自筆稿本　九一・二〇四Ⅰ二ノ一ノ七四～七七　八〇～八一
第一冊（文政十二年五月至文政十三年六月詠草）
第二冊（天保三年四月至閏十一月詠草）
第三冊（天保三年閏十一月至天保四年五月詠草）
第四冊（天保四年五月至天保五年夏詠草）
第五冊（天保六年正月至天保七年二月詠草）
第六冊（天保十年正月至二月詠草）

歌日記　二冊　岩崎美隆　自筆稿本　九一・二〇四Ⅰ二ノ一ノ七八　七九
第一冊（天保八年四月至六月詠草）
第二冊（天保八年六月至八月詠草）

〔詠草〕　一冊（天保五・八・九・十・十二年詠草抄）　岩崎美隆　自筆稿本　九一・二五八　Ⅰ一ノ二

詠草　一冊　岩崎美隆　自筆稿本　九一・二〇四Ⅰ二ノ一ノ八六

杜園大人詠草写　（杜園詠草）三冊　荒木美蔭編　弘化三年荒木美蔭手写本　九一・二五八　Ⅰ一ノ二

杜園大人詠草写　（なきさのみくつ）一冊　荒木美蔭編　安政六年荒木美蔭手写本　九一・二五八Ⅰ一ノ三ノ一

杜園詠草　七巻　附岩崎美隆先生伝　一冊　土橋真吉編　大正五年岩崎清平刊本（活版）　九一・二五八　Ⅰ一ノ一

村田春門歌集

日次雑事記　一冊（文化四年歌文稿）　村田春門　自筆稿本　九一・二〇四Ⅰ二ノ一ノ八二

〔田鶴舎日次記辛未〕　一冊（文化八年一月至七月歌文稿）　村田春門　自筆稿本　九一・二〇四Ⅰ二ノ一ノ八三

〔田鶴舎日次記癸酉〕　一冊（文化十年正月至五月歌文稿）　村田春門　自筆稿本　九一・二〇四Ⅰ二ノ一ノ八四

備忘　一冊（文化十五年正月至夏歌文稿）　村田春門　自筆稿本　九一・二〇四Ⅰ二ノ一ノ八五

〔村田春門家集〕　一冊　村田春門　天保四年岩崎美隆手写本　九一・二〇四Ⅰ二ノ一ノ四九
＊天保四巳年正月九日写早美隆
†藤門雑記第四十九冊に収む

村田春門自撰集　一冊　村田春門　岩崎美隆手写本　九一・二〇四Ⅰ二ノ一ノ五一
†藤門雑記第五十一冊に収む

〔村田春門家集〕　二冊　村田春門　岩崎美隆手写本　九一・二〇四Ⅰ二ノ一ノ四八　五三
†藤門雑記第四十八・五十二冊に収む

村田春門社中歌集

かふち集　（河内集）　中西重孝・岩崎美隆等編　己卯・庚辰　二冊　文政二・三年刊本　九一・二五七　N一

〔田鶴舎社中詠草稿〕　一冊（里擣衣・山紅葉・経年不絶恋）　村田春門自筆批　写本　九一・二六七　S一

〔田鶴舎社中詠草稿〕　一冊（余寒月・帰雁・通書恋）　村田春門自筆批　写本　九一・二六七　M一

月並和歌　八冊　岩崎美隆編　自筆稿本　九一・二〇四Ⅰ二ノ一ノ五四～六一

第一冊（天保三年正月至四月）　五四
第二冊（天保三年五月至八月）　五五
第三冊（天保三年八月至閏十一月）　五六
＊右八月之巻天保三辰年十二月廿八日夜写畢岩崎美隆／天保四巳年正月廿二日写畢美隆
第四冊（天保三年十二月至天保四年三月・附天保十四年春加納諸平判歌合）　五七
＊右歌合天保四巳年三月開巻同月十九日写畢美隆
第五冊（天保四年四月至九月）　五八
＊右五月之巻十二月十九日写畢美隆
第六冊（天保四年十月至天保五年二月）　五九
第七冊（天保十三年九月至天保十四年正月附弘化二年）　六〇
第八冊（天保十二年八月至弘化元年十二月殿村社中歌会）　六一

〔中西重孝詠草〕　一冊　中西重孝　岩崎美隆手写本　九二・二五八　N一

歌合

左大将家百首歌合　（六百番歌合）五冊　天保六年浪華河内屋喜兵衛等刊本　九二・二六四　R一
＊天保十二丑年二月五日以活字本一校了岩崎美隆

鈴之舎歌合　二巻二冊　本居宣長　文政六年岩崎美隆手写本　九二・二六五　S一
＊右寛政元年四度哥合本居大人直筆を以写畢むら田の並樹／文政六年七月二日田豆舎大人之本を以写早岩崎美隆

九十六番歌合　一冊　本居宣長判　写本　九二・二六五　M一

六十四番歌結　一冊　香川景樹　文政十二年江戸須原屋茂兵衛等刊本　九二・二六五　K二

江戸職人歌合　存巻上　一冊　文化五年序刊本　九二・二六五　E一

〔校正職人歌合〕　存巻中　一冊　刊本　九二・二六五　K一

狂歌

狂歌無射志風流　存下巻　一冊　四方真顔・森羅万象編　享和四年江戸万屋太治右衛門刊本　九二七・二　K三

古代歌謡

梁塵愚案鈔　二巻二冊　〔一条兼良〕　文政三年岩崎美隆手写本　九二・五　I一
＊文政三年七月廿六日写早岩崎美隆

神楽歌新釈　一冊　本居内遠　天保十四年岩崎美隆手写本　九二・二〇四　I二ノ二
＊此神楽哥新釈ハ京人堤散拾遺右岑ぬしことしの春紀伊国に本居内遠ぬしのもとにものせられけるとき古今集の私説を内遠主の本にかきそへてえさせられけれハ其よろこひとて堤主におくられけるとぞ　こハ本居氏の家にもいまだ板にもゑらでひめおかるゝよし堤主紀のくによりのかへさにおのれがもとにたちよりてみせられけるをしばしかりえてうつしとりたるになんときに天保十四年四月廿三日岩崎美隆
†藤門雑記（第二）ノ第四冊に収む

小説・物語

物語

伊勢物語新釈　六巻六冊　藤井高尚　文政元年刊本　九二三・三二　F一
＊文政七甲申年二月六日夜書入終河内国河内郡花園里人岩崎美隆／同十亥年三月書入了／同十亥年四月再書入了

大和物語　二巻二冊　上田秋成校　享和三年東都西村源六等刊本　九一三・三三

うつほ物語　三十冊　延宝五年刊本　九一三・三四

*〔楼のかみ巻末〕此一冊以或写本校了天保七年申七月美隆／或写本奥書云此本言葉ツヽキ手尓於波仮名遣等何レモ不審多シトイヘトモ本ノマヽ令手写後見之輩右之以心得可有一覧者也于時慶長十五年庚戌三月十四日箇菴主道人

おちくぼ物語　四巻四冊　上田秋成校　寛政十一年京都額田正三郎等刊本　九一三・三五

*此ものかたりひとわたりよみたるにてにをはなとのたかひたるがのちのちのひがうつしにやとおもはるゝもおほかれとくはしうよみかうかへんもいとまいりぬへきわさなればおほかたはもらしつことのついでにいさゝかおもひよれることゝもかいつけたれとそもくはしうはえしたゝめものせすもらしつることもおほかるを今またいとまあらんをりにしるすべし天保六年九月岩崎美隆

*天保七年七月さるよしありて石見国浜田の殿の文庫なりし本を得たりさてこのすりまきとよみあはせ考るにかたみによきあしきあれとおほかた文字のたかへるかきりはかたはらにものしつ又かの本の一と二の巻には何ひとのかけるにかあらんことのこゝろいさゝかつゝしるしたるをそもまた上にうつしおきつさるはしめよりおのかおもひよれることゝもをもかつ〳〵ものしたれはこのあるひとの説のかきりは頭にまじるししてしるしわきたり見ん人さるこゝろして美隆ふたゝひしるす

河海抄　二十巻十冊　写本　九一三・三六一　Y一

湖月抄　附発端・系図・表白・雲隠説各一巻・年立二巻六十冊　北村季吟　延宝元年跋林和泉等刊本　九一三・三六一　K一

*（第一冊）文政六年七月書入了／文政十亥年十一月再書入早岩崎美隆／文政十二丑年七月以村田大人之本書入畢

*（第二冊）文政の七とせといふとしの正月書入了岩崎美隆／文政十二丑年七月以村田大人之本再書入早美隆

*（第三冊）文政七年正月書入早／文政十二丑年七月以村田大人之本再書入早美隆

*（第四冊）文政十二丑年七月以多豆舎大人本再書入早岩崎美隆

*（第五冊）文政十二年七月以村田大人之本書入早ふちのかとのあるし美隆

*（第六冊）文政十二丑年七月以村田大人之本書入了美隆

*（第七冊）文政九年正月書入早美隆／同十二年五月廿五日以多豆舎大人之本再書入了

*（第八冊）文政九年正月書入早／文政十二丑年六月一日以田豆舎大人之本再書入早美隆

*（第九冊）文政九年二月書入了岩崎美隆／同十二年五月以村田大人之本再書入早

*（第十冊）文政九年十月書入了岩崎美隆／同十二年五月晦日以田豆舎大人之本再書入早

*（第十二冊）文政八年戊八月十二日書入早岩崎美隆

*（第十五冊）文政十二年十月廿三日以村田大人之本再書入早岩崎美隆

*（第十六冊）文政十二年十月廿三日以村田大人本再書入早岩崎与之多嘉

*（第十七冊）文政十二丑年十月廿八日以田豆翁本再写早美隆

*（第十八冊）文政十二丑年十月以村田大人之本再書入早岩崎美隆

*（第十九冊）文政十二年丑十一月朔日以田豆舎翁之本再書入早岩崎美隆

*（第廿冊）以村田大人之本書入早天保七年申正月十一日美隆

*（第廿二冊）天保七申年正月廿八日以村田大人本書入早岩崎美隆

*（第廿三冊）天保七年申二月二日以村田大人之本書入早美隆

*（第廿四冊）天保七年申正月以多豆舎大人之本書入早美隆

*（第廿五冊）真渕翁説以多豆舎大人之本書入了天保六年未十一月六日岩崎美隆

*（第廿六冊）岡部翁説以村田大人之本書入早天保六未年十一月美

隆

*（第廿七冊）　岡部翁説以村田大人之本書入早美隆

*（第廿八冊）　岡部大人之説以村田大人之本書入早天保六年未十一月八日美隆

*（第卅冊）　県居翁説以村田大人之本書入早天保六年未十一月九日美隆

*（第卅一冊）　文政十龍輯丁亥正月晦日書入早河内国人岩崎美隆／県居翁説以村田大人之本書入早天保六年未十一月九日美隆

*（第卅二冊）　文政十年二月二日夜書入早河内国人岩崎美隆／県居翁説以村田大人之本書入早天保六年未十一月十日美隆

*（第卅三冊）　文政十龍集丁亥年抄春廿五日書入了岩崎美隆／県居翁説以村田大人之本書入早天保六年未十一月九日美隆

*（第卅四冊上）　文政十丁亥年四月廿四日書入了岩崎美隆／真渕翁之説以田鶴舎大人本書入了天保七年申六月三日

*（第卅四冊下）　文政十亥八月六日書入了岩崎美隆／天保七年申六月三日夜以村田大人之蔵本書入了美隆

*（第卅五冊）　文政十一子年六月書入早美隆

*（第卅六冊）　文政十一子年六月書入早ふちのかと美隆

*（第卅七冊）　文政十一子年美那月書入早岩崎美隆

*（第卅八冊）　文政十一子年六月書入早美隆

*（第卅九冊）　文政十一子年十月書入了美隆

*（第四十八冊）　右真渕翁新釈草稿以多豆廼屋大人之本書入早天保六未年八月十二日朝より筆とりて同しき夜写了岩崎美隆

*（第四十九冊）　文政十二年五月書入了岩崎美隆／右県居翁説天保六未年八月十四日以多豆舎大人本書入早美隆

*（第五十冊）　文政十二丑年五月書入早岩崎美隆／県居翁説以田鶴舎大人之本書写早天保六未年八月十四日美隆

*（第五十一冊）　右県居翁説天保六年未八日十九日以多豆舎大人之本書写早岩崎美隆

*（第五十二冊）　文政十二丑年六月四日書入早岩崎美隆／天保六未年九月廿日以多豆舎大人之本書写早此巻新釈闕

*（第五十三冊）　文政六年癸未八月三日書入畢　玉ノヲクシ書入　本居宣長門人一柳春門々人河内国河内郡花園里人岩岬美隆／文政十二丑年六月再書入了美隆／天保六未年九月廿日以多豆舎大人之本書写早

源註拾遺　七巻七冊　契沖　写本　九三・三六一　K二

清石問答　一冊　清水浜臣問・石川雅望答　岩崎美隆手写本　九一・二〇四　I二ノ一

*右清石問答は清水浜臣主ひとゝせ難波にのほられし時吾翁のもとにおくられたるをうつしとりつ　奥書には一柳様　清水　此書御内覧他の学者たちへも先御沙汰被下間敷候とみゆ

†藤門雑記第十五冊に収む

少女巻抄注　一冊　鈴木朖　文政十三年出雲寺文治郎等刊本　九三・三六一　S一

すみよし物語　一冊　文政三年村田春門写本ノ写　九三・四一一

*右住吉物語校本以故楽前翁自筆本書写早天保十二丑年十月岩さきの美隆／（普通のすりまきをもて文政三年八月十五日写早さゝくま翁春門／同十年二月念六日朱校合早）

説話物語

日本国現報善悪霊異記　三巻一冊　天保十三年岩崎美隆手写本　一八四　K三

*此日本霊異記三巻としころ見まほしくてこゝかしこにあさりつれといとえかたけれはくちをしうおもひうんして過ぬるを堺人尾崎正明主群書類従の中なる本をもたれたるよしきゝてせちに見まほしきよし伴林光平主口次をへてかたらひしかはいとやすきことなりとてやかて此三巻をかしたまへるをまちえたるこゝちうれしとはおろかにこそすなはち天保十三壬寅の四月廿五日より筆とりて五月よかの日うつしをへぬ岩崎美隆

日本霊異記攷証　三巻三冊　狩谷望之　刊本　一八四　K二

今昔物語集　卅一巻廿九冊（欠巻二・十四・廿二・廿三）写本　九一三・三七

沙石集　十巻十冊　釈無住　天和三年吉野屋徳兵衛刊本　一八九　M四

古事談　六巻六冊　写本　三八八・一　K一

＊天保十一庚子年四月七日以古写本一校畢河内国花園里人岩崎美隆

続古事談　六巻三冊　写本　三八八・一　K二

＊右続古事談以群書類従本校合了天保十五年壬辰（ママ）七月廿八日岩崎美隆

歴史物語

栄花物語　四十巻栄花物語系図一巻　廿一冊　明暦二年洛陽林和泉掾刊本　九一三・三九二

＊右栄花物語全部以西田直養蔵本校合了天保十五甲辰年四月廿三日岩崎美隆

大鏡　八巻八冊〔京都風月荘左衛門〕刊本　九一三・三九三

続世継　十巻八冊（欠巻五・八）写本　三一〇・三八　S一

＊天保十四癸卯年四月以活字本一校畢岩崎美隆

水鏡　三巻三冊〔京都風月荘左衛門〕刊本　九一三・四二三

増鏡　十冊　京都風月荘左衛門刊本　九一三・四二三

＊弘化二年巳四月以尾崎氏蔵本校合了岩崎美隆／此ますかゝみのかたはらに朱もてかけるかぎりは我友尾崎正明（界の人）のひめもたれる本をかりてうつしたる也尾崎主の本は江戸人黒川春村といふ人のひめもたる古きうつし巻をなんこれにこひてからうしてかりえてすきうつしといふものにしてあたらしくとぢられたる草紙也美隆

池のもくず　十四巻五冊　荒木田麗　写本　九一三・四八　A一

近世小説

しみのすみか物語　二巻二冊　石川雅望　文化二年大坂河内屋太助等刊本　九一三・六五　I一

梅かえ物語　一冊　石川雅望　文化七年跋江戸蔦屋重三郎刊本　九一三・六五　R四

道中膝栗毛六編　存下編一冊　十返舎一九　刊本　九一三・六九　J一

随筆

枕草子

枕草紙異本　一冊　天保十二年岩崎美隆手写本　九一四・三一

＊這本以後光厳院宸翰不違一字書写功了　このまくらさうし異本としころえまほしうてなにはのふみあきひとともにもかたらひてこゝかしこあさらせつれといかなるにか此ちかきあたりにはふつにもたる人もきこへねはいと〳〵くちをしき事におほえしをこたひ紀の国和哥山なる加納諸平主のもとにはしめてせうそこして此ことをうれへ申しかは家にひめもたれたるいとよきうつしまきをみせたまひきいと〳〵うれしうやかてふてとりて天保十二年十月九日の日よりおなしき十一日の夜まてにうつしをへぬ　さるは此としころこゝちそこなひて身もいたつかはしけれと此加納主のこゝろさしのいと〳〵うれしくていかてとくうつしをへてもとのはかへしてんとてくるしさをねんしてなん　さてもとの書かんなのたかへることなとはいと〳〵おほかれとすへておのかさかしらはくはへしとてみな本のまゝにうつしたるなり河内国花園里人岩崎美隆

＊加納氏ゟ之返事ニ云（上略）然は枕草紙之校本御かし可申上旨いとや

すき御事ニ候彼書ハ十五六年前にや待りけん種〻の本とも校置候へ共今度被仰越候活字以下三本之外ハ素本之印本を校のみニ御座候尤素本ハとるへき事なし今一本群書類従ニも入候異本はけに異本ニて校正もわつらハしく覚候ほとの事にて大底ハ春曙抄へ書入置候へ共誤脱等も難斗候故即其原本一冊さし上申候写本之儀ニ付是又誤字も相見え候へ共類従にあるよりハ古き写しならん共存し候間入御覧申候ゆる〳〵御覧可被下候扨此書多年御熟覧ニて今度御考説とも御見せ被下辱次第ニ奉存候数ケ条すへて動なき御考ともニていと〳〵うれしく奉存候野生も一二おもひより候事御同案も有之候ニ付任命乍失敬其段御考説之上層ニ記し申候宜敷御取捨可被下候下略

*此書再校ニ羊ト記セルハ群書類従ノコト也コハ堺人尾崎正明主ヨリ加納氏ノ写本ハ誤モソアルヨシテ今一タヒ考ヘ合セヨトテ群書類従ノ本ヲ見セラレタルヲ以テ天保十三寅年三月廿日ニ校ヘ合セタル也

春曙抄　十二巻六冊　北村季吟　延宝二年跋刊本　九一四・三一　K二ノ三

春曙抄　十二巻四冊　北村季吟　延宝二年跋刊本　九一四・三一　K二ノ二

*（第一冊）文政十二丑年七月三日書入早岩崎美隆
*（第二冊）文政十二丑年七月六日書入早岩崎美隆
*（第三冊）文政十二丑年七月十日書入早美隆
*（第四冊）文政十丁亥年四月十四蓂書入了岩崎美隆／文政十二丑年七月十三日再書入早／惟中ノ拾穂抄及十巻ノ抄右二本天保十亥年六月比校了／活字本同年十月校了

†本書の中の岩崎美隆書入れは昭和五年折口信夫博士によって『国文学註釈叢書』第十六第十七巻の二冊に収めて校刊せられ、それには「枕草紙杠園抄」の題名が折口博士によって名付けられた

枕草子私記　一冊　岩崎美隆自筆稿本（十五丁）　加納諸平自筆批　九一四・三一　I二

*天保十二丑年五月美隆／此御説ともいとおかしく見侍るまゝにめしさもわすれていさゝか書そへ待り九月十一日諸平

†枕草子私記は折口信夫編輯『国文学註釈叢書』第二巻に飜刻、同書第十七巻に影印が収めて昭和五年に校刊せられた

枕草子私記　一冊　岩崎美隆　自筆稿本（十一丁）　九一一・二〇四　I三ノ一

†藤門雑記第六十九冊に収む

枕草子考　一冊　岩崎美隆　自筆稿本（十三丁）　九一一・二〇四　I三ノ一

†藤門雑記第廿八冊に収む

清少納言記校異　一冊　〔加納諸平〕　岩崎美隆手写本（十九丁）　九一一・二〇四　I三ノ二

†藤門雑記〔第二〕ノ第卅一冊に収む

枕草子の中の説　一冊　尾崎正明　岩崎美隆手写本（三丁）　九一一・二〇四　I三ノ一

*天保十三寅年二月界之尾崎氏ゟいひおこされたることとも

†藤門雑記第廿八冊に収む

日記・紀行・消息・文集

校異首書土佐日記　一冊　市岡猛彦校　文政元年松屋善兵衛刊本　九一五・三二

*文政六年二月十八日書入寛岩崎美隆

蜻蛉日記　三巻八冊　大坂河内屋嘉七刊本　九一五・三三

*文政七年申三月廿四日校合畢一柳春門々人河内国河内郡花園里人岩崎美隆

讃岐典侍日記　一冊　写本　九一五・三七

源家長日記　一冊　〔源家長〕　文政九年岩崎美隆手写本　九一五・四九　M一

*右家長日記一巻以鳥居氏蔵本写早文政九戌年三月十八日河内国花そのゝさと人岩さきの美隆

†袋之図・後中記と合綴

霊元帝修学院御幸宸記　（霊元法皇御幸宸記）　一冊　写本　三〇・〇九　R一

野さらしの紀行　一冊　松尾芭蕉　岩崎美隆手写本　一三一・二四

＊今の世にはいかいとてひと〳〵のものするわさよおのかえしらぬ道なれはそのよしあしいふへきならねといかなるにかあらんいとゆかしけなくことにさるともからのかける文章なといふものは見るもうるさくかしらいたきこゝちするをこのころあるひとのもとよりこれ見よとておこせたるを見れははせをといふ翁のかゝれたる道の記也けりよみもてゆくにちりの世のけしきをさへわするゝこゝちしておかしうもあはれにもおほゆれはのちのなくさめくさにもとうつしおはりぬ藤のかとのあるししるす

†賀茂翁消息と合綴

名草の浜つと　一冊　本居大平　写本　九一五・五　M一

雙玉紀行　（きみのめぐみ・なくさの浜つと）一冊　本居宣長・本居大平　京都勝村次右衛門等刊本　九一五・五　S一

＊此日記うつし巻にてつたはれるとよみ合するにたかへることともこれかれ見ゆるをかたはらにかきしるしつまたかたへにまろきましるししたるはうつし巻にはなきもしのかきりなり見ん人其心して天保七年申四月十六日岩崎美隆

吉野花見の記　一冊（天保三年三月記事）　岩崎美隆　自筆稿本（七丁）　九一一・二〇四　I二

†藤門雑記第五冊に収む

熊野日記　一冊（天保六年閏七月記事）　中西多豆伎　岩崎美隆手写本　九一八・五　I二

＊跋　なにかし法師の熊野の日記とていまの世につたハれるハめてたきふミにハあれとあかりたる世のすさひにて今やうとハかはりたることもおほかめれハたゝいにしへしのふくさハひにハもてあそふへくいまのあるやうをしらんにハけとほくもてはなれておほゆるをこの日記よいたくもかゝれたる哉さるハたひの日記とてかうやうの事ものしたるものもあまた見るめしらかふめれとおほかたハさとひことのまゝにしるしてゆかしけなきかおほくまたことさらにふるめきたる詞もてあなかちにえんたちけしきはミたるかなか〳〵にこゝろおくれてみゆるもあるをこのふみハなにやくれやとありしことのふしふしいとよくねれてさすかにいやしけならすなたらかにものせられたるあなめてたと見えてめつらかにもおかしうもおほゆかしかゝれハいまのあるかたちをしらんにもかしこの道のしるへとせんにもかたかたにえうあるふみ也けりとめてのあまりに長言するをなとかハさしもとしりうこつひともあるへしさハれものめてするひとへこゝろハおしうめてゝもえあらてなん天保七年正月岩崎美隆しるす

†近世歌文集第五冊に収む

明石のうらつと　一冊（天保七年八月記事）　村田嘉言　岩崎美隆手写本　一三一・二四

†賀茂翁消息と合綴

播磨路の日記　一冊（天保九年四月記事）　荒木美穂　岩崎美隆手写本　九一一・二〇四　I二ノ一

†藤門雑記第五冊に収む

消息文集

賀茂翁消息　（ふゝくろ）一冊　賀茂真渕　天保七年岩崎美隆手写本　一三一・二四

＊おのれはつきの末つかたよりむねをやみていとくるしかりけるをよくつくろひたまへしゝこらかしつるときはいみしき大事にこそとくすしもいへはおなしさとなる親類のもとにかそかなる家のあるにうつり住て薬なともものしける　かゝれはつねにこのめる書見るわさなとさへいともうくてなにすともなくあけくらすに一日友なる塩川正明（水走里人也）来てかゝるものえたりとてふところよりとうてゝみするを見れは賀茂翁の消息文を吾多豆舎翁の手つからうつしものせられたるになんありけるさるはことさらにみやひことものてかゝれたるにはあらてうち〳〵のうちとけことゝもを筆のゆくにまかせてかゝれたるともにて中〳〵におかしうめつらかなる

ふしもあれはいかてうつしおかはやとおもへと筆なととれは肩のあたりさへいみしういたみてせんかたなくくるしけれはさもえ物せてむなしくもたしおきつるをなほいとくちをしくてせめてたへかたきをためらひたすけて神無月の十六日より筆とりてからうしておなしき十かあまり八日といふにうつしをへぬ　かゝれはいとゝしく筆のゆくへもかきみたりていとみくるしけれととみのしわさにしあれはいかゝはせん天保七とせといふとしの神無月十八日
河内国人岩さきの美隆

消息文例　二巻二冊　藤井高尚　文化二年京都蛭子屋市右衛門等刊本　八一五　F三

＊消息文例二巻文政十丁亥年閏六月書入了岩崎美隆

おくれし雁　一冊　藤井高尚　文化八年浪華河内屋儀助等刊本　八一六・八　F一

近世文集

好古文藻　一冊　大坂播磨屋九兵衛刊本　九一四・五〇　K一

〔近世歌文集〕　七冊　岩崎美隆編　自筆稿本　九一八・五　I二

＊（第一冊首）　さきつころちかき世の人のうたとよみ文とかきおけるともをてならひのやうにかきしるしつるかいつとなくひとゝちの書となりぬまたそかのちかすおほくみあつめたるもあるをいたつらにおとしあふしなんもくちをしうて此ひとまきにつき〳〵うつしもてゆかんとすさるはいとやうなきことゝ人のもときおひぬへけれとよしやわれはかきつめしことはの花をおろかなるこゝろのいろのしたそめにせんとおもひとりてかくものしたるになん藤のかとのあろし美隆

＊（第三冊末）　まなひのすちにもあそひのかたにもみち〳〵ありてそのみちにいりたちてはいつれも〳〵おかしきふしありてすてかたかめれとなほ哥よみふみかくみちにさしつきておもしろきみちはあらしとおほゆるはかたおちなるこゝろのなしにかあらむいてやちかき比は哥のうへはさらにもいはすふみかくわさにもかしこきひと〳〵おほくいてもてきてあるはむらさきのにほはしきねをもとめあるはいそのかみふるきよのかう〳〵しきふりをうつしなとさま〳〵におもむけて物すなるはいつれとなくゆゑありてゆかしく心にくゝなむこのころちかきよのその名きこえたるをはしめいまの世のさるかたにかしこき人〳〵の物しつる文ともを見あつめきゝあつめて此ひとゝちを物してあさゆふのこゝろやりくさとなしぬされともとよりあやしきみゝすかきをいそきものしつれはもしのあやめもわかれぬふし〳〵おほからんかし　ことそへていふまたかしこき人〳〵のよめる長哥をもことのついてにましへしるしつ文政九年四月廿六日河内国花園のさと人岩崎美隆

俳文集　一冊　岩崎美隆編　自筆稿本　九一一・二〇四　I二ノ一ノ七二

†藤門雑記第七十二冊に収む

漢詩文

経国集　存六巻四冊（巻一・十・十一・十三・十四・廿）写本　九一九・三　K一

本朝文粋　十四巻十五冊　寛永六年田中長左衛門刊本（古活字版）　〇八一　F三

本朝文粋　十四巻八冊　正保五年跋林甚右衛門刊本　〇八一　F三

訳文筌蹄　存巻四　荻生徂徠　一冊　刊本　八一五　O二

作文志穀　一冊　山本北山　安永八年須原屋伊八刊本　八一六　Y一

文藻行潦　存巻一・二　一冊　山本北山　天明二年刊本　八一三・二　Y一

和漢今古文集　一冊　岩崎美隆編　自筆稿本　九一一・二〇四　I二ノ一ノ七一

†藤門雑記第七十一冊に収む

近世作文集　一冊　岩崎美隆編　自筆稿本　九一四・五　I一ノ三

魁本大字諸儒箋解古文真宝後集　二巻一冊　寛政八年小川太左衛門刊本　九二四・四〇八　K一

附録　岩崎美隆略伝

岩崎美隆（いわさき・よしたか）、通称清平、藤門（ふじのかど）、杠園（ゆずるはその）と号す、河内国花園村の人、弘化四年七月十六日歿、年四十四。

岩崎美隆の伝記は、『河内名流伝』（松尾耕三著・明治廿七年刊）、『河内先哲伝』（土橋真吉著・昭和十七年刊）、『杠園詠草』（土橋真吉編・大正五年刊）の諸書にその略伝が記載されているが、その中から『河内名流伝』の記事を次に掲出し、加えて、折口信夫博士が美隆の『枕草紙杠園抄』解題として執筆された『杠園抄解説』（『国文学註釈叢書第十七巻所収　昭和五年刊）の全文を併録させていたゞいて、岩崎美隆略伝にかえることにする。

河内名流伝　松尾耕三

岩崎美隆は河内郡花園村の人なり。清平と称す。藤門、杠園はその号なり。人となり聡敏、夙に才子の誉あり。少より和歌を好む。長ずるに及んで記覧に長じ、筆札に巧みなり。古今の国雅を猟渉して精究せざるはなし。初め美隆足疾あり。笈を担うて師に従うことを得ず。よって天下の歌書を蒐め、庫を築いて其中に潜む。枕藉含咀、遂にその蘊奥を窮む。平生作る所、万余首を下らず。その足いまだ一州の外に出ずして名を四方に馳す。紀藩の加納諸平は当代の鴻匠なりしも、美隆の詠ずる所を誦して激賞己まず。即ちこれをその著鰒玉集の中に収載せり。伴林光平のその門に遊ぶや、諸平先づ問うて曰く、子の国に岩崎美隆なる者あり、詞林の巨擘となす、子必ずその面を識るべしと。光平驚きて曰く、未だ知らざるなりと。即ち、還りて美隆を訪い、語るに其師の推奨する所を以てす。美隆悦んで曰く、真にこれ知己を得たりと。光平これより屢々その眷遇を蒙り益する所多し。美隆の起臥坐行、思う所は唯歌のみ。遂に狂を発して、人事を弁えざること数年。然れども人のその道を問う者あれば、即ち欣然としてこれに答え、毫をひらき微を弁え、条理明晰、いささかも平常に異ならず。一夕忽ち詠じて曰く、村がらす塒にかへる一声はけふのなごりの雲になくなり。諸平これを聞いて曰く、嗚呼、美隆死せりと。いくばくもなくして果して歿す。実に弘化四年七月なり。著す所、藤門雑記十三巻、杠園詠草、詞之山口、及び随筆数種。並びに未だ刊せず。花園村は幕臣石河土佐守の采地に係れり。土佐美隆の名を聞いてこれを崇重し、挙げて代官となす。美隆の職に在るや廉潔、治蹟多し。民の仰慕すること父母の如し。その家を修むること整粛、身を奉ずること倹約。初め其父嘗つて変改に遭うて産を失いしも、ここに至って債を贖し田を購うて家道を再興す。一郡の巨族たり。

野史氏曰く。聞く、美隆死せる時は年僅かに不惑を踰えしのみと。天もしこれに仮すに更に数十年を以ってせば、その名声の海内を傾けしこと必せり。惜しむべきのみ。光平嘗つて人に語って曰く、美隆と諸平と互いに相欣慕してこれを許す。余もまた其間を周旋すること数年なりしも、ついに二人を邂逅せしめ、把臂して心を論ぜしむるに及ばざりしは、これ畢生の遺憾とすと。嗚呼、美隆既に知己を得ることかくの如し。いまだ遇わずといえどもなお遇うたるがごとし。以って瞑すべきなり。

杠園抄解説　折口信夫

紀州本居派の学者で、江戸歌人を通じて一流に据えてよい筈の、加納諸平の晩年は、頗る幽怪な感じを人に持たせる。この人は、父夏目甕麻呂の酒乱の遺伝が現れて来た事を思はせる、幾多の伝説を留めている。そのうちで、最も其時代の、のんびりした人の胸に、不思議なあの世の存在を思はせたのは、その国学者の月並の歌会に、「夏の夜は露（ィ夢）よりもろくあけにけりはちす花ちるしのゝめの雨」と云ふ歌を詠じて戻ったその夜、机によりかゝったまゝ死んだと言ふ事実である。

処が、これより前、弘化四年七月十六日に、諸平とよく似た生涯をもった、河内の人岩崎美隆がなくなっている。只それだけなら、ことゞくしく云ふのはつがもない話である。処が、諸平の家集柿園詠草に、「岩崎美隆みまかりぬと、光平の許より告げおこせたるに、いとおどろきて、この人の晩鴉の歌など誦して、涙さへみだれてかなし夕がらす只一声の名残ならねば」といふ一首が載っている。伝説でも、

この以前の諸平が「夕山がらす」の歌を見て、河内の岩崎美隆も、やがて死ぬのであらうと、人に語って嘆息したといふのである。

この話の出所をつきとめてゆくと、存外不確な事になって了うのであるが、只かうした不安を、後輩美隆の咏嘆から、諸平が感じたといふ事は、多少さうした噂話を固定させた人々の、歌に強く働きかけたあるものがあった事だけは、信じてよいと思ふ。

美隆の晩年は、久しく強い神経衰弱を悩んで、庭中に建てた茶室に、寂かな思ひをこらしていた。かういふ間に、からすの歌が出来たものといふ事になっている。それは、早く既に諸平の鰒玉集に、「かげ消ゆる夕山がらす一声はけふの名残の雲になくなり」

美隆の死と諸平の死とが、かういふ二つの作物で結びつけられている様に、誰も考へたい事を好む心が動くであらう。処が、この歌は、本当に美隆が死ぬるよりはかなり前の作物である。事実また、その後、この人の病もやゝ軽くなった様に伝へられているから、さきの話は、ほんたうかもしれない。諸平の追悼歌をみれば、たしかにさうと思はれるが、この歌に就いては、いろんな改作が伝はっているので、河内名流伝には、「山がらす梢に急ぐ一声は」と載せている。私の、美隆について始めて知った事は、すべてこの書物から出ている。別に又、「松かげの夕山がらす」としたもの、或は「夕がらすねぐらに帰る一声を」とも改めている（詞の山口）。猶、「むらがらすねぐらへかへる」と書いた短冊もある。さうして見るとこの作物を、殆んど生がたみとも思うて、大事に育みたてゝいた心持だけは訣る様な気がする。けれども、この人の歌集、杜園詠草（ゆづるはそのえいそう）には、「かげろふの夕山がらす一声は」と載っている。私は昔から、この「かげ消ゆる」といふ詞が、或は諸平の助勢の加はったものでないかと想像して来た。

何にしても、かうしてみると、一々技巧のあとが、凡庸な国学者の片手わざとは思はれぬ所がみえる。事実、只今残っている七巻の杜園詠草をみると、殆んど四千六百六十首に近い作物をのこしている。そして、その歌から窺はれる此人の文学上の天禀は、極めて豊かなものであった事が見られる。近代の短歌の文学史に、新古今系統の運動が尠くとも明治になって二度、それ以前にもあった事は確かである。処がさうした試みは、新古今そのものが、芸の本道からそれている事にわづらひせられて、一人も成功した作家がみえない。只、不思議な事は、この人だけに、新古今系統のよい歩みが見られ、その上に勝れた幾多の作物となって残されている。そして、この人の文学動機を常に誘うたものは、枕草紙に対する深い理解と同化とであった。この人もその頃の国学者同様、諸代諸家の作物から来た影響が複雑に纏綿している事は事実である。けれども、その中心に太い線をひくものは、枕草紙式の情緒と感覚とであった。

それで、かうふう側の作物になると、当時の作家は、諸平すらも及ばない位だから、この人の右に出る者はなかったというてよい。このかなりねうちのある作物集は、死去前、二年前から遡って七年間（天保十年――弘化二年）の分に過ぎないのである。岩崎家の伝へでは、幻の様に、しつきりなく、彼の頭を過ぎるものゝ絶えなかった間にも、かの一室の中で、詠み続けられていたものだといふ。然しそれにしては、極めて均整が保たれて居り、技巧が円満に行っているのが不思議である。この人の作物を集めたものは、ほゞ四通りあって、その中最も大きな勝れた杜園詠草の他に、渚の藻屑一巻（安政六年正月、荒木美蔭編纂）、詞の山口二巻（美隆選。先達諸家並に同輩の作、及び自詠の類題選集）、渚のこづみ一巻（美隆自選）。分量

からいへば、杜園詠草の三分の一はある。この他に、杜園歌合一巻があるし、美隆社中の人々の作物に、伊達千広が判をかけている。

私が美隆の学問をお話するさきに、その文学から、まはり遠く語り出した理由は、その文芸の才を賞揚し様といふのではない。これだけの優れた天賦と鍛練とが、彼の学問を、どんなに磨きたてたかといふ事を、大方諸彦に暗示を致し度いと思うたからである。この人の様な境遇にをり、この人の様な病をもっていたら、当然埋れ果てなければならない一生の経営であった。にも拘らず、私どもが今度提供した枕草紙杜園抄の様な著作が残って、それが埋れもきらず、学者間に折々その説の断片が利用せられせられて来た事を思ふと、人間の一生は、塵あくたでないといふ事が、深く心に来る。人々の非をあげる事は、私の気持悪く思ふ所だから、それは避け度いけれども、かうして編輯同人すべてが、むづかしい原稿を作って版に上すまでになった動機は、学問上に於けるすり すっぱをして、ひそかに自責の心をおこさせる程度に止めるだけの快さを以って、なき杜園抄の作者の、あの世のほゝえみを催し度いと思うたからである。

文化元年に生れて、年まだ若い四十四の、弘化四年の七月十六日に死んだ人である。家は今もある大阪府中河内郡三野郷村大字市場（旧河内郡花園村市場）の岩崎清平さんの先々代に生れた人であった。美隆の父由政の代までは、殊に富み栄えていたといふ。市場から大阪新町まで、ほゞ四里の間を、色酒に沈湎した大尽として、このたかもちの大百姓の家長は、絶えず駕籠を飛ばしていたために、美隆が青年の時代には、家道の衰への甚しかった事が思はたる。而もこの人は、趣味に富んで居ったと見えて、茶道俳諧狂歌を心得て居ったため、今ある建築から庭の泉石のたゝずまひまで、当時の河内在所としては、数奇をこらしているものと云うてよい。この代に、どうした縁があってか、葛城山の麓の平岩の高貴寺の慈雲尊者との交渉が浅くなかったあとが見える。だから、美隆が出て、国学に親しみ、文学を嗜む原因とみるべきものは、調うていたわけである。

また、一番近い八尾の久宝寺には、伴林光平が居った。此人がしば〳〵美隆を訪うて、或は金銭の上の世話をもかけて居たらしい。彼の「野山のなげき」を見ると、美隆から帯刀や旅費を給せられた様子が見える。極めて質素に心がけていた美隆が、光平にやゝ心よく貢ぐ事をしたのは、其学問よりも、文学の上の同感があった事と思はれる。一体、諸平系統の特色は、学問よりも文学の方になづんでいる点であった。さうした側に、此の美隆もかなり進んでいたので、美隆の学問を見るには、其作物たる短歌を見なければ納得の行かない点が多い。其は、此時代の人々の作物から其生活を知らうとするよりは、もっと意味のある事であった。恐らく、美隆と諸平との間に連鎖を為したものは、右の志士、光平であらうと察せられる。美隆は、諸平に、別に弟子の礼をとらなかった様に見える。が、当時の学者の風としては、或は諸平の門人帳にはつらねられていたかも知れない。今一人、彼の近くにいて、諸平に教へを乞うていた人がある。其は、同村の神職、荒木美蔭である。此人も岩崎家の伝へでは、美隆の弟子だと言ふ事になっている。

かうした、ひそかなさびしい生活の間にも、文学の友が居て、彼の心をなごやかにした事を思ふ。さすがに、親の代からの名残りがのこっていて、芸人の出入するものもあったらしく、杜園詠草を見ると、竹本高麗太夫に与へた、二首の歌が見えている。「くれたけのもとすゑきよくすめりけり一ふし高き風のしらべは」「高麗太夫といふことを句の上におきて、こまやかにまことの筋をたてゝこそゆゑ〳〵しかるふしは見えけれ」平凡なよみくちながら、ことばのかど〳〵には、一種の古典的な技巧があらはれている。さうした方面の趣味のあった事がうかゞはれるものに、「浄瑠璃の文句によりて　うづみ火のほかげばかりを命にて見し夜の夢ぞ今も恋しき」

かういふ楽しみのほかは、彼の周囲は、逼迫した家計や煩雑な村治などが取まいていた。世に知られない生活ながら、さすがに其身辺はあわたゞしいことが、ついで起った。さうした事にだん〳〵打克って、父親以来傾いた家道は恢復した。が、其頃になると、家の事は専ら、妻、八重の手に委ねなければならない程、身の衰へを感じていた。しかし、一方また、彼の誇るべき成績が村治の上に挙りかけてもいた。「ひとつだに、さえなき身こそ、すぐろくの　いちはの里のなだてなりけり」才覚の才と、居村、市場のいちとの聯想から、すぐろくを思うて、ひとつ、さえ、いちは、とつらねて来たのである。これも、深い反省から出たものらしい調子は無いが、此時分の歌の形の持つまどかさに、角をすりへらされたものと見る事が出来る。だから、歌以上には、思ひ入っていたのであらう。彼の村と、隣村との間には、昔から絶えぬ確執があった。其が、はじめて和解する事になった喜びを「あしたづの　朝ぬけに向ふ空見れば、世のうき雲は、残らざりけり」　世のうきぐもなど言ふ処に、類型的な感じ方はあるけれど、二句三句あたりは、かなりのあかるさが出て

いる。

彼の家は、早くから、旗本、石川家の荘官であった。彼も亦、其職に任ぜられた。さうして其方面にもなか〳〵仕出かした事が多かったと言うている。でも、彼の素質は、さうした好事や周囲にはそぐはない人らしく、其作物から推察出来る。彼は若くから、大阪にいた村田春門の処に通うて、国学を学んだ。そして、その成績から見れば、遙かに師匠、多豆ノ舎を凌いでいる。彼の号を藤門と言うたのも、春門から貰うた名だと伝へている。また、彼の屋号は、杠園（ゆづるはその）ととなへていた。今度、板行した杠園抄は、実は原書に何の名目もつけて無く、たゞ四冊本の春曙抄に、思ふ存分に旁註、標註が、書きこんであったにすぎない。だが、これを旁註と名づけても他に其書物があるし、標註を以て呼ぶのも、不完全な気がするし、春曙抄書入れでは、あまり独立性のない名と感ぜられる。其では、此名著であって、此人の生涯をながく伝へるに足る書物を、おほふにはいとしすぎると思うたので、僭越ながら、杠園抄の名をつけて、書名としては、これを音読してこうゑんせうと読む事に、ひそかに定めさせて貰うた次第である。

彼の屋敷の客間の裏に、小さな前栽があって、その隅に、四畳半は無い程の離れ座敷がある。此処に晩年篭って、病ひを養うていた事は、さきにものべた通りであるが、此座敷の窓の外に、ゆづりはの古木が二三株、今も残っている。「こがくれて、あればありけり。ゆづるはの　みのなるかひもなきよながらに」　かうしたうち沈んだ心を其に寄せる事もあった。また、或時は、「ゆづる葉のひまもる星の、ほがらかに、春をうながす朝烏かな」　かうした晴々しい喜びを、此木に向って詠じた事もある。日常生活の上には、あればあるになれて、さのみ注意に上る事もなかったであらうが、彼の作物や、彼の生涯から見れば、此のゆづりはの木は、其生涯のしむぼるの様でもあった。比喩を極端に拡充してゆくのは、おろかな比論ではあるけれど、何だかさびしくて、而も華かな色を茎に持っているこの木が、彼の作物の傾向を特に象徴している様に見える。其ほど、彼の歌は、弾力と或る華美とを具へて居た。此は、新古今の影響と言はうよりは寧ろ、彼の耽読した枕草紙の幻影が現はれたのである。「あてなるもの　うの花を　網代ぐるまにさしそへて、乗りこぼれたる袖のゆふつゆ」　此は、枕草紙の題を取って、其気分から新しく想を構へたものである。而も此趣向は完全に、枕草紙自体になっている。

美隆の枕草紙杠園抄は、枕草紙の註釈ものでは最後のもので、種々の問題を決定しているところが多い。さうしたよい貴重なものである。美隆は、大体から言へば、村田春門の弟子である。彼の師匠は、学問的には、さう優れた人ではなかった。弟子の美隆の方が、遙かに優れていた。けれども、弟子としての礼は、後々までも続いて居た。美隆が、普通の国学者と異っていたところは、伊勢の本居派の影響をうけて、文法的の知識が正確であり、一つ一つの単語に対する理解が非常に深い。彼が、どの位書物を読んだかわからないが、歌集杠園詠草を見ると、詞の使用法が、適切である。これ程適確に使用した人は少い。これに対して、加納諸平が、まづ美隆よりも、詞々に、融通をよくきかしている。が、美隆は、古語に対する感じ方が鋭敏であり、同時に、語学的に、意味を知りわけている。それは、彼の歌をみると、よく訣る。「杠園詠草」「用ふといふ詞の用格」これは、赤堀又次郎さんの、語学資料に入っている。これは、用ふに、決定的とまではゆかぬが、かなり円満な解釈をつけて居る。蜻蛉日記に出ているおかしと云ふ語は、おか、をか、問題になったのを、歌でひやかしている。「近き頃ものしる人たち、蜻蛉日記をあかしとて、おかしといふ詞の仮字をあげつらはるゝを、又あげつらふとて　蜻蛉のとりとめがたきみだれには躑躅の岡もおぼろなりけり」　かうしたのが、あちこちに出て来る。江戸時代末になると、文法がやかましくなって来る。学者達に理会出来なかったこの方面の雰囲気が、文法的に濃くなって来る。明治になって、大学の古典科時代までも、理解し得なかった。たゞ、論理学に頭の出来た人々が、これに携っていた。大槻さんが出て、始めてわかって来たのである。美隆は、語学的に頭が達者で、その素養も亦深かった。この点が、枕草紙杠園抄に対して、信頼する事が出来る。

今、岩崎家に残って居る書物だけが、美隆の読んだものでない事は訣る。河内と云っても、大阪に近いため、本を借り出したり、本屋から持って来させる便利があった。それで、今残って居る書物だけの知識でないと言ふことは訣る。殊に注意しなければならぬ事は、美隆が、昔の記録類を読んでいる事である。国学者の欠点は、古記録は読まなかった。古記録を読む人は、有職故実家だけで、国学者には、その必要もなかった。美隆には、この知識があった。これから、古語に対しては、動かせない詞の根本を掴んで居る。この点が、変った学者だと思ふ。

彼の書入れた書物は沢山ある。万葉集等も、普通の寛永版に書入れてあるが、極く平凡で、創見としても、見るべきものがある。枕草紙杠園抄には、非常に深い造

詣を示している。これには、原因がある。美隆は、病気がよい時期しか、仕事が出来なかった。体の調子のよい時期に為したのが、枕草紙杠園抄であったと云ふ事が出来る。

歌集を見ても、杠園詠草七年間の最初の巻、天保十年三十六歳の時の巻が、最も優れている。それ以前は、ずっとおちて了ふ。彼の作品には非常にむらがある。天保十年の歌だけを見ると、確かに江戸歌人の歌では、一流である。さう云ふ風に考へて見ると、この歌集は、天保十年から六年間であるが、その十年以前のものがあれば、どの位いゝ歌があるか訣らない。ある時に油がのって、ある時は仕事が出来ないと云ふ、極度の神経衰弱であった。この間に歌を作り、物を書いていた。

若しこの人に、健康が続き、五十年と長生していたとしたら、どんなに仕事が出来、どんないゝ歌が残されたか想像に難くはない。たゞ一つ、美隆が生きていた記念として枕草紙杠園抄と杠園詠草とが、永久に残された。

杠園詠草を見ると、題詠が上手である。難題を、よくよみこなしている。普通、かう云ふ事は侮辱すべき事なのだが、この位よむといゝ。この人は、結局、心に想を構へないで、口をついで巧な詞が出てまとまって来る。だから、内容は鈍いが、形式は非常に鋭い。形式の鋭敏さから、一つのものにまとまって行く。それは、語彙が非常に豊富であるからだ。古事記、祝詞、万葉などは、それ程深くは読まなかったらうと思はれるが、これらの詞が、適確に使用されている。一度読んだ詞が頭を離れずにいて、歌を作る時に、どん〳〵出て来る。口の上から出たものではあるが、形式から見ると整って居る。難題を詠んだ歌には、殊にこの形式が、優れている。「寄相摸恋　ひさご花よそのかざしとなりにけり　わが恋ぢからいかにしてまし」ひさごばな（髪の形）は、角力の時に夕顔とひさごと、角力のほてをさゝげていて、負けた時は、他のものにとられる。この歌は、男色を詠んだ歌である。「起上小法師　そばだつもよこほりふすも自から山の姿は静けかりけり」　起上小法師を、山に譬へたところから「そばだつもよこほりふすも」と使っている。寝たり起たりするのである。題詠は、題とつかず離れず作るものである。題を歌の中に繰返すほどつまらないものである。「めくらべするかた　露の間はつれなしつくる朝顔も彼方此方にゑみこぼれけり」　この詞づかひは、実に巧みである。やって居ることはつまらない事ではあるが、この詞づかひの巧みさには、面憎くなるほど巧みである。も一つ不思議な事は、夏の歌が上手で、而も色彩が鮮明である。夏の風物を感ずる力が豊である。これは多く枕草紙から来ている見方である。枕草紙は、夏の気持なのである。「あてなるもの、卯の花をあじろ車に云々」の歌の如きこの一群の歌が多い。歌としては劣っているが、彼の素質のよくあらはれているものは、冬の歌である。形から云へば、夏の歌が優れている。

この学者にも幸、不幸があった。同じ本居派でも、紀州の本居派と交渉がひろかった。美隆は河内を出る事がなかった。又同時に、彼の名も、河内の中を出なかった。若し美隆が長生し、健康であったなら、自由にあちこちを交遊して、大きな仕事を残したであらう。そして、この人の学問の影響が、後々の学問にも及んだであらうと思ふ。学者としては、この影響が、次の時代を生まなければ、つまらない事だ。この点、美隆は気の毒な人であり、又残念な事である。

明治のはじめになって、杠園抄が、どこからか写し出されて、東京の学者の間にその説がとり入れられた。中には、その説をもって、自説としている学者もある。美隆の為には、非常にかあいさうな事である。美隆を世間に紹介する事は、後から出て来た小さい学者、吾々の責任であると思ふ。

〔昭和五年六月十五日講〕

寄居歌談

近藤芳樹

河内に岩崎美隆といふすき人あり、村田春門翁のをしへ子にて、歌集物語をばいとよく心得たる人なり、おのれ難波にいたりしほどは、村田のゆかりとて、歌みせにおこせなどして、むつまじうしたりき、なにはより遠からぬわたりなれば、春のころかれがもとをとふらひて一よやどりけるに、つとめて朝花といふ題にて歌よまんとて、里人の内にもこの道このむが多かるをつどへたり、こゝは小林元雄主の領らるゝ所にて、おのづからぬしにならひて、うたよみども多かりけり、さてあるじ美隆がよめる、露かをる花にぞむかふけさもまた心のちりのあさきよめして

五弓雪窓文庫目録

自著（漢文撰述）

史纂

神史

正続神史　一冊　三

刊本。昭和八年兵庫県曽根町曽根研三刊（活版）。記紀以下の史書から神祇史料を集成して編年体に叙す。雪窓主要著述の一にして、神祇史として「正続国史神祇集」に次ぎ「神祇志料」に先立つ大著と云わる。凡例に明治四年とあり。昭和八年に至って漸く校刊せられたり。総頁数七二三頁。校刊本は巻尾に五弓安二郎撰「五弓久文伝」（総十八頁）を付す。

神史　存巻一至六・十・十五・十七・十八・采用書目一巻　十一冊　一

四八丁・二九丁・三七丁・四三丁・四九丁・五二丁・五〇丁・五七丁・四三丁・四三丁・一二丁。門弟をして浄書せしめた稿本にして、雪窓自筆の朱書訂正が存する。曽根氏校刊本の底本に使用せらる。

続神史　存巻一　一冊　二ノ一

三五丁。初稿本。巻首に「起稿明治九年丙子五月一日」と記す。

続神史　三巻三冊　二ノ二

三一丁・二八丁・一一丁。第二稿本。巻一の首に「起稿明治九年丙子五月一日至七月三日卒業」。巻二の首に「起稿明治九年丙子七月四日」と記す。

続神史　四巻三冊　二ノ三

三二丁・三〇丁・一九丁。第三稿本。

神史追補藍本　三巻三冊　四

六三丁・四九丁・一五丁。第一冊巻頭に「浄謄以後補叙自明治七年十月十日至八年九月廿一日」。第二冊巻頭に「自明治八年九月廿二日」と記す。

〔神史采用書目〕　一冊　五ノ一

一〇丁。神史に引用せし百七十七種の書名を記す。関藤成章撰神史序並びに自序草稿を合綴せり。

神史采用書目（校正神史引書目次）　一冊　五ノ二

五丁。神史に引用せし百七十五種の書名を記す。

神史采用書目　一冊　五ノ三

六丁。右に同じ。二百七種を記す。

史論

政記存疑　一冊　六ノ一

一二丁。頼山陽「政記」記述中の疑問につきて弁ず。明治八年頼復（支峰）の自筆識語を添う。

政記存疑　一冊　六ノ二

一一丁。右に同じ。阪谷朗廬・片山冲堂の各自筆批あり。　†迂黙筆語・拠史徴経と合綴。

史補（晩香館史稿）　四冊　七

四九丁・四九丁・四一丁・三五丁。諸近世史書（治世金訓・元延実録・土津遺事・武野燭談・憲紀附録・徳翁神君積慶録・続王代一覧・武江年表・明良洪範・雕鷹記・続武家閑談・文紀附録・折焼柴・三朝遺事・兼山麗沢秘策・続藩翰譜・正徳雑録・章紀附録　等）の記事を漢訳して編年体に排列し、各条に史評を付す。記事は永禄二年から宝暦六年に至る。

晩香館史論　一冊　八

四六丁。人物論十九篇を収む。いづれも国史上の人物を評す。斎藤拙堂・片山冲堂・藤沢南岳・山田琳卿・江木鰐斎の批あり。

史痕（温史摘評）　二巻二冊　九ノ一

四一丁・二八丁。資治通鑑を評す。温史は雪窓の傾倒して熟読せる書なり。「文久紀元歳次辛酉五月念四」の序文を付す。増田世孫の批あり。

温史摘評　五巻二冊　九ノ二

四八丁・五三丁。資治通鑑を評す。「文久紀元歳次辛酉五月念四」の序文あり。巻之三「文久二年壬戌十二月十三日起稿」。巻之四「自元治元年甲子九月廿又七日起稿」。巻之五「自慶応二年丙寅二月十一日起稿」と記す。増田貢越自筆批あり。

宋元通鑑摘評　二巻一冊　九ノ三

三九丁。宋元通鑑を評す。巻之一「自慶応二年丙寅九月十七日起稿至三年丁卯四月三日卒業」。巻之二「自慶応三年丁卯五月六日起稿」。増田貢（明治八年）自筆批あり。

地方史

三備史略　三巻三冊　一〇

刊本（五二丁・六一丁・六三丁）。明治廿七年広島県芦田郡府中市村高尾佐一刊（活版）。香文舎蔵版。三備地方史料を集大成す。

晩香館史稿（三備史料）　一冊　一一ノ一

六四丁。三備史略の材料集。第五十三丁の首に「三備史料巻之二自文久二年壬戌六月七日起稿」と記す。

備中名勝考弁疑　一冊　一一〇

三丁。小寺棟園「備中名勝考」記述中の疑問につきて弁ず。阪谷朗廬自筆識語を添う。　†交友人名簿・巳亥浪華紀行と合綴。

史伝

松平定信行実（諸友批評楽翁公行実）　一冊　一三ノ一

四二丁。松平定信の行実を集成す。川田甕江・阪谷朗廬・片山冲堂・石津潅園・菊池三渓の各自筆批あり。

松平定信行実（楽翁公行実）　一冊　一三ノ二

四一丁。右に同じ。岡千仞・木原元礼・石津勒・萩原裕・島田重礼の各自筆批あり。

松平定信行実（白河楽翁公行実）　一冊　一三ノ三

四三丁。右に同じ。木原元礼・中村鼎吾・岡千仞・萩原裕の批あり。

文恭公実録　四巻四冊　一三ノ一

八一丁・五八丁・三八丁・三七丁。第十一代将軍徳川家斉の伝記資料を集成す。第二冊尾「安政五年戊午仲秋念九夜五弓久文校読一過」。第三冊尾「安政五年戊午仲秋晦日五弓久文校読」。第四冊末に「明治三年夏五月阪谷素」の序文を付す。明治十四年甫喜山景雄編「我自刊我書」に収めて刊行せらる。

恭公志料　一冊　一三ノ二

七六丁。文恭公実録の材料集。別に事実文編の材料も少許存す。

鶯渓逸事付鶯渓先生嘉言善行　一冊　一四ノ一

七丁付二丁。林鶯渓の逸事を記す。付録「鶯渓先生嘉言善行」は「星野寿平明治八年七月稿」とあり。

拙堂先生小伝　一冊　一五ノ一

七丁。斎藤拙堂伝記。　†焉馬叢録・晩香館咏草と合綴。

星巌梁川先生年譜　一冊　一五ノ二

一〇丁。梁川星巌年譜。　†客窓訳史と合綴。

客窓訳史　一冊　一五ノ二

一七丁。徳川家康並びに髦下諸将の逸事を記す。斎藤竹堂・塩谷元信・家里松涛・菅野乾斎の評語を付す。　†星巌梁川先生年譜と合綴。

瞥聞片玉　一冊　一五ノ三

一三丁。福山侯阿部家歴代の逸事を記す。明治六年五月の小引を付す。†通俗邇言・建白諸件・神史稿と合綴。

吉田家譜　一冊　一五ノ四

二一丁・副二四丁。福山藩吉田家歴世譜。「明治十一年戊寅六月十日」の序文を付す。「起稿明治十一年五月十五日」とあり。　†擬大将軍上洛記と合綴。

文稿

晩香館文稿　四冊　一六

四六丁・五二丁・三〇丁・六四丁。明治十・十一・十二年文稿を中心に慶応二年至明治三年間の旧稿をも収む。所収約百十余篇。明治十四年辛巳六月の門人高木音吉の晩香館文稿序文を付す。石津潅園・片山沖堂・菊池三渓・草場船山・坂谷朗廬・中村確堂・松田謙斎の批あり。

晩香館旧稿　二冊　一七ノ一

三七丁・七三丁。明治六年から明治十一年に至る間の文稿約七十篇を収む。第一冊(乾冊)に片山沖堂・川田甕江・中村確堂・中村敬宇の各自筆批。第二冊(坤冊)に石津潅園・片山沖堂・菊池三渓・木原老谷・草場船山・中村敬宇・中村三蕉・中村確堂の各自筆批あり。

晩香館雑稿　三冊　一七ノ二

四七丁・七五丁・五五丁。明治九年から明治十二年に至る間の文稿約百十余篇を収む。石津潅園・片山沖堂・木原老谷・世良振衣・中村確堂・藤沢南岳・松田謙斎の各自筆批、並びに菊池三渓・中村敬宇・中村三蕉の批あり。

癸未晩香館文稿　一冊　一八ノ一

二八丁。文稿十六篇を収む。所収は雪窓初期の文集にして、表題に「癸未」と冠せるは後人装潢の際の誤記なるべし。塩谷宕陰・斎藤竹堂・妹尾謙三・菅野聖与・家長士惇・斎藤拙堂・野田笛浦・後藤松陰・家里松涛・土屋弥之助・鷲津鵞堂・土井士恭・安藤維義の批あり。

文草原稿　一冊　一八ノ二

六三丁。文稿三十七篇を収む。片山沖堂・松田謙斎の各自筆批あり。

雪窓先生文稿　一冊　一八ノ三

六一丁。文稿三十四篇を収む。石津潅園・片山沖堂・亀谷省軒・川田甕江・菊池三渓・草場船山・中村確堂・中村敬宇・中村三蕉・松田謙斎・三島中州の批あり。

晩香館文集原稿　二冊　一九ノ一

九七丁・七五丁。第一冊は嘉永二年から明治十年にいたる間の文稿八十一篇を収む。第二冊は明治十年・明治十二年・明治十三年の文稿四十六篇を収む。石津潅園・片山沖堂・菊池三渓・木原老谷・草場船山・中村確堂・松田謙斎の各自筆批、並びに中村敬宇の批あり。

晩香館文叢原稿　二冊　一九ノ二

五二丁・一七丁。第一冊は明治十三年文稿三十篇を収め、片山沖堂・菊池三渓・木原老谷・中村確堂の各自筆批あり。第二冊は明治十四年文稿八篇を収む。

松田謙斎批評文稿　一冊　一九ノ三

一一丁。明治十四年文稿六篇を収む。松田謙斎自筆批。

辛巳文稿(辛巳晩香館文稿)　四冊　二〇

五八丁・四七丁・四五丁・五七丁。明治十四年文稿四十七篇、明治十五年文稿二十篇を収む。片山沖堂・菊池三渓・木原老谷・中村確堂・中村

三蕉・松田謙斎の各自筆批あり。

壬午晩香館文稿　五冊　二

八三丁・六四丁・七九丁・五七丁・五一丁。明治十五年壬午文稿七十二篇、明治十六年癸未文稿二十八篇を収む。石津潅園・片山沖堂・木原老谷・中村確堂・中村三蕉の各自筆批、並びに重野成斎・三島中州の批あり。

壬午文稿副　二冊　三ノ一

四〇丁・五九丁。明治十五年壬午文稿の副本。第一冊所収二十篇、第二冊所収三十五篇。但し第二冊には前掲「壬午晩香館文稿」に収めず此冊のみに存する文五篇あり。片山沖堂・木原老谷の自筆批あり。

癸未文稿　二冊　三ノ二

四〇丁・七一丁。第一冊は癸未文稿十七篇を収む。うち十篇に菊池三渓の自筆批あり。第二冊は明治十一年から明治十六年にいたる間の文稿から抜萃三十八篇を収む。中村三蕉の自筆批あり。第一冊巻末に「雪窓五弓先生行状」(植田有年撰)を付載せり。

癸未晩香館文鈔　二冊　三ノ三

二三丁・三七丁。第一冊は壬午・癸未文稿十二篇を収む。中村三蕉自筆批あり。第二冊は癸未文稿十二篇を収む。但し「壬午晩香館文稿」第四冊所収の文と悉く重復す。

晩香館甲申文稿　二冊　三ノ一

五三丁・五〇丁。明治十七年甲申文稿二十篇、壬午文稿・癸未文稿などの旧稿二十二篇とを収む。片山沖堂・中村確堂・中村三蕉・秋場猗堂の各自筆批あり。

晩香館甲申文稿副　一冊　三ノ二

八三丁。明治十六年癸未文稿十八篇、明治十七年甲申文稿十篇、及び過年稿抜萃若干とを収む。但し、此冊にのみ存する癸未文稿六篇、甲申文稿三篇あり。

甲申晩香館文稿　一冊　三ノ三

五〇丁。明治十六年癸未文稿七篇、明治十七年甲申文稿三篇、及び過年稿抜萃若干とを収む。中村確堂・中村三蕉の各自筆批あり。

晩香館乙酉文稿　一冊　三ノ四

一七丁。明治十八年乙酉文稿五篇、及び壬午・甲申の旧文稿五篇とを収む。

蕉陰茗話　四冊　二四

七七丁・一八丁・三八丁・三八丁。随筆。第一冊は万延元年文久三年間の成稿。坂谷朗盧・片山沖堂の批あり。第三冊は文久三年明治三年間の成稿。第四冊は明治五年成稿。第二冊は成稿年月を記さず。

蕉陰茗話剰篇(雪窓清話)　四冊　二五

五六丁・四九丁・五七丁・五〇丁。随筆。第一冊「自明治九年丙子七月十二日起稿」。第三冊「起稿於明治十年丁丑八月二十四日」。第二冊・第四冊は年記なし。

蕉陰茗話剰篇　一冊　二六ノ一

二七丁。随筆。

村居独語　二冊　二六ノ二

四六丁・五〇丁。随筆。もと三巻三冊なりしならんも、巻二・巻三の二冊を存するのみ。巻之二「自明治十一年十月一日起稿」。巻之三「自明治十一年十二月廿五日起稿」。両冊とも中村子訓・木原老谷の批あり。

負暄閑談　一冊　二六ノ三

二〇丁。随筆。巻一の一冊のみ存す。明治十二年四月十日の小引を付す。

迂樵迂言　三巻三冊　二七

五五丁・四四丁・三三丁。随筆。明治十三年一月上浣の小引を付す。

坐待旦録　三巻三冊　二八ノ一

四七丁・三四丁・三三丁。随筆。明治十四年五月の小引を付す。巻之一「起稿明治十四年五月廿四日」。巻之三「起稿明治十四年九月廿一日」。

読外筆綴　三巻一冊　二八ノ二

一〇〇丁(三〇丁・三四丁・三六丁)。随筆。明治十五年二月十八日の小引を付す。巻之二「起稿明治壬午旧暦四月一日」。巻之三「起稿明治壬午

旧暦八月五日」。

病榻暇筆　二巻一冊　二九ノ一

一〇九丁(五八丁・五一丁)。随筆。明治十六年二月八日旧暦癸未正月元日の小引を付す。表紙に「病榻暇筆乾」とあり。次掲の坤冊と互に副本をなせり。

病榻暇筆　二巻一冊　二九ノ二

一〇九丁(五九丁・五〇丁)。随筆。明治十六年一月一日旧暦壬午十一月念二の小引を付す。表紙に「病榻暇筆坤」とあり。前掲の乾冊と互に副本をなせり。

痿叟呟語　一冊　二九ノ三

九丁。随筆。明治乙酉(十八年)旧暦孟夏廿日の小引を付す。

往坂記(己亥浪華紀行)　一冊　三〇

三丁。天保十年郷里を出て始めて大阪にいたりたる紀行記。時に雪窓年十七。　†交友人名簿・備中名勝考弁疑と合綴。

漉水余話　一冊　三一

二四丁。嘉永五年江戸梨園景況並びに芸評を漢牘の体裁に叙したる戯著。〔参照〕川瀬一馬「読書観箚日録」その十(書誌学六ノ五、昭11・5)に森約之手抄書入の漉水余話のことにつきて記す。

迂黙筆語　一冊　六ノ二

二六丁。僧黙霖との筆談一百余則を収む。安政六年桂月十又三日の小引を付す。片山沖堂自筆批(明治六年)あり。　†政記存疑・拠史徴経と合綴。

兼玉相倚　三巻三冊　三三

五六丁・四二丁・三九丁。片山沖堂と五弓雪窓の往復書簡集。第一冊は明治五年至明治十一年、第二冊は明治十一年至明治十三年、第三冊は明治十三年至明治十五年の書簡を収む。

自著(仮名撰述)

神主考　一冊　三三ノ一

五丁。神主の語義を考証す。「慶応三年丁卯五月」稿と記す。

神主考　一冊　三三ノ二

六丁。右に同じ。「慶応四年戊辰八月」稿と記す。　†神社取調日記・建白書・晩香館雑載と合綴。

神社取調日記(吉備津宮神社考)　一冊　三三ノ三

八丁。「慶応四年戊辰八月」稿と記す。　†建白書・神主考・晩香館雑載と合綴。

甘南備神授階千年祭日記　一冊　三三ノ三

三〇丁。賀武奈備神社(備後国葦田郡出口村)千年祭記事。慶応二年四月八日祭事の経過を記す。

葦田神官日乗(祠官日乗)　二巻一冊　三三ノ四

五七丁。自明治五年十一月至明治六年二月記事。雪窓が郷社甘南備神社祠官として奉仕せし期間の祭祀日記なり。

玉浦柞原探索日記　一冊　六六ノ一

一六丁。慶応二年八月藩命を帯びて領内尾道三原に時勢風説を探る。その答書草稿なり。　†地震日記・睦月八日記と合綴。

睦月八日記　一冊　六六ノ一

九丁。慶応四年戊辰正月長州奇兵隊福山藩内通過一件を記す。　†地震日記・玉浦柞原探索日記と合綴。

纂史目的詹言　一冊　三四ノ一

二四丁。明治七年二月文部省の召に応じて太政官修史局に奉職せし際、続日本史編纂につきて上司川田剛の諮問に応えたる答書の草稿。

纂史目的詹言　一冊　三四ノ二

二三丁。右に同じ。　†邇俗雅言と合綴。

編輯着手ノ方法・修史目的詹言　各一巻合一冊　三四ノ三

五丁・一〇丁。明治八年九月修史局に上申したる纂史意見書の草稿。

修史参攷書目　一冊　三四ノ四

一四丁。修史局における続日本史編纂時の備忘。

修史采摭書目付要借書目　一冊　三四ノ五

一三丁・一九丁。右に同じ。

歴代一覧　一冊　三五ノ一

三〇丁。皇統を記す。「明治三年庚午仲冬月」の小引を付す。五弓安二郎撰「五弓久文伝」に福山藩において刻せし刊本ありと記せり。

歴代一覧　一冊　三五ノ二

三三丁。右に同じ。小引また右に同じ。

福山管内地理略　一冊　一ノ二

四五丁。福山藩内の地誌。記述は子弟の啓蒙を旨として平易に叙す。五弓安二郎撰「五弓久文伝」に福山藩において刻せし刊本ありと記せり。

福山管内地理略　一冊　四三

一一丁。雪窓自筆の初稿本。加朱訂正すこぶる多し。　†晩香館筆叢第十二冊に収む。

地名今昔異称　一冊　三六ノ一

三丁。地名考証十二則を収む。

建白諸件　一冊　一五ノ三

一五丁。福山藩々務につきて提出せし建白書六種の草稿を収む。年記なし。　†邇俗雅言・瞥聞片玉・神史稿と合綴。

建白諸事件　一冊　三三ノ二

五丁。右と同じ。年記なし。　†神社取調日記・神主考・晩香館雑載と合綴。

晩香館詠草（清々舎詠草）　二冊　三七

七一丁・四〇丁。自家詠草。第一冊は天保十年以前歌稿・天保十年歌稿・天保十四年歌稿・嘉永五年歌稿・嘉永七年頃歌稿を収む。第二冊は安政五年から明治五年までの自詠を収む。

晩香館咏草　一冊　一五ノ一

六丁。自家詠草。「春の心を」外二十二首を録す。　†拙堂先生小伝・焉馬叢録と合綴。

凝塵成嶽　一冊　三六ノ二

八丁。随筆十一則を収む。

編著

諸家蔵書目次　一冊　三八

四四丁。「北条氏歳寒堂蔵書目抜萃」「昌平黌依田先生蔵書目」「弘道館（誠之館）書目」「江木氏風松軒書目」「就正館蔵書目次」「迂樵蔵書」「木村氏蔵書」「福山城大手三浦大夫蔵書目」「藤野氏蔵書目次」「吉備津宮蔵書目録」の十種を収む。「依田先生蔵書目」「江木氏風松軒書目」「迂樵蔵書」の各巻末に「元治甲子十月」の雪窓識語を添う。別に「万余巻楼記（野田逸）」「文会書庫記」「林崎文庫記」「書潜龍閣蔵書目録序」「詩経品物図考序」「題水西書屋蔵書目録後（沈起元）」の六篇を付載せり。

当読書目　二冊　三九

三二丁・四七丁。新刊書籍の広告文を集む。主として明治十年から明治十五年にいたる間の出版書。

先人河州府君遺墨　一冊　六八

三三丁。雪窓が先考五弓久範の自筆稿本「神武天皇」「小学劄記」の二篇を合装したるもの。

必読書題言彙纂　十二巻十三冊　四〇

七九丁・三三丁・五一丁・四八丁・四七丁・四八丁・四二丁・四三丁・三三丁・三〇丁・二八丁・一二丁。諸書の題跋を纂集す。その細目を次に掲ぐ。

第一冊

惺窩先生文集序　後光明帝御撰
礼儀類典序　徳川　綱条
列祖成績序　大井　広
筑前続風土記序　貝原　篤信
保建大記序　栗山　愿
藩翰譜序　室　直清
続異称日本伝序　菅　晋帥
土佐日記新解序　頼　襄
読史余論叙　萩原　裕
歴朝詩纂序　服部　元喬
書難波戦図後　古賀　煜
物夫子著述書目記　服部　元喬
刻年山紀聞序　小宮山昌秀
古史和歌通序　梁田　邦美
題鳩巣献可録後　村山　済
国府系図序　山県　孝孺
大東世語自序　服部　元喬
清客芝詩巻跋　柴野　邦彦
明倫館釈采儀注序　山県　孝孺
江氏家譜叙　山県　孝孺
書漂客叢話後　北条　念祖
皇朝名臣伝讃序　大槻　清崇
史籍年表序　林　述
草茅危言序　中井　積善
紀元略序　頼　襄
校刻延喜式序　雲州侯
跋袖珍万葉集　頼　襄
書城濮戦図後　頼　襄
書回天詩史後　北条　念祖
戸山荘図跋　柴野　邦彦
書行在或問後　頼　襄
先哲叢談序　佐藤　坦
政記序　林　長孺
赤穂四十七士伝序　青山　延光
二叟漫譚序　古賀　煜
北辺紀聞序　古賀　煜
為坂子祺跋歴代帝王図　服部　元喬
跋富士牧猟図扇面　柴野　邦彦
題酬戦図後　山県　孝孺
紫文製錦序　頼　襄
白川侯親写四書五経跋　柴野　邦彦
近世叢語序　篠崎　弼
豹皮録序　野田　逸
周急詩録引　菅　晋帥
古松翁西遊記序　篠崎　弼
米庵文房図録跋　五弓　久文
書白石手簡後　五弓　久文
題東遊日抄後　古賀　煜
日新館志叙　河田　興
通航一覧序　亀田　長梓
襲国僭偽考序　亀田　長梓
下野国誌序　釈　顕常
皇朝事苑序　林　衡
書白川侯手記秘巻後　古賀　煜
書盍言編後　古賀　煜
書石石紀聞後　林　衡
池田氏家譜集成序

第二冊

蘭芳玉潔巻跋　古賀　煜
書三徳譜後　古賀　煜
書良将達徳鈔後　古賀　煜
地誌解題序　林　皦
雞林拾葉序
千載松序　林　皦
枕千録序　藤田　彪
赤穂義人纂書叙　塩谷　誠
神祇宝典序　林　信勝
延喜式工事解序　柴野　邦彦
寛永諸家系図伝序　林　信勝
源流綜貫序　安積　覚
東照大神君年譜序　林　信勝
関原記跋　林　信勝
常山文集序　勘解由小路韶光
続近古史談序　松林　漸
新編鎌倉志序　力石　忠一
守山日記序　安積　覚
貞婦伝序　安積　覚
竹垣叔恭荒地政記跋　柴野　邦彦
観文小図序　尾藤　孝肇
五山文編序　林　信勝
書重修紀伝義例後　安積　覚
佐太廟御製倭歌跋　林　信勝
江関遺聞序　新井　君美
采覧異言序　新井　君美
甘雨亭叢書序　篠崎　弼
跋排釈録　佐藤　直方
詞林摘英序　青山　延于
跋蓁蕪弁　佐藤　直方

第三冊

省譽録序　勝　安芳
異年号表序　柴野　邦彦
銭譜序　柴野　邦彦
古今万国英婦列伝序　中村　正直
羅馬史略　大槻　文彦
評閲明治詩史序　栗本　鯤
仮字考序　山本　信有
治平金訓序　林　晃
十事衍義跋　古賀　煜
昌平志序　尾藤　孝肇
近代軍談序　林　信勝
鉄炮書序　林　信勝
続有職問答序　安積　覚
太田氏家譜序　安積　覚
会津旧事雑考序　広瀬　政典
鼎鍥名物六帖序　伊藤　長胤
臥遊叢書叙　塩谷　守誠
上福山志料啓　菅　晋帥
民約論序　中島　雄
書無人島巡査記後　塩谷　守誠
万国公法蠡管序　中村　正直
英国議事実見録　阪谷　素
松屋外集序　藤田　彪
世々之姿序　広瀬　政典
古松翁西遊記序　菅　晋帥
集古図序　新井　君美
方策合編序　新井　君美
除蝗録序　佐藤　坦
究北日誌跋　重野　安繹
歴代名媛詩抄序　小野　長愿

第四冊

爛柯堂棋話序　野田　逸
挽反紀略序　小野　長愿
求言録序　松平　定信
群書一覧序　奥田　元継
明治新刻国史略自序　石村　貞一
近世叢語序　佐藤　坦
続先哲叢談序　斎藤　正謙
皇国名医伝前編序　丹波　元佶
赤穂義人録序　室　直清
跋烈士報讐録　三宅　緝明
花押藪序　丸山　可澄
続花押藪序　丸山　可澄
東西遊記序　松本　慎
書漫遊記程　栗本　鯤
神興図識序　昌谷　碩
重訂鄂羅斯考序　古賀　樸
南山俗語考序　古賀　樸
近古史談跋　木村　毅
鑒古録序　横須賀安枝
書終北録後　松田　順之
回天詩史後序　原　忠敬
近事紀略序　萩原　裕
西討史略序　栗本　鯤
東涯漫筆序　伊藤　善韶
新論跋　会沢　安
廸彝篇序　藤田　彪
草偃和言序　杉山　忠亮
制度通叙　伊藤　長胤
慎思録自叙　貝原　篤信
熙朝文苑叙　伊藤　長胤

第五冊

書民撰議院集説後　中島　雄
巵言抄跋　林　信勝
養蚕新論引　信夫　粲
類語纂序　栗本　鯤
祝詞式新刻本序　平田　銕胤
纂輯御系図跋　細川潤次郎
皇典文彙叙　櫛田　駿
陵墓一隅抄序　津久井清影
聖蹟図志巻首引　津久井清影
神功皇后御伝記序　川喜多真彦
神社考序　林　信勝
大日本史序　徳川　綱条
大日本史賛藪序　長岡　恂
日本国史紀事本末序　青山　延光
日本国史紀事本末序　李　鴻　章
皇朝史略叙　徳川　斉脩
刻新策序　杉本　貞健
続皇朝史略序　青山　延于
国史略序　清原　宣光
続国史略後編叙　鷲津　宣光
続国史略序　岡　千仞
校刻日本外史序　保岡　孚
編年日本外史序　中村　正直
日本外史弁誤序　川田　剛
続日本外史序　頼　復
近世日本外史序　南摩　綱紀
跋中興鑒言　三宅　緝明
明徴録序　徳川　斉脩
野史纂略序　青山　延寿
名賢言行略序　山田　徴

第六冊

第七冊
古事記序　大保万侶
上続日本紀前表　藤原継縄
上続日本紀後表　菅原真道
日本後紀序　藤原緒嗣
続日本後紀序　藤原良房
新刊類聚国史序　菅原長新
文徳天皇実録序　藤原基経
三代実録序　藤原時平
日本書紀跋　清原国賢
新撰姓氏録序　万多新王
新撰万葉集序　菅家
古今倭歌集序　紀淑望
倭名類聚鈔序　源順
名目鈔序　藤原実熙
野史跋　寺門良
松陰快談序　長野確
弁妄序　島津久光
延喜式工事解序　柴野邦彦
旧考余録　竹尾次春
増訳采覧異言序　稲垣茂正
詠史詩集序　祇園瑜
羅山林先生集序　林恕
第八冊
続近世日本外史自叙　関機
刊釈親考序　安原貞平
標註日本外史序　関機
義人纂書続編序　昌谷碩
詞林摘英序　青山延光
日本楽府後叙　後藤機
刀剣録序　青山延于
令義解序　清原夏野
行在或問序　収園豬
弘仁内裏式序　藤原冬嗣
弘仁格式序　藤原冬嗣
奉進貞観式都序　藤原氏宗
貞観格序　藤原氏宗
延喜格序　藤原時平
延喜式序　藤原忠平
朝野紀事序　村瀬之熙
懲毖録序　貝原篤信
常山紀談序　松崎惟時
通語序　清水原
沖縄志後序　重野安繹
近世偉人伝序　蒲生重章
元寇紀略序　大橋順
警察一斑序　川路利良
泰西史鑑序　西村茂樹
真政大意序　秋月種樹
万国史記序　重野安繹
譚故書余序　岡松辰吾
地球図跋　王韜
書文舫推談後　祇園瑜
新刻日本政記序　重野安繹
大嘗会便蒙自叙　荷田在満
翻刻中西関係論序　広部精
呂晩村唐宋八家精巽序　中村正直
日本魂序　蒲生重章
読重刊普法戦記　栗本鯤
琉球新誌自序　大槻文彦
明治鉄壁集序　阪谷素
近世文体叙　加藤熙

第十冊

雪窓清話題詞　青山　延寿
撥反紀略序　小野　長愿
跋白茅志林　木村　重任
西洋品行論第七編序　中村　正直
郷村記序　松林　漸
馬書口授序　皆川　愿
読府県会議録　小牧　昌業
書書生寮名簿後　岡　千仞
新刻日本政記序　重野　安繹
日本外史前記序　重野　安繹
国史評林序　島田　重礼
近世烈士伝序　城井　寿章
大内裡図序　高瀬　成
書徳川氏禁令録後　星野　恒
詢蕘斎文鈔後序　重野　安繹
弘道館落成詩序　青山　延光
自得堂文鈔序　中村　正直
大日本商人録序　中村　正直

第十一冊

日本全史序　松岡　辰
丕揚録序　塩谷　世弘
書盍徹問答後　藤森　大雅
書十事解後　藤森　大雅
書画灰画水後　藤森　大雅
書和漢年契後　藤森　大雅
廿四考図賛序　塩谷　世弘
新撰日本政記序　中村　正直
赤穂四十七士伝序　藤田　彪
北遊日録序　南摩　綱紀
太平美言録序　斎藤　正謙
伊勢国司記略序　斎藤　正謙
出石藩祖偉蹟図記序　斎藤　正謙
本学提綱序　斎藤　正謙
平城大内敷地図序　斎藤　正謙
田令図解序　斎藤　正謙
采風新誌序　鈴木　陳
増補墓所一覧序　高　鋭一
金蘭集題言　竹中　邦香

第十二冊

校刻大日本野史序　清愈　樾
日本国史紀事本末序　何　如　璋
答浅田先生書
渉史偶筆後序
尊攘紀事序　重野　安繹
草莽私記序　亀谷　行
諸葛君碑
加藤清正伝序　依田　百川
日本小史序　依田　百川
日本千字文序　中村　正直

津逮余筆　三十四冊

四九丁・五〇丁・七七丁・九六丁・七二丁・六〇丁・六一丁・二九丁・八五丁・五三丁・七二丁・四四丁・三六丁・二八丁・四八丁・六五丁・五八丁・三一丁・四五丁・三九丁・五八丁・四六丁・六三丁・七五丁・八一丁・三一丁・四一丁・七〇丁・五一丁・六八丁・四三丁・七四丁・一六丁・四八丁。

漢籍三百余種(経史子集の全般にわたる)から会心の章句を抄録せり。天保十年の起筆にして、以後明治十六年にいたるまで漸々業を積んで大冊を成す。第一冊内題「羽蕉雑録」又「迂蕉備忘録」、第二・四・五冊内題「迂蕉健忘録」、第五・六・七・九・十冊内題「健忘録」、第十二・十三冊内題「諸子語抄」とあり。もとその書名一定せざりしも、第三冊以下に題したる「津逮余筆」が、遂に総題名となれり。第一冊巻首に明治十二年己卯四月二十九日の自序を付す。

名家文録　一冊　六ノ三

五四丁。唐宋明諸家の文二十二篇を抄録す。

晩香館筆叢　十七冊　四三

四〇丁・四七丁・四二丁付五丁・二一丁・二五丁・三三丁・三七丁・五二丁・五四丁・三一丁・四九丁・三九丁・四九丁・五五丁・四三丁・二三丁・三六丁。随録随抄。故人詩文、諸友詩文、新聞記事抄写、その他を集む。第一冊「自文久三年癸亥二月五日起稿」「起稿文久三年癸亥孟夏五日」。第三冊「自明治三年庚午四月念七起筆」「自明治三年庚午後十月十九日」。第四冊「自明治五年壬申五月十八日起稿」。第十三冊「自明治十二年十二月一日起稿」と記す。その他の冊は年記なし。冊中に収むるところ、その主なるものは次のごとし。

第一冊　右軍蘭亭跋　趙子昂
復五弓士憲
訳浪華某氏俗束十則　五弓久文
鬼橋図跋
弁疑録
娯語折録　摩島弘
釈契冲碑銘折録　安藤為明
奉安藤対州閣下書　堀織部正
藩祖二百五十年忌祭文　阿部正弘
題孔子真　物茂卿
第二冊　山陽篆刻引　頼襄
慎思録抜萃　貝原篤信
第三冊　芸苑日渉抄録二条　村瀬之凞
書武公遺事後　青山延于
歌城歌集序　篠崎弼
二十八社考序　青山延于
佐波山碑　青山延于
鹿嶋紀行節録　青山延于
周尺説（刊本）　森立之

第四冊　跋近古詠史十五首後　頼襄
陽精論　安藤勝任
第五冊　平薩善後策　池辺吉十郎三山
〔時事慷慨〕　矢野義徹
開済生医院記　在釜山港日本商人
広告
観岳飛古戦場文有感　小二木
論恩威　竹川狂夫
韓信論　児玉少介
呈清国李中堂閣下書　何有之
自由歌和交々山韻　顧柳散人
第六冊　浴王子瀑布記　小出泉
祭姪横井逢時文　中村和
与福沢氏書　中村彝
重与児翼勧作文書　頼襄
杜詩帳跋　篠崎小竹
団十郎　広瀬範治
祝新校竣成文
羅山詩集目録抄
第七冊　与男靖書　林信勝
藤島神社創立記　桐山純孝
哭小花和玉舟翁　向山黄村
観春霄秘戯図引為木下侯題　秋王山
清国欽使新来雑咏
送久保忠貞之松山序　片山達
旦読書屋月課詩文題安政丁巳
春錦社辛酉壬戌月課詩文掲題
明治辛未月課文詩題　林丑人
代議政論　片山達
与藤川伯孝書

戊寅歳旧雨社月課文詩題
遊御所谷記　犬養　毅
題伊勢文庫　林　羅山
書高雄鐘銘搨本後　六　如
児島高徳碑歌　横田　正綱
呈芥舟丹丘先生書　中村　朗
六石亭詩文鈔序　中村　桑
与藤沢君成書　中村　桑
題半開梅花図　木村　温
七十初度言懐十首　羽沢　釣者
重修咸陽県城碑記　清陳　堯
皇朝歴代歌　竹内　貞
皇国千字文序
皇国千字文解　藤川　忠猷
大統歌
港府君所蔵銅雀研記　義　堂
代言説　片山　達
故伯耆守名和君碑
巡狩議　片山　達
与頼士剛　片山　達
贈青村広瀬世叔　城井　国綱
六石亭詩文鈔跋　藤沢　恒
温史摘評序　増田　貢
愛国説　片山　達
通俗民権百家伝序　肥塚　龍
具禀　琉球　某氏
朝埜紀事　畑　維龍
有名無実上人伝
与岳陽増田君書　王　韜
観将棋記　雲烟　外史

第八冊

第九冊

第十冊

第十一冊

書香取古文書後　徳川　光圀
題趨庭問余　頼　惟柔
酬藤沢君成　片山　達
送王伎園帰広東
無仏斎記　後藤　芝山
遊幽篁軒記　後藤　芝山
奉内務少輔林某君書　肝付　兼武
頼山陽先生回看帖　篠崎　弼
〔藩祖阿部侯伝記資料〕　五弓久文編
福山管内地理略　五弓　久文
仮涙余録巻一〔歌舞伎関係記事収集〕　五弓久文編
阿伝曲　王　韜
上榎本外務大輔書　松平　迂狂
寄重野成斎先生書　清王　紫詮
砂糖説
寄重野成斎先生書　清王　紫詮
報知新聞社説明治十二年摘評　石　献子
藤原文貞公碑　柴原　和
与高瀬川子水書　菊池　純
祭箕作奎吾君文　中村　敬宇
書殷鑑論後
栄義塾記　片山　達
復五弓士憲書　石津　発
答深井栗郷書　片山　達
請置漢文留学生議　塩谷　時敏
記観阿伝事蹟劇
填彼杵湾議　木下　真弘
与中根恭三書　高橋敬十郎
平重盛論　片山　達
跋先府君書帖後　古賀　沙翁

第十二冊

第十三冊

第十四冊

題富士山図　古賀　煜
虎列刺予防説　高知　徳
園城寺法明精舎十勝記　釈　敬長
宗像経碑記　亀井　昱
楽耕園記　野中　準
送人遊芳埜序　片山　達
秦始皇論
弭盗議　生田　精
那珂公碑　三島　毅
修建畠山重忠君断碑記　栗本　鯤
代言説　片山　達
寿三井隆邦医伯六十序　欠　名
論僧聖仏高弁　岡　千仞
与成川大書記官書　杉村　武敏
北遊詩草叙　中村　鼎五
前内大臣平重盛公碑銘并序　釈　徹定
書伺菴先生書帖後　栗本　鯤
西国童子鑑序　川田　剛
建大黒神祠記　後藤　機
送五弓士憲序　草場　廉
広陵雑詞序　菊池　純
広陵雑詞
絳候条候孰優論　嶋田　重礼
弭盗議　星野　恒
文武不岐論　片山　達
蔵名山房文集　木原　元礼
跋通鑑集要　三島　毅
山高館記　欠　名
送永井三橋詩小引　依田　百川
栗園文第三集序　川田　剛

第十五冊

題延藤吉兵衛肖像　菅　晋帥
与三島中州書　土屋　弘
尺牘　清王　紫詮
万松園観萩記　片山　達
河井継之助紀功碑建立清規
林子平論　片山　達
同郷人懇親会序　服部　章
復五弓士憲書　片山　達
平政子論
題林文忠公墨蹟　清葉　松石
修道館本史記評林序　重野　安繹
贈菊池三渓先生　白川　船山
大阪城懐古　藤　瑞石
井伊直弼公建碑賛文　朝鮮金　鏞元
碓氷嶺開鑿醵金簿記　山田　顕義
書東荘四時詞後　高　雲外
大系図序　欠　名
新体詩抄序　井上　巽軒
桜賦碑陰記　北沢　正誠
嘉言録序　辻　信松
贈沖縄県令上杉君　浅野　蕉軒
送鷲津文豹赴任岩手県序　村上　珍休
愛琴閣記　本田　種竹
題李習之文鈔　中村　鼎五
橙斎記　片山　達
議貨幣　片山　達
寿阿籟竹田翁八十八初度序　秋月　胤永
静区遺稿序　依田　百川
書富国策後　中島　雄
題楊椒山集

第十六冊

第十七冊

古鏡記　重野　安繹
池原香穑従駕日記序　中村　正直
詢蕘斎文鈔序　内藤　恥叟
尊攘紀事序
祭日柳士煥文
以人治人論清気楼課題
近世偉人伝第六篇序　三島　毅
青村詩鈔序　川田　剛
進皇朝通覧表　豊島　毅
神武天皇御伝記序　田中　正幅
神武天皇御伝記引　三宅　某
経籍会通引筆叢甲部　清胡　応麟
寿桂園先生七十序　秋葉　斐
読日本外史偶題　清陳　鴻誥
文章指帰序　川田　剛
同門旧友会記　依田　百川

史　屑　六冊　四三

四一丁・一〇〇丁・一〇〇丁・九丁・三七丁・一三丁。随録随抄。第一冊「起稿於明治七年庚戌二月十八日」。第五冊「自明治八年乙亥九月廿九日夜」と記す。

晩香館雑載　一冊　三ノ二

三六丁。随録随抄。　†神社取調日記・建白諸事件・神主考と合綴。

晩香館叢書　三巻二冊　六三

六一丁(二八丁・三三丁)・四三丁。随録随抄。万延頃の世聞に関する記事を集む。第二冊は桜田門外の変に関する世聞を主とす。巻一の首に「自文久元年六月起」、巻二の首に「自文久弐年壬戌七月」と記す。

晩香館漫録　一冊　四ノ一

六三丁。随録随抄。戊辰前後世聞に関する記事を集む。

勉強録　一冊　四ノ二

三九丁。随録随抄。

詩歌鈔　一冊　四四ノ三

三八丁。随録随抄。故人の詩歌文章を抄記す。

牛溲馬勃　二冊　四五

五四丁・一九丁。随録随抄。松崎慊堂七十初度言懐十首など摺物九点をも合綴す。細目次掲のごとし。

(牛溲馬勃目録)

第一冊

青山氏著述目録(刊一丁)
義農作兵衛墓表　丹波　成美
天明大政録一則
井上四明墓表　村山　緝
幕朝年中行事歌合
大宝八幡神祀碑記　猪瀬　愿
陸奥国蠖穀神社境内碑書上　山村　篤井
度会神主足代君墓碑銘　斎藤　正謙
三神功徳之碑　戸沢　惟顕
神史序　江木　戩
織田系譜
豊城猪瀬先生墓表　秋場　祐
恭公実録序　阪谷　素
謹請奉復土御門天皇山陵表
亡友林抑斎墓碣銘　三島　毅
林鶯谿墓誌銘　古賀　増
観新富街戯文
登山学舎教則(刊一丁)
捕鯨図識序　片山　達
津軽藩祖略記序(刊二丁)　藤川　三渓
続輯国史序　兼松　成言
兼松石居先生著述目録(刊一丁)
復五弓士憲書　藤沢　恒
中村敬宇逸事一則

与五弓士憲書　木村　良純
修史局へ献納津軽旧記抜書
下沢保躬稟告（刊一丁）
校正日本政記序
盍簪社記・議貨幣　片山　達

第二冊

修史局課業分担表
五弓伊豆守官位勅許状
七十初度言懐十首（刊二丁）　羽沢　釣者
平田大人著述入費目録（刊一丁）
招魂碑　中村　正蔵
荻田雲崖追悼会報条（刊一丁）
群書類従拝借一件書類
五弓先生宛手紙　門田　新六
広島県明治十一年布達（甲七拾四）写
野史抄
文懿林府君墓碣銘　林　昇
生意気新聞報条（刊一丁）

論孟記事　一冊　五三ノ三
三〇丁・論語・孟子を抄書す。

拠史徴経　一冊　六ノ二
一八丁。東西の史書から経書講義に関する記事を集む。　†政記存疑・迂黙筆語と合綴。

神史稿（神史々料）　存巻之一　一冊　一五ノ三
一六丁。明治五年と六年の教部省布告を筆抄したるもの。巻首に「自明治五年壬申九月下浣」と記す。前掲「神史」とは別個の著述なり。　†邇俗雅言・瞥聞片玉・建白諸件と合綴。

史語摭要（六国史摭要）　六巻五冊　四六
四五丁・三五丁・五七丁（一五丁・三二丁）六三丁・一九丁。六国史の記事を摘抄したるもの。

仰祭余録　一巻附志一巻　一冊　四七ノ一
三九丁。明治五年八月十五日水戸烈公追慕祭記事。「明治五年壬申九月中浣」の序文を付す。

阿部公御説諭書　一冊　六六ノ二
六丁。旧福山藩士族義田結社概則（明治十年）及びその関係記事を集む。　†柳沢吉保伝弁誣・消暑一適巻と合綴。

今昔名人生歿年表　一冊　四七ノ二
二〇丁。掌記の類、心覚えの手控にして、著述という迄には至らず。

事実文編　八十巻次篇廿二巻雑編十二巻目次五巻　百十九冊　四八
近世人物の碑文伝記行状を集成す。雪窓が生涯の大著述にして、明治四十四年に国書刊行会の翻刻が出版せられて広く利用されるにいたれり。雪窓の名もまたこの編著によって広く人々の記憶するところとなれり。国書刊行会刊本の底本、即ちこの書なり。但し国書刊行会本は正篇八十巻次篇廿二巻を翻刻せしのみにて、雑編十二巻は収載せず。よって雑編収載二百九十四篇の細目は次にこれを掲ぐ。

（事実文編雑編総目）

第一冊

対馬重建神祖祠廟記　釈　顕常
志道軒伝　金龍　道人
張氏族譜序　山県　孝孺
唐崎譜略　逸　名
尾張国野間大御堂寺縁起　釈　頼円
尾張国小折村冨士塚碑誌　林　信篤
本多矣忠豊死節之碑　林　衡
紀千利休事　藪　慤
記千利休事　斎藤　馨
芝肩衝記　林　信勝
記観世小次郎高安彦九郎事　斎藤　馨
書大坂弁士事　宇野　鼎
記織田三五郎事　伊藤　長胤

明石掃部逸事　赤石　正経
記監軍事　津坂　孝綽
紀植村家政事　頼　襄
塙直之伝　松島　坦
拾遺安房守里見雲晴君遺迹碑　林　毓
記曽魯利某事　藪　愨
書鳥居勝高死節図後　安井　衡
病牀渉筆記大久保彦左衛門事　亀井　昱
記大久保忠教之事　五井　純禎
丙丁炯戒続録　塩谷　世弘
覚篇・観篇・岩篇　越智　文平
柴氏先塋記　田辺　昌
可児才蔵伝　前田　時棟
松江復讎記　無名氏
河内国豊浦村恩蹕遺趾碑記　林　毓
大原氏譜略記　釈　元皓
市川氏譜略記　秋山　儀
栴檀田十景集序折録　日夏　繁高
諸岡一羽伝　斎藤　馨
書鈴木和泉　朝川　鼎
東条氏先塋世系碑　岸　光
秋田氏先代記　安井　衡
津山城墟記　林　信篤
兜香書房記　古賀　煜
嶋津家譜　無名氏
島津義弘功最大　斎藤　馨
恒利池田公実系　高橋　愛諸
里見氏世家略　安積　覚
小松氏世系表
瓢箪

第二冊

第三冊

示石川丈山　林　信勝
記事一則　渡辺　魯
記里見義高事　斎藤　馨
山崎氏切銃刀記　室　直清
紀塩商弥太郎事　橋本　藍玉
紀松本某事　守田　栗園
張州府志抄録　無名氏
海外異伝　斎藤　正謙
山田仁左衛門伝　稲垣　大業
山田長政伝　塩谷　守誠
山田長政戦艦図記　塩谷　世弘
記事一則　五弓　久文
記原田直則母事　五弓　久文
記阿部正武事　津坂　孝綽
記浜田弥兵衛事　塩谷　守誠
湖月亭記折録　柴野　邦彦
記鳥居土佐守事　菅野　潔

第四冊

織田家譜　逸名
田沼家譜　逸名
還冤記　古賀　煜
跋五十武将図　林　春勝
記久世三四郎事　尾藤　孝肇
記内藤正成事　尾藤　孝肇
如竹翁伝　室　直清
団子森久兵衛事　蒲生　秀実
功力氏鏡銘并序　服部　元喬
大婆　安積　信
書僧雲居　斎藤　馨
記事一則　逸名
僧雲居伝　牧　古愚

征矢野定功墓誌　増井　麟州
阿勝伝　安積　覚
記一老僧事　尾藤　孝肇
記北条氏政事　斎藤　馨
記僧無辺事　畑　維龍
記直江兼続事　安積　覚
代毛利長門守与熊谷氏状　林　信勝
滋野某伝　逸　名
上水戸執政薦処士相田信也書　森　尚謙
偶記　古賀　煜
清雲小伝　釈　元政
紀高田某事　頼　襄
扇銘序　安東　守約
記蜂須賀山城事　平山　潜
答島原文学川北某書　板倉　勝明
記熊斐事　松島　坦
記藤堂采女事　斎藤　馨
曲直瀬玄朔伝　逸　名
詣東叡山并詩　林　信勝
長崎逸事　林　信勝
鈴木勇山家伝　森　尚謙
新刊韓子解詁後叙　津田　鳳卿
冨田氏世系碑　田辺　昌
記小櫃某事　菱川　賓
故因幡守仙石公廟碑文　亀田　長梓
土左室戸港記　逸　名
錦帯橋記　玉乃　惇成
孝子今泉村五郎右衛門伝　林　信篤
吉野君墓碣銘　藤森　大雅
刀池忠右衛門伝　斎藤　宗有

第五冊

古内義如伝　虎嵩　道説
冨田氏紹伝　虎嵩　道説
手嶋堵庵伝　沢　徽
歓来祠記　松崎　復
斎藤判官伝鬼房伝　日夏　繁高
佐竹侯夫人　安積　信
記川村孫兵衛事　斎藤　馨
記嶋田幽也事　古賀　煜
砕玉軒先生略伝　無名氏
霞谷山人伝　釈　日政
飯田侯夫人春台大夫人碑　大内　承裕
僧大峨伝　村山　徳淳
柳公美伝　長野　確
天恩賜硯綿記　北村　可昌
記事六則　太宰　純
書売茶翁事　渡辺　魯
山崎兵左衛門伝　日夏　繁高
烈婦伝　安積　信
書酒井忠高事　天　爵
吉野伝　菊池　純
酒井侯夫人　安積　信
紀孝婦伊麻事　芳野　長毅
唐土佐国伝　沢　徽
鴇田駿河伝　斎藤　馨
杉山翁立志之碑　林　長孺
寄宅坤徳書　人見　伝
鶴楼伝　服部　元喬
鶴楼伝　鳴嶋　信遍
東山新建芭蕉翁墓碣銘　清田　絢
記薩摩侯松平綱貴事　太宰　純

第六冊

第七冊

記千切総吉事　津坂　孝綽
甲斐庵記　頼　惟柔
阿雪伝　頼　襄
稼穡跋　塩谷　世弘
百合伝　頼　襄
紀貞婦某氏事　林　長孺
望月玉蟾伝　皆川　愿
金牌伝　葛西　質
竹原孝女頌並序　片山　猷
記河村瑞軒事　広瀬　謙
恩田木工伝　菊池　純
紀千宗佐事　太宰　純
書堀平太左衛門事　斎藤　馨
塙検校伝　孔平　信敏
記渡辺氏理獄　五味　釜川
復井甃菴　梁田　邦美
山内規重行実略記　蘆　徳林
陶人春慶碑銘　浅井　維寅
記奥山出羽事　斎藤　馨
痤筆塚銘記并馬琴伝　亀田　興
記浜島庄兵衛柿木金助事
蔵六橘生寿碣　釈　顕常
記高橋越前守事　逸　名
加藤伝内伝　斎藤　馨
孝子三二郎伝　中井　積徳
記谷口鶏口事　中山　貞
西岡君墓碣　藪　慤
髯翁寿壙記　松崎　復
賀村田公孫賜楼記序　古賀　樸
冨士谷成章墓誌銘　皆川　愿

第九冊

記小沢蘆庵事　斎藤　馨
毎月集題辞折錄　村瀬　之熙
忠清居士捨金碑　柴野　邦彦
記宇兵衛谷平事　中井　積徳
跡部氏所蔵扇記　藤田　彪
伶官彦右衛門伝　菊池　純
程婆伝　中井　積善
記蒲萄和尚事　松嶋　元碩
昨夢伝　岸　綽
水氏墓道碑　木村　雅寿
掲牌　塩谷　世弘
柳谷処士西島翁墓碣　林　毓
譚恠　古賀　煜
花長老伝　門田　堯佐
接鮮紀事　松崎　復
塚本藤馬玄溥墓碑銘　佐藤　坦
良寛伝　松嶋　坦
錫類記　中井　積徳
寿永筝記　川北　憲
平佐帯刀手簡副記　五弓　久文
紀尾張人見郡宰開新川事　斎藤　正謙
鳥人篇　西山　正
記愛松孝子事　藪　慤
鳩嶺書院記　松本　慎
義禽行引　西山　正
紫宸殿賢聖障子画模本屏風記　柴野　邦彦
記大捌助八事　逸　名
阿蕃小伝　杉本　樗園
平三郎孝状　大北　穀美
送岡子言赴任松岡序　柴野　邦彦

記仙台侯事　逸名
記相馬侯事　逸名
記事一則　松宮　俊仍
紀私窠子事　逸名
三代宦伝　森田　益
曲亭馬琴翁伝　菊池　純
桃洞遺筆序　近藤　好道
雷鳥図記　柴野　邦彦
立原翠軒遺事　五弓　久文
記又兵衛脱少女之厄事　逸名
記丐夫事　逸名
石川彦獄伝　古賀　煜
小島蕉園小伝　芳野　世育
根本義知伝　原　忠敬
記標工　坂谷　素
姉妹硯記　松本　慎
阿永小伝　五弓　久文
記岷駒事　松島　坦
市川白猿伝　菊池　純
記与小川三平話　塩谷　世弘
川村寿庵伝　塩谷　誠
金忠輔伝　東海　逸史
村田氏杉机記　安積　信
大井川記　寺門　良
記事一則　奥　元祥
賈人拝藤房　斎藤　馨
記松代侯真田幸貫事　斎藤　馨
開道遺績碑銘　諸葛　鑫
学迷雑録補遺　古賀　煜
義犬伝　菅野　狷介

第十冊

粛翁敬業二先生伝　森田　益
間斎伝　梅辻　希声
談龍記　古賀　煜
題阿州馳馬伎図　古賀　煜
高橋生伝　林　長孺
僧方壺伝　林　長孺
佐藤隆岷伝　林　長孺
朽亭陳人伝　佐藤　坦
記夢市郎兵衛明石志賀之助事　逸名
尚古閣讌集詩歌序　青山　延于
庚辰紀異五則　林　衡
会津侯繕甲冑記　塩谷　世弘
丨橋先生伝　塩谷　世弘
記与小川三平話（重出）　大槻　禎
大岡子栗伝　斎藤　馨
佐藤北川墓表　羽倉　用九
国定忠二伝　頼　襄
福岡女子伝　菊池　桐孫
棲碧山人小伝　松島　坦
方壺山人伝　広瀬　孝
菅元均伝　逸名
上領頼軌妻小伝　井上　修
書岩名士廉手翰後　井上　修
書斎藤強国詩後　井上　修
記島崎二郎事　山本　秀夫
解毒斎伝　大須賀　履
狂生某伝　松林　漸
書対藩内訌録後　松林　漸
橋本大路伝　斎藤　馨
記前浜松侯水野忠邦事

第十一冊

義僕伝　五弓　久文
書文恭公相国宣命後　五弓　久文
緑毛亀説　木村　雅寿
曽根翔卿墓碣銘　安積　信
故掛川年寄四宮君墓表　松崎　復
角觝者玉垣伝　横山　正邵
記義奴事　塩谷　時敏
御嶽新道記　増田　贊
嶋田見山伝　中村　和
新製鎧記代　昌谷　碩
記奇人某事　逸　名
詩仏老人碑竹記　朝川　鼎
記木股清右衛門事　塩谷　時敏
読論語　菊池　純
紀貞婦旌表事　錦織　積
国定村忠二伝　塩谷　時敏
松延先生墓誌銘　寺門　良
飯田矣演武場碑　斎藤　正謙
由善伝　芳野　世育
鳥哀音題言　高　鋭一
大旱記　江木　戩
与李中堂書　竹添　光鴻
新捜神記　剣　峯
勧業博覧会観画扉記　高　鋭一
記梅鶴民三事　細木　林
記金子鎌吉事　大岡　忠時
記斎藤吉郎事　熊田　重宗
柳清水記　堀江　章
記香港総督燕臬斯氏東游　王　韜
兼光刀記　南摩　綱紀
過道頓堀中劇場観武勇竹刀戯曲戯贈場中諸君并序　江北　美髯
敬請　逸　名
三遊亭円朝伝　信夫　粲
新門辰五郎伝　信夫　粲
京都博覧会記　小林　卓蔵
服部杏圃錦花磁碑　信夫　粲
記義猴事　信夫　粲
重修越後魚沼郡八幡祠碑　重野　安繹
記廉爺事　信夫　粲
嵩春斎伝　川田　剛
記事　斎藤　馨

事実文編後篇　三冊

一〇一丁・二五丁・九七丁。前掲書に次いで編纂せしものにして、近世人物伝記資料九十三篇を収む。（第一冊四十四篇、第二冊十二篇、第三冊三十七篇）。この書もまた国書刊行会刊本には収載せざる分なり。よってその細目を次に掲ぐ。

（事実文編後篇総目）

第一冊　蓮田市五郎伝　信夫　粲
記甚助事　中村　正直
内藤大夫墓表　江木　戩
南里先生墓碣銘　尾池　世璜
一山伊原翁碑　芳村　正秉
北窓白井翁墓表　三島　毅
玉器陳列会記　松村精一郎
奠告戴公文　高　鋭一
故工部十等技手蘆岩生碑陰記　栗本　鯤
先考韜斎府君墓銘　岡　千仞
勝村志尹墓碣銘　岡　千仞
平野国臣伝　岡　千仞

真木保臣伝
書昌平黌書生寮名簿後
記鹿児島撃走英軍　西郷隆盛論　石川　良信
武田竹塘先生紀功碑　栗本　鯉
浅草花園森田六翁碑記　人見　寧
龍雄雲井君墓表　斎藤　一馬
秋山先生伝　菊池　純
海荘菊池先生墓碣銘　佐田　白茅
山田大毅墓碑　植田　倬
雪窓五弓先生行状　朝長　誠
飯山松林先生墓碣銘　那珂　通高
義所鳥山君墓碑銘　紀　徳民
記忠女夏　服部　文豹
記孝子彦三郎代父命事　服部　保佑
記冨吉復父讐事　野口　之布
大島伯選墓碣銘　三井　竹窓
日柳柳東翁伝　東久世通禧
故平野二郎君碑文　重野　安繹
大警視川路君墓表　西　毅一
青木升堂墓碣銘　村上　珍休
毅堂鷲津先生墓誌　鈴木　茶渓
栗山篤信墓銘　五弓　久文
川上冬崖小伝　中村　正直
記大石良雄事　高　鋭一
庖人淡虎伝　五弓　久文
孝婦徳伝　森田　益
三代官伝　森田　益
中賢女伝　森田　益
粛翁敬業二先生伝　森田　益

第二冊

久保田翁墓碣銘　森田　益
鴨井熊山墓碣銘　森田　益
西住法師墓表銘　太田　亜山
平重盛公碑銘并序　釈　徹定
武蔵守平知章君碑　三島　毅
淳良親王碑　柴原　和
藤原文貞公碑
後南朝遺蹟碑記　藤野　正啓
星岡表忠之碑　伊坂　淑人
真渕龍介伝
鎮西八郎為朝遺邸趾碑
武田竹塘先生紀功碑（重出）　石川　良信
京都府博覧会紀念碑　植村　正直
大江盤代君碑并銘　犬塚　興恕

第三冊

中村正恭伝　西　毅一
招魂碑　西　毅一
北溟土倉君碑　西　毅一
小州高田翁紀念碑　西　毅一
坪田総次郎墓碣銘　西　毅一
松田正介伝　横山　謙
後藤子恭墓碑　岡松　辰
諸葛君碑　中村　正直
益田覚心碑　小林　卓蔵
題林子平書牘詩并引　市川　湫村
侠客暁雨伝　依田　百川
書七卿西竄図後　長松　秋琴
栃原東皐墓碣銘　謙田　景弼
高島秋帆書幅記　坂谷　素
菊聰偶筆抄録　木村　毅
竹亭翁墓碑銘　錦織　積

角觝者陣幕伝　井上　黙
三井錦江翁碑　中村　正直
松尾芭蕉伝　依田　百川
先君子碑銘　岡本　斯文
玉壺長野君墓碣銘　依田　百川
大仏無用君墓碣銘　中村　正直
山岡静山先生伝　中村　正直
故津崎村岡刀自碑　重野　安繹
足利開鑿二重坂路記　川田　剛
紀恩碑木津川改修　中村　正直
桜山如山墓碣銘　依田　百川
楽山神社碑　川田　剛
雲鳳女史墓碣銘　信夫　粲
栗園中村先生墓碣銘　籠手田安定
先考行述中村栗園
楢崎翁遺碑　西山　正
鰐水江木先生墓碣銘　三嶋　毅
依田公遺烈碑　依田　百川
軍人軍属合葬之碑　重野　安繹
中垣先生碑　川田　剛
浩斎福田翁墓表　野口　犀陽

事実文編目次　二冊　五〇
三四丁・四二丁。序文(斎藤拙堂・斎藤竹堂)、自序、例言、引用書目次、総目次(巻之一至巻之七十)より成る。収載資料の類別順排列にして、創業、守成、列藩、循吏忠臣名士、儒林、復讎、烈士侠客義奴、孝子、国学者流、諸武技家、医流星家、雑家畸人、書画篆刻者流、婦女、緇流、典引、災厄、考証の十八項目を立つ。刊本の序次と体裁全く異り、編纂初期の一形態を示せり。

事実文編目次　三冊　五一
三五丁・四四丁・三九丁。収載資料を編年順に排列したり。刊本の体裁とは大いに異り、編纂初期の一形態を示せり。

事実文編載著標目　一冊　五二
五一丁。もとの書名「事実文編中名家著書標目」と記せるを、訂正して表題のごとくにあらためてあり。明治十五年八月廿日の自序を付す。「明治壬午八月六日起稿」とあり。

俚諺叢録　一冊　五三ノ二
一〇丁。俚諺を集録す。「起明治八年十月十二日」とあり。

俚諺叢録　一冊　五四ノ三
一〇丁。俚諺を集録す。　†焉馬叢録・課題彙纂と合綴。

焉馬叢録　一冊　一五ノ一
五丁。魯魚焉馬など字体の近似したる字類を集めて遺忘に備う。明治十五年三月三十日の自序を付す。　†拙堂先生小伝・晩香館咏草と合綴。

焉馬叢録　一冊　五四ノ三
五丁。右に同じ。　†俚諺叢録・課題彙纂と合綴。

邇俗雅言　一冊　一五ノ三
一九丁。熟語の語義を集む。「起稿干明治二年己巳九月初三」とあり。
†瞥聞片玉・建白諸件・神史稿と合綴。

邇俗雅言　一冊　三四ノ二
一九丁。右に同じ。「起稿干明治二年己巳九月初三」とあり。　†纂史目的簷言と合綴。

邇俗雅言巻之二　一冊　五三ノ一
二八丁。熟語の語義を集む。

名家詩歌文抄(諸名家詩文彙録)　二冊　六一ノ一
四三丁・三八丁。諸家の詩歌文集から随意に抄録せるもの。第一冊首に「自文久二年九月十二日」と記す。

冨美濃多根　二巻二冊　五五ノ一

七三丁・八九丁。諸歌集より会心の和歌を集む。明治三年庚午十月七日の小引を付す。

詠神歌集　一冊　五五ノ二

三四丁。諸歌集より古今の詠神歌を集む。

事実歌編　存巻一　一冊　五五ノ三

五丁。諸歌集から史上の人物を詠みたる和歌を集む。「自明治四年辛未八月廿六日起稿」と記す。

蜻洲詩史　十一巻十冊　五六

一〇一丁・七〇丁・四六丁・四六丁・五七丁・四三丁・三二丁・四六丁・三九丁・七九丁(六七丁・一二丁)。近世諸家の詩文集から詠史詩を纂集す。巻一に「明治紀元戊辰夏六月起業秋八月卒業門人照海筆記」、巻二に「明治紀元戊辰夏四月起業六月卒業門人照海筆記」とありて浄稿の時期を示す。巻十一の首に「明治十六年七月十日起稿」と記す。編輯は長期にわたる継続なりしなり。

大和魂　三冊　五七ノ一

一〇〇丁・六丁・一二丁。日本精神昂揚に関す近世諸家の詩文を集む。

東魂(吾妻魂)　二冊　五七ノ二

四一丁・九丁。徳川氏賛仰に関する近世諸家の詩文を集む。

景賢録　三巻三冊　五八

六八丁・五九丁・二四丁。菅公に関する詩文を集む。

続南木誌　二冊　五九

四四丁・七丁。楠公を詠じたる詩文を集む。中山利質「南木誌」を継ぐの意図なりしならん。

求友編　四巻四冊　六〇

五〇丁・四四丁・三一丁・一六丁。近世諸家の詩文集から送序を摘抄して纂集す。

国朝先哲詩文題例(先哲詩文題例)　一冊　六一ノ

一九丁。諸家の詩文集卅八種から題例を集録す。

楽信寮詩文課題彙纂(誠之館課題彙纂)　一冊　五四ノ

三〇丁。藩黌誠之館の詩文月例課題を記録す。慶応乙丑臘月十八日の小引を付す。

楽信寮詩文課題彙纂(課題彙纂)　一冊　五四ノ二

二三丁。右に同じ。

楽信寮詩文課題彙纂(課題彙纂)　一冊　五四ノ三

二三丁。右に同じ。　†焉馬叢録・俚諺叢録と合綴。

自伝資料

晩香館著述目録　一冊　六三

六丁。雪窓自撰の著述目録にして著書五十六部の書名を列記せり。漢字選述廿五部、仮字選述十三部、類纂適鈔十八部に分類す。明治八年乙亥二月三日の小引を付す。

晩香館日記　九十四冊　六七

五八丁・七四丁・七四丁・四八丁・三九丁・六三丁・二五丁・五九丁・九九丁・四二丁・六六丁・八六丁・七二丁・八一丁・八四丁・五二丁・五三丁・五七丁・五三丁・六九丁・五三丁・六五丁・四八丁・五二丁・七七丁・五六丁・四九丁・五七丁・五七丁・六〇丁・九四丁・八五丁・八八丁・五五丁・三一丁・八七丁・四八丁・百一丁・五二丁・七三丁・六九丁・四三丁・三八丁・五六丁・六〇丁・五五丁・五五丁・三三丁・五一丁・三五丁・四四丁・六一丁・六八丁・五八丁・五四丁・六六丁・五一丁・二七丁・三九丁・四三丁・七二丁・五八丁・五九丁・五四丁・六四丁・七九丁・六七丁・三八丁・四九丁・三八丁・五一丁・三八丁・五三丁・五三丁・四二丁・五九丁・五八丁・五三丁・三〇丁・三八丁・

七七丁・七〇丁・八七丁・八一丁・七五丁・五九丁・六一丁・六一丁・七一丁・百二丁・九七丁・七五丁・六九丁・一四丁

雪窓の晩年約二十年間の日記にして、元治元年(雪窓四十歳)から歿時の明治十九年までの全部を存する。数年の東京生活を除きて郷里に在り。その平生起臥を克明に写せり。諸友来翰の大半もまた記中に再録せり。第一冊至第二冊は元治元年至明治元年記事、第三至五冊は明治二年、第六至八冊は明治三年、第九至十冊は明治四年、第十一至十二冊は明治五年、第十三至十四冊は明治六年、第十五至十八冊は明治七年、第十九至廿三冊は明治八年、第廿四至廿五冊は明治九年、第廿六至廿九冊は明治十年、第卅至卅五冊は明治十一年、第卅六至四十四冊は明治十二年、第四十五至五十六冊は明治十三年、第五十七至六十八冊は明治十四年、第六十九至八十冊は明治十五年、第八十一至八十六冊は明治十六年、第八十七至九十冊は明治十七年、第九十一至九十三冊は明治十八年、第九十四冊は明治十九年記事を収む。

地震日記 一冊 六六ノ一

一七丁。安政二年十月大地震の記。時に雪窓年三十三。江戸に在り。

†玉浦柞原探索日記。睦月八日記と合綴。

修史日誌 一冊 六五ノ一

五〇丁。修史局出仕時の記事。自明治六年六月至明治八年十一月。

西省友餞録 一冊 六五ノ三

三丁。明治九年一月修史局退官後西帰に際して餞別を醵金せられし諸友芳名を記す。

晩香館温史求募金規則 一冊 六五ノ四

一〇丁。晩香館温史購求募銭規則十条(明治十三年庚辰七月)四丁。上督事諸君書(己巳季春十有一日)二丁。読温史(二丁)。示塾中諸子書(明治十三年庚辰五月十五日)二丁を収む。

献書日誌 一冊 六五ノ二

二〇丁。明治十四年自著三十一種を修史局に献納せる経緯を記す。

交友人名簿 一冊 三〇

九丁。

†備中名勝考弁疑・往坂記と合綴。

晩香館門人録 一冊 七三

二二丁。

†栖園雑著と合綴。

雪窓五弓先生行実略 一冊 六四

二一丁。門人菅田惟孝著とあれど、雪窓の自撰なるがごとし。仮名交り文にて記す。明治十五年壬午二月九日の書後を付す。

五弓雪窓先生行状 一冊 三ノ二 四九ノ一

九丁。植田有年撰。漢文にて記す。明治十五年の片山沖堂の小引あり。撰者の植田有年は片山沖堂の女婿なり。

†事実文編後篇第一冊並びに癸未文稿第一冊に収む。

五弓久文伝 一巻 三

五弓安二郎撰。昭和八年刊本「神史」に附載せり。撰者五弓安二郎は雪窓の姪なり。

五弓雪窓肖像写真 額入一面 九〇

五七×四二糎。撮影年月不詳。紋服着用半身像。

旧蔵書

閲庫余録 一冊 斎藤拙堂 写本(一三丁) 六九

事文類聚抄 一冊 写本(二八丁) 八六ノ一

「新編古今事文類聚別集巻之三・儒学部」の書籍の項を抄写せるもの。

〔太郎館叢書〕 一冊 写本 七〇

高山彦九郎伝・林子平伝(三三丁)

高山操志抄録（四丁）
正四位上文祢麻呂忌寸銅牌発掘記（三丁付図四枚）明治卅年写本
佐野原神社略記（二丁付図二枚）
相模国稲村埼建碑紀事写（六丁）明治廿六年写本
佐久間象山先生履歴書案文（五丁）明治廿年写本
月照法師伝（一二丁）

冬の日かけ　二巻一冊　菅茶山　写本（五七丁）　七一

楢園雑著　一冊　小寺清先　写本（一七丁）　七三
「本教闡幽別稿」「闡幽附録草稿」「三種神宝詳説」「十種神宝秘訣」「十種神宝伝」の五篇を収む。　†晩香館門人録と合綴。

神社明細書上簿扣　一冊　写本（八二丁）　七三ノ一
備後国芦田郡第十八大区一小区・四小区の明治九年十二月改め神社明細。

神社原由書　二冊　写本（一〇五丁・六一丁）　七三ノ二
備後国芦田郡神社原由上申書（明治十年九月）の写し。

正保日記増補　（正保記）存巻一・二　二巻一冊　写本（五七丁）　八七

乱婚伝　一冊　太宰春台　写本（一一丁）　七四

鴉片始末　一冊　斎藤竹堂　写本（一三丁）　七五
†芳烈公略譜・桜田記事と合綴。

桜田記事　一冊　写本（二丁、不完本、前後ヲ闕ク）　七五
†芳烈公略譜・鴉片始末と合綴。

擬大将軍上洛記　一冊　写本（七丁）　四四ノ四
†吉田家譜と合綴。

北巡日誌　（東北御巡幸日程）一冊　写本（一八丁）　七六

三藩事略　一冊　青山佩弦斎　写本（三九丁）　七七

奥羽旧事　一冊　斎藤竹堂　写本（一二丁）　七八
†南部五世伝・竹堂觚賸と合綴。

大日本史凡例　一冊　写本（三〇丁）　七九

修史略　二巻一冊　藤田幽谷　写本（六六丁）　八〇

御実記　一冊　写本（二五丁）　八八
徳川実紀編纂人事を記す。文化六年二月至文化七年七月記事。

芳烈公略譜　一冊　池田光政　写本（八丁）　七五
†鴉片始末・桜田記事と合綴。

土津霊神事実　（霊神事実）一冊　写本（七七丁）　八九

柳沢吉保伝弁誣　一冊　借紅園主人　写本（六丁）　六六ノ二
実録小説護国女太平記の誤謬を重修諸家譜の記事と比校して訂す。
†阿部公御説諭書・消暑一適巻と合綴。

越前公言行録　（越前様御行状録）一冊　写本（二二丁）　八一ノ一

南部五世伝　一冊　斎藤竹堂　写本（一二丁）　七八
†奥羽旧事・竹堂觚賸と合綴。

仙台名家碑伝　一冊　写本（三二丁）　八一ノ二

長崎奉行歴代名譜　一冊　写本（七丁）　八五ノ三
†精渓文章と合綴。

近時義烈伝　一冊　写本（五丁）　八一ノ三
「多賀谷勇小伝」「佐伯稜威雄」「天野謙吉小伝」の三篇を収む。　†本教館学規と合綴。

〔野宮定功答問〕　一冊　写本（七丁）　八五ノ三

†精渓文章と合綴。

明訓一班抄　二冊　徳川斉昭　嘉永五年写本（四四丁・四二丁）　八二

本教館学規付学論　一冊　写本（七丁）　八一ノ三

†近時義烈伝と合綴。

弘道館述義略解　二冊　写本（三〇丁・一七丁）　八三

周尺説　一冊　森枳園　刊本（木活字版）　四二ノ三

†晩香館筆叢第三冊に合綴。

大槻磐翁自筆公実厳秘録擬劇優名　附近代公実厳秘録巻之九　大槻磐渓（自筆）（一丁付八丁）　一冊　八四

山陽題聚　（山陽詩文鈔）（頼山陽）　一冊　写本（三五丁）　八五ノ一

侗菴文鈔　一冊　古賀侗庵　写本（三七丁）　八五ノ二

竹堂觚賸　一冊　斎藤竹堂　写本（二五丁）　七八

†奥羽旧事・南部五世伝と合綴。

鶯溪文鈔　一冊　林鶯溪　写本（二七丁）　一四ノ二

鶯溪文草　一冊　林鶯溪　写本（一一丁）　一四ノ三

精溪文草　一冊　昌谷精溪　写本（三〇丁）　八五ノ三

†長崎奉行歴代名譜・野宮定功答問と合綴。

消暑一適巻　（墨水舟遊詩）　一冊　阪谷朗廬等　写本（五丁）　六六ノ二

明治十年七月廿五日阪谷朗廬外三人の墨水舟遊分韻。巻末に「此巻ヲ士憲（雪窓）ニ寄ス」云々としたる朗廬自筆書簡を添う。　†阿部公御説論書・柳沢吉保伝弁誣と合綴。

横山初集　（胡二斎先生評選横山初録）　一冊　清・裘璉　写本（三九丁）　八六ノ二

「明治二年春仲望前三日五弓久文」と署したる書後を添う。

付　大橋香陵遺墨

松陰雙鶴図　一軸　九一

絹本着色。一二七×三八糎。「香陵写併題」と署す。

霜林暁行図　一軸　九二

絹本着色。一三三×四四糎。「香陵詩画」と署す。

柳陰帰牧図　一軸　九三

紙本着色。一三〇×三四糎。「香陵詩画」と署す。

盧玉川煎茶図　一軸　九四

紙本着色。一二九×三四糎。「七十一老人香陵写併題」と署す。

韓康帰荘図　一軸　九五

紙本着色。一三二×三四糎。「七十一老人香陵併題」と署す。

蘇東坡笠屐之図　一軸　九六

紙本着色。一一四×三四糎。「七十一老人香陵併題」と署す。

行書二行大字幅　一軸　九七

紙本。一二八×三三糎。「横雲嶺外千重樹流水声中一両家香陵七十一老人書」

行書一行大字幅　一軸　九八

紙本。一三四×三四糎。「四更山吐月残夜水明楼七十一老人香陵書」

大橋香陵は五弓雪窓外孫にして、女流南画家として令名あり。雪窓文庫の嫡孫五弓武男氏から本学に寄贈せらるゝに際し、その斡旋に尽力さるゝ所少なからず、かつ、自作の書画八点を併せて寄贈せられたり。よってその目をこゝに付載す。

附録　五弓雪窓略伝

五弓雪窓（ごきゅう・せっそう）、名は久文、字は士憲、通称豊太郎、雪窓と号す。迂樵、清々舎の別号あり。備後国府中の人。文政六年一月廿四日生れ、明治十九年一月十七日歿す、年六十四。昭和三年十一月従五位を追贈さる。

五弓雪窓の略伝として門弟菅田惟孝の撰文にかゝる『雪窓五弓先生行実略』の全文（明治十五年稿）を次に掲げる。

雪窓五弓先生行実略　菅田惟孝

雪窓五弓先生ハ文政六年癸未正月廿四日ニ生レ、本年壬午（明治十五年）ニ至リ六十歳ナリ、名久文、字士憲、号雪窓、又迂樵、又清々舎

父家ハ世々備後芦田郡府中市八幡宮ノ祠職ナリ、伝唱ニ因レハ、曩祖本姓ハ藤原、京師ノ人ニシテ、禁裏御所ノ御弓師ナリ、一旦其職ヲ辞シ、石岡ト唱シ、後又今氏ニ改ム、蓋シ御弓ノ御字ト国音通スルヲ以テ五字ニ替ヘシナリ、何分中古祝融ノ禍ニ罹リ、歴代ノ旧記悉皆焼亡シ詳細ナラス、京師ヨリ備後芦田郡本山村門田ト云所ニ移居シ、数世相続シ、土神日吉宮祠官ニ奉仕シ、又隣村石井ト云所ニ転居ス、其時既ニ府中市土神羽中八幡宮并ニ広谷中須両村神庶ノ祠官兼務、後チ府中市ヘ移住ス、祠職元ノ如シ、尤モ是頃迄ハ避遠ノ国土鎮座小社ノ神職ナレハ、神祇管領家ヘ執奏シ公ニ奉職セラレシニ非ス、固ヨリ半俗ノ姿容ニテ神拝修行セラレシ処、先生九代ノ祖光久始テ上京シ、元禄四年辛未八月三日神祇管領長吉田氏ヘ奏上シ、継目許状ヲ拝受シ其配下ニ列シ、亦後右三村ニ本山ヲ加ヘ四村ノ神事参勤セラル、宝暦八年五月九日五弓久武ノ代、又上京執奏シ継目許状ヲ拝戴シ、明和二年乙酉始テ正六位下ニ叙ス、寛政元年六月六日先生ノ祖父久直ノ代、宣旨アツテ従五位下ニ叙ス、嘉永元年十二月七日庶弟久紀従五位下ニ叙セラル、父名河内久範、母小池氏

先生幼ニシテ学ヲ好ミ、郷医木村楓窓ニ従ヒ句読ヲ受ク、常ニ国史ヲ嗜ミ、林鵞峯日本王代一覧ヲ読ミ感スル所アリ、遂ニ其内ヲ摘鈔シ、一冊トナシ常ニ坐右ニ置ク、是レ後来修史ノ根抵トナル、数歳ヲ経テ、青山拙斎前後皇朝史略ヲ借読シ、是亦抜萃シ、其論賛ニ至テハ残ラス写録ス、総テ邦史アレハ仮真ノ別ナク遍ク人ニ借読ス、或ハ今古ノ和歌適意ノ篇章ヲ得レハ必録ス

先生少時父ニ従ヒ神事ヲ務ム、十三ニ至テ父両眼ヲ失明セラレシヨリ、先生幼弱ナレトモ父ニ代リ担当シ神務ヲ行フ、是ヨリ専ラ読書スル能ハス、且ツ山駅僻地故良師無ク、タマタマ郷人協議シテ、備中小寺清之国典ヲ精究シ福山ノ客仕人ナレハ、是ヲ折々府中ヘ迎聘シ、国典ノ聴講咏歌ノ師範ヲ受ク、先生モ亦入社シ、清之ヨリ学益ヲ受ク、小寺氏、元先生ノ父祖ト子弟ノ契好アレハ教授ヲ竭セリ、是レニ因ツテ先生モ亦清之歿後其碑文ヲ擬撰シ其功徳ヲ表セリ

先生年十七、天保十年五月一日父母ニ告テ曰ク、我年既ニ十七ニ及フ、都会ニ出遊シ名家ニ従学セザレハ奚ソ志ヲ為スヲ得ン、然レトモ今大人両眼ヲ失ヒ神勤スル能ハス、若シ大人ノ侍養ヲ捨テ家ヲ辞セハ、仮令学成ルト雖モ惟恐ル不孝ノ名ヲ得ン、今幸ニ弟久紀既ニ十五歳ニ及フ、予ニ代リ神勤セハ可、願クハ大坂ニ行テ良師ヲ得、是ニ事ヘンコトヲ許シ給ヘハ幸ナリ、両親其言ヲ賞シ、其レヨリ尾道ニテ乗船シ、三原人山本生ナル者ノ添書得テ、大坂儒家後藤春草ヘ入塾ス、尤モ貧生故月俸家ヨリ支給スル能ハザルヲ以テ、春草ノ塾生ヲ授読シ、仕令余暇ヲ以テ己レノ読書撰文ニ従事ス、其後東京ヘ赴キ諸家ヘ従学糊口スルモ、大意後藤氏一般ナリ、別ニ記載ニ及ス推知ス可シ、又余暇ニハ筆写ノ料ヲ得テ小遣トスル時モ有リ、其他貧生得資ノ役々従事セザルナシ

先生天保十二年二月十七日浪華ヲ発シ、東京ニ抵リ、伊勢斎藤拙堂翁ニ藤堂家柳原ノ邸ニ首謁シ門人トナル、タマタマ翁在番ノ瓜期満チ帰藩セラル、因テ乃チ去テ他家ヘ随従ス、然レトモ撰文疑義アレハ屢郵寄シ翁ノ批正ヲ乞得ス、嘉永五年江戸ヨリ帰省ノ時、津藩ヲ過キ再ヒ翁ニ随従シ教授ノ益ヲ受ク、此時先生事実文篇二十本ヲ蒐録携帰シ翁ニ質正ス、翁此挙ヲ甚タ嘉尚シ直ニ撰序シ賛美セラル

先生抑文篇ノ著アルノ本志ハ、凡ソ今世ノ書生ママ漢土ノ史乗ヲ詳明スレトモ吾皇国ノ事実ハ甚ダ疎漏、故ニ文章ヲ綴ルモ国事ヲ記載スルモノ反テ罕ナリ、先生是

レヲ慨嘆シ、明儒焦竑ノ献徴録ニ倣ヒ、先ツ漢文体ノ記文ヲ遍ク蒐輯シ、其巧拙ヲ論セス史家採択ノ用ニ供ス、然レトモ開国以来運祚漠遠、若シ其間事実文ヲ修録セハ繁穢ニ堪ヘザレハ、唯一人ノ綿力薄才ヲ以テ撫集シ難キ故、先ズ近古以還ト限定シ、東照公生誕シ給フ天文十一年ヲ緒端トナシ、其間事実ニ関渉スルモノハ、固ヨリ大小ヲ問ハス博載遺漏ナク、天保辛丑江戸遊学ノ年ヨリ着手セラレ、尓後日ニ成リ月ニ将シ、本年壬午ニ及ヒ凡ソ四十年ヲ閲歴シ百二十本ノ浩簡トナル、先是写生ニ命シ該本七部騰写セシメ、水戸徳川薩摩島津勢津藤堂福山阿部岸和田岡部安中板倉小松一柳七侯ニ呈セラレシ処、各家ヨリ撰史必用ノ善本ナリト御賞美アリ、親シク写料等御下賜ニ相成シト、当節原本ハ校訂ノ上大政官修史局ヘ献納ニ決定セラル、寔ニ先生畢世ノ功徳ト謂ヘシ

先生天保十三年昌平黌依田翁ニ遊学ス、翁ハ該校ノ教官ナレハ先生常ニ依頼シ、其自写ノ珍書ヲ自由ニ借覧スルヲ得ラレタリ

弘化年中、先生豊後人佐藤寿八ト日光廟ヘ謁セント欲シ、相共ニ江戸ヲ発シ下野ニ至ル、タマタマ道傍ニ寺在リ、薬師寺ト名ク、弓削道鏡ノ貶謫所ト云フ、乃チ立寄リ其塚ヲ瞥見セント欲ス、門内左方ニ塚在リ、先生先ツ寺僧ニ面会シ、其法祖道鏡カ孝謙帝寵幸ノ状ヲ問フ、乍チ僧欣然、古筐ヲ探リ一銅印ヲ出シ曰、是レ平生吾法祖ヨリ帝ニ奉ル艶書ニ捺セシモノナリト、喃々誇詡ス、時ニ先生嘆息微笑シ、去テ塚ニ至リ、責讓シ曰、汝売僧女帝ノ嬖寵ヲ恃ミ敢テ非望ヲ覬覦ス、大逆無道必誅ス可シ、而光仁帝ノ寛裕ヲ蒙ル、我慨嘆ニ堪ヘズ其塚上ニ尿溺セントス、佐藤生止メテ曰、君無益ノ事ヲナス勿レ、若シ主僧コレヲ知ラバ必ズ怒責セント、先生慷慨切歯曰、奴僧懼ルニ足ラズ、言未ダ畢ラズ、直ニ溺汚シ去ル、是等小事ト雖モ先生平生忠憤ノ一端ヲ推量ス可シ

先生弘化四年四月ヨリ九月迄日光ニ在留ス、抑応仁以来ノ大乱ヲ揆正シ、慶元偃武以後二百余年間、国家奠安四民鼓腹ノ至楽ヲ授与セシメ、且ツ文学隆興ノ基礎ヲ開キ給ヒシハ、東照公ノ偉勲ニ因ルヲ以テ、先生深ク其徳ヲ欽嚮シ、日光廟ヘ拝参ノ折カラ、其大事ハ烈祖成績逸史等ニ是有レバ、別ニ小記件録セント欲ス、偶々人アリ曰、日光地位高燥冬時他国ノ人ハ厳寒寄寓シ難シ、因テ四月大祭日ニ展拝シ廟下円悠僧房ニ乞ヒ滞留ス、六ケ月其間廟庫ノ秘籍ヲ借閲シ、客窓訳史ト云書ヲ草シ公徳ノ一端ヲ記述セラルヽナリ

先生既ニ日光ヲ辞去シ、江戸ニ帰リ祭酒林榧宇公ニ従学ス、又其弟梧南公ノ家塾ニ転寓ス、且ツ嗣子鶯渓先生少壮ト雖モ既ニ都下ニ博学多才ノ誉アレハ、互ニ輪読鑽研シ得益尤多シ、抑榧宇梧南両公ハ并ニ昌平学ノ総裁ナレハ、其文庫鎖鑰ノ権ヲ掌握セラル、先生故ニ二公ニ乞フテ善本秘冊ハ借読スルヲ得ラル、抑先生読書随処借覧ノ益ヲ得ルハ天幸ト謂ハサル可ラス、是レ津逮余筆ノ著有ル所以ナリ

幕府ノ外給事中山文節ハ為人豆痕満面ト雖モ、天性朴実殊ニ文字ニ志シ識慮該博、就中顕責牧伯ノ寵遇ヲ得、借書自由ノ人ナリ、先生因テ此人ヲ介シ、他家ノ秘典ヲ借閲スルヲ得ラレタルモ由アルカナ

先生明治七年大政官ノ徴ニ応シ、東京ニ抵リ修史官ニ奉職セラル、休暇ノ日在都ノ旧友木村芥舟ニ面会シ林家ノ顛末ヲ問ハル、芥舟ハ往年林家ニ親密締交ノ人ナリ、曰、曩年吾子ト与ニ輪読ノ益ヲ得タル鶯渓君ハ深惜ム既ニ昨年鬼籍ニ登ルト、先生是レヲ聞キ大ニ憮然タリ、芥舟曰、頃日林氏ノ交友諸子及ヒ門下生ト謀リ多少ニ拘ラス互ニ醵金建碑シ聊カ旧恩ニ酬ント欲ス、吾子ハ林家ノ恩人ナリ宜シク其任ヲ分ツ可シ、先生曰、此挙固ヨリ賛成セザル可ラズ、然レトモ予今鄙境ヨリ出都ス、知己寡少其任ニ非ス、芥舟彊請、於是先生奮テ担任シ遍ク旧交諸子ニ行説シ醵金ヲ督促セラル、後チ先生奉職二年中不幸ニシテ病ニ罹リ其業ヲ畢ル能ハス、故山ニ帰リ病間ト雖モ常ニ此挙ノ竣ルヲ跂望セラレシ処、明治辛巳ノ年芥舟ヨリ鶯渓先生碑折本一帖ヲ送寄シ其落成ヲ報知ス、其事新聞紙上ニ掲載シ曰、木村芥舟星野寿平大橋操吉及ヒ先生ノ尽力ニ因ルト、先是先生大橋星野ト謀リ嚢金ヲ抛チ、鶯渓先生ノ内閣坂井氏ヲ劇場ニ招請シ聊其心ヲ慰悦セント欲ス、内閣歓ヒ且ツ謝シ曰、翼クハ本宗学斎ノ妻女ヘ見セ呉レラレハ我反テ欣フ所ナリ、故ニ先生其意ニ従ヒ林氏内閣近藤氏并ニ令嬢ニ奉侍シ劇場ニ至リ終日展覧ニ供セラル、此事亦以テ酬恩ノ一

端ト謂フベシ

先生游都前後四十年来、互ニ交善親密、文字商量ノ人々乏カラス、仙台斎藤順治、姫路菅野狷介、尾張鷲津毅堂、土浦木原老谷、水口中村鼎五、会津南摩綱紀、駿河益田貢、備中坂谷朗盧ノ諸先輩アリ、就中高松片山冲堂翁ハ其交リ往年ハ躁ニシテ近歳ハ特ニ親密、故ニ毎月郵簡往復間断ナシ、真ニ神交知己ノ契ト謂ベシ

先生平日文章ニ於テハ群書ヲ渉猟セサルナシ、尤モ欧陽脩ノ学行ヲ欽慕シ、嘗テ其骨髄ヲ極メント欲シ特ニ意ヲ用ヒラル、於是、文ヲ綴ル、極テ構思精巧、長篇大作ト雖モ煩慮難考ノ患ナク、詩賦ハ好テ推究セス、然レトモ決シテ無用ノ空言ト為シ捨棄セラルニ非ス、故ニ常ニ読詩会心スル処アレハ必ス謄録セラル、先生蜻洲詩史ノ著ヲ見テ証ス可シ、先是先生自ラ謂ラク、詩文兼善スルハ多才ノ人ニシテ非才ハ必ス精巧ニ臻ル可ラス、是レ古来詩文兼善ノ人ニ尠キ所以ナリ、漢土ノ蘇東坡本朝ノ頼山陽ハ此限ニ非ス、先生コレヲ憂ヒ専ラ文章ヲ講究セラル、故ニ著作ノ殷冨等身ニ至ル、於是一ヲ省キ一ヲ精究セラルノ工夫タルヲ知ル

先生往年下総飯沼水海道ノ志士秋葉桂園ノ乞ニ因リ、其地弘経寺ニ寓居シ、日々出臨シ近辺ノ生徒ヲ講読セラルコト五星霜ヲ経過ス、時ニ一日尾藤水竹翁都下ニ先生ヲ見テ曰、五弓兄今来テ僧ヲ教督ス、是レ神人以儒食仏ト、寔ニ戯言ニシテ真ヲ得タリト云フベシ

方今神官ニ任職スル者本居氏ノ僻説ヲ偏信シ往々奇怪ノ説ヲ唱ヘ神明ヲ冒瀆シ愚民ヲ惑乱シ私利ヲ謀ルノ徒世上尠カラス、先生是レヲ嫉悪スル夜叉ノ如シ、然レトモ平生国書ヲ読ミ、源義公天七地五ノ幽玄筆論ス可ラスト謂ヒ給ヒ、日本史神武ニ起筆スルノ主意ヲ尊信シ、敢テ牽強附ノ説ヲ為サス、要スルニ専ラ古皇ノ威霊ヲ恭敬拝戴セラルノミ

先生為人温厚端正、故ニ辺幅ヲ修飾シ誇揚尊大ノ者、或ハ磊落ニ過キ敢テ物我無間ノ者、或通人解漢ト自称スル者ヲ嫌悪スル敵讐ノ如シ

先生資質慷慨、国事ヲ憂フ猶ホ家ノ如シ、明治革命ノ際尤モ外夷ノ跋渉ヲ嫉ム、明治八年十一月二十一日出京ノ折柄、神戸ヨリ三菱社ノ根波多ト名ノルニ乗船シ発港ス、タマタマ乗組ニ外国人アリ、先生一見憤激ニ堪ヘス、一刀ニ射殺セント欲シ、刀ヲ揮ヒ是レニ迫ル、時ニ衆人ノ遮碍ニヨリ果ス能ハス、固ヨリ発狂ト雖モ、平素満腔憂国慨気充溢スルノ致ス所ナリ

備後府中隣村出口ノ郷社賀武奈備神ハ出雲大社大巳貴命ノ御分霊鎮座所ニシテ亡極ノ御神徳ナレハ、氏子タル者恭尊敬拝スル所ナリ、先生往日慶応丙寅ノ年三代実録ヲ読ミ、清和帝貞観四年四月八日勅詔アリ該神ヘ授階ノ奠アリシヨリ屈指スレハ本年千年期ニ当ルヲ知ル、故ニ先生其期年祭ヲ修行シ、益御神徳拝戴ノ志ヲ表セント欲シ、神官村吏ハ勿論浹ク郷衆ニ告テ其賛成ヲ募ラレシ処、障碍者無キノミナラス、旧藩主阿部正方公ニ告ゲ公ニ興行セント請フ者多シ、先生於是テ該社神官奥家氏ヲ助ケ、願書ヲ認メ裁許ヲ乞フ、藩主特ニ賞許シ且ツ郡奉行ヲ以テ代理トシ奉幣セラル、四方賽客絡繹絶エルナク盛奠ヲ脩ム、其後再ビ陽城帝元慶二年受階ノ礼アリシ期年祭ハ明治十年十一月十五ニ当ル、是亦障リナク祭典ヲ脩セリ、寔ニ先生前史ニ詳明ナルノ致ス処ナリ

慶応丙寅、歳比旱蝗物価随テ騰踊シ、財用空竭貧者苦渇痛嘆ノ声四街ニ充満ス、此時先生憫然止ム能ハス、賑救セント欲シ乃チ府中ノ冨豪温家ヲ勤奨シ曰、今ヤ傍近ノ貧者活計ノ術ナク日夜飲泣対坐ス、若シ子等賑恤セサレハ必ス他日莫大ノ災殃ヲ招クヲ知ル可シ、宜ク速ニ救恤ス可シ、於是同郷延藤吉兵衛ヲ始メ十八人共ニ百五十金ヲ出ス、因テ予メ各街ニ周施方ヲ頼ミ先生躬ラ貧家ニ抵リ曰、当年不稔米粒金玉ノ如シ、余等困難ニ堪ヘズ、顧ルニ子等亦同然ナラン、然ルニ頃日冨家ヨリ意外ノ救金ヲ得、独リ予ガ私得ス可キノ義ナシ、故ニ些少ヲ配分セント、貧人泣涕拝受、実ニ其恩徳ニ服ス、如此賑スコト九日ニシテ出口目崎三村ノ赤貧凡ソ二千五百人ノ饑餓ヲ免ルヲ得、蓋シ先生其名ヲ同病相憐ニ托シ、貫受ニ易カラシムルナリ、タマタマ征長ノ役ニ接ス、当時人情平穏ナリシト、是皆先生ノ賜ナリ

先生近歳在都修史館在勤ノ時、其自著神史二十一本ヲ宮内教部両省ヘ献上セラル、各省ヨリ賞美トシテ二十五金宛下賜セラル、又雲州島原両侯共該本ヲ購求シ、雲州公ハ大社ニ島原公ハ日光廟ニ献納シ其償トシテ各三十金宛下賜セラル、文恭公実録ハ越前春嶽勢州藤堂作州津山播州明石ノ五侯ニ献呈セラレ各三千疋宛、又津山侯ハ別ニ章服ノ外套一枚加賜セラル、昨年明治辛巳白川楽翁公行実一本ヲ春嶽公ニ献呈セラレシ処特ニ御嘉賞アリ、御自筆ノ謝簡一通ト阿部正弘公御真筆ノ尺牘一通ト共ニ下賜セラレタリ、是等ノ数事ヲ以テ先生ノ偉徳ヲ知ルニ足ル

先生安政二年関東ヨリ帰郷シ、爾後郷人ノ請ニ因リ生徒ヲ教督セラル、然レトモ家宅狭小ニシテ開塾ニ不便ナレハ必ス他家広濶占便ノ者ヲ撰ヒ仮借セサルヲ得ス、且又若シ自宅ト隔離スレハ往還ノ労有ルノミナラス諸事不都合ナリ、加フルニ借宅ハ屢転移ノ憂ヲ免レス、故ニ先生常ニ静閑居住ニ両便ナル地ヲ撰ヒ造築セント欲セ

レシ処、タマタマ郷人ノ勧奨適切ナルヲ以テ、昨年孟夏確然新築ニ決心シ、乃チ賛成諸子ヲ周旋方ニ依頼シ、古府極南ノ爽地ヲ定メ、該年仲秋ニ着手、夙夜励役冬季ニ至リ土木ノ功竣ル、家南方漠遠ノ沃野ニ面シ、塾自宅ニ連続ス、作為壮麗数百人ヲ入ル可シ、遷居数旬タマタマ先生ノ親弟喜助氏往年坂府嶋ノ内ヘ移住セラレシ者回禄ノ役ニ罹リ全焼ノ報書到ル、先生恐愕悲痛、於是不幸ニシテ中症発興、口舌訥渋、支肢ノ働キ往日ノ如キ能ハス、然レトモ憤勉講読、偸閑著述、怠慢疲罷ノ態ナシ、寔ニ志気健剛ノ人ナリ

先生文久二年八月七日其編輯書事実文篇七十三本ヲ旧藩主阿部正教公ヘ献呈セラレシ処、大ニ其成功ヲ御賞嘆アリ、同三年四月九日同公ヨリ俸米二人扶持給与セラル、尓後福山学校出勤、闔藩生徒作文取立方申附ラレ、又慶応三年十二月廿九日加俸、明治元年十二月廿八日福山藩庁ヘ辟召シ亦増禄四十苞ヲ下賜シ、世々士籍ニ列セラル、蓋シ先生積年黽勉苦学ノ功ニ因ルモノナリ

明治二年十一月七日本里備後府中村校土木落成ス、先生マタ郷衆ノ懇憑ニ因リ該校ヘ転居シ其教官ニ恪勤セラルコト二星霜ヲ過キ免職ス、明治五年十一月廿日小田県庁ヨリ本郡郷社甘武奈備神社祠官拝セラレ、六年二月事故アリ請願免職直ニ許容アリ、七年二月文部省ノ御徴招有リ、同月十七日同省国史編輯御用掛申附ラレ、七月二日御免、同七日大政官修史局御用掛仰付ラレ、八年八月廿八日修史館補三等協修席十等出仕拝命、同十月母病ヲ以テ帰省、程ナク再ヒ出京セント欲シ発程シ、船中ニテ患病、横浜十全病院ニ於テ療養、時ニ奉務シ難キヲ以テ免職帰国セラル

先生内閣ハ福山士族大橋英蔵ノ姉ナリ、五女一男、長曰阿梅夭死ス、曰於房、曰於操、曰菊野、曰於清、季曰友太郎今明治壬午五歳ナリ

先生諸氏百家ノ書ニ於テ閲読セサルナシ、就中涑水ノ史ハ中年ヨリ最嗜ミ朝夕読誦シ頃刻モ手ニ巻ヲ釈カス、故ニ歴代事跡ニ精詳ナル猶明鏡ニ対スル如シ、温史摘評ノ著以テ証ス可シ、抑涑水ノ書タル巻帙浩大ニシテ価額貴重、微力者ハ衆力ヲ聚ムルニ非レハ購ヒ難シ、先生往年郷僧小倉皆了ヲ勧奨シ、其子皆令ノ為メ、門衆ニ説キ募金シ該本一部購求セシム、タマタマ皆令客上ニ死ス、於是皆了憤然郷校ニ寄納ス、因テ先生尓後仮借シ門生ニ授読スルヲ得ラル、尤モ一部ノ史ヲ諸生ニ汎読セシムレハ各々首巻ニ下手シ難シ、故ニ或ハ周季漢初ニ起リ或ハ漢魏六朝若クハ隋唐五代ニ創メ順読逆誦セシム、而シテ生徒其麗沢ノ益ヲ受ケ彬々玉成ス、寔ニ先生教督育才ノ良法美徳尠カラスト謂フベシ、然レトモ斯ク一部ノ史ヲ循環借読スレハ歳月ヲ経過スルニ随ヒテ手垢ニ染漬シ且ツ紙楮損セサルヲ得ス、献本主ニ対シ情義立サレハ先生甚タ是レヲ憂ヒ、借読者ヲ促シ毎月若干金ヲ収納シ、其募銭ヲ以テ更ニ該史ヲ購求シ、土神八幡庶ニ献シ、常日嚫書ト同ク取扱、要スルニ古府里人ノ成材ヲ謀リ又以テ小倉氏献本ノ篤志ニ応セントス、其事既ニ一昨年孟夏ニ起手シ、以来日々ニ増加シ本年ハ若干ノ多嵩ト成ルト云フ

先生遊学帰郷前後四十余年間、教徒講読ノ余閑、専ラ旧聞新得ヲ捜探シ、撰文著作ニ従事セラルコト終始一日ノ如シ、故ニ著述冨贍、既ニ数十種数百本ニ至ル、於是先生自ラ謂ラク、斯ク積年苦心セシモノ一旦没後孤弱ノ子孫ニ遺譲スレハ、或ハ散逸シ或ハ水火ノ禍ニ罹リ一朝水泡ニ帰スルモ測度ス可ラス、若シ朝廷ニ献納シ官庫ニ収納スレハ国恩報酬ノ一端ト成リ且ツ水火ノ患ナク永遠不朽ノ方ナリ、因テ昨年季夏、其病前著作ノ尤赫ナル者一百余本ヲ撰ミ、在都ノ親旧友世良太一青山勇両氏ヲ介シ、大政官ヘ献上セラル、則チ其書目左ノ如シ、神史二十一本、白川楽翁公行実一本、文恭公実録四本、史補四本、三備史略一本、吉田家譜一本、客窓訳史・星厳年表一本、史痕四本、政記存疑・迂黙筆語・拠史徴経一本、聊存文草四本、続聊存文草四本、晩香館剰稿四本、続晩香館剰稿四本、雪窓小稿四本、続雪窓小稿四本、晩香館史論一本、蕉陰茗話三本、雪窓清話三本、負喧閑談三本、村居独語三本、迂樵迂言三本、劇場年表一本、漉水余話一本、観劇余評一本、外史糾謬一本、論修国史類纂三本、津逮余筆廿三本、晩香館著書誌一本、以上三十一種百十三本

書名索引

ア

明石のうらつと……二五下
顕隆卿記……九上
呵刈葭……七上
葦田神官日乗……三七下
葦手書考……二上
葦手考……二上
東魂……五六上
吾妻魂……五六上
阿部公御説諭書……四八下
鵜片始末……五八上
天児書……一三上
安米都知……六上
安斎随筆……五下
安斎叢書……五下

イ

家光卿記……九下
池のもくず……二三上
位職二令解……一四上
伊勢神名略記……六下
伊勢二所太神宮御鎮座伝記……六下
伊勢物語新釈……二〇下
痿叟囈語……三七上
衣服令打聞……一四上
伊呂波字類抄……一五下

ウ

上田秋成論難弁……七上
宇槐雑抄……一一下
うけらが花……二上
迂樵迂言……三六下
歌絵考……六上
歌日記……一九上
歌のあけつらひ……一六上
雨中問答……五上
うつほ物語……二一上
梅かえ物語……二三下
迂黙筆語……三七上

エ

栄花物語……二三上
永昌記……九上
詠神歌集……五六上
詠草……一九上
奕図……一五上
恵慶集……一八下
越前公言行録……五八下
越前様御行状録……五八下
閲庫余録……五七下
江戸職人歌合……二〇上
延喜式……一四下
燕石雑誌抄……二上
焉馬叢録……五五下

オ

奥羽旧事……五八上
嚶々筆語二篇……二上
鶯渓逸事……三四下
鶯渓先生嘉言善行……三四下
鶯渓文鈔……五九上
鶯渓文草……五九上
横山初集……五九上
往坂記……三七上
大江匡房卿伝……六上
大鏡……二三上
大槻磐渓翁自筆公実厳秘録
擬劇優名……五九上
大鳥神社流記……二下
おくれし雁……二六上
おちくぼ物語……二一上
落葉の下草……六上
少女巻抄注……三三下
折口信夫ハガキ……五下
温史摘評……三四上

カ

魁本大字諸儒箋解古文真宝後集……二六下
呵刈葭……七上
河海抄……二一上
神楽歌新釈……二〇下
蜻蛉日記……二四下
嘉元四年九月堂供養……一〇上
餝抄……二一上
柏伝……二上・二五上
歌仙家集……一七上
歌仙家集補……一七上
課題彙纂……五六下
かたはみ草……一五下
勝五郎再生紀聞……二下
樺帖……一五上
鎌倉年中行事……二一上
賀茂翁消息……二五下
賀茂下流梅合……五下
仮涙余録……四五下
河内扇の記……二上・二三下
河内鑑名所記……二三下
河内細見図……二三下
河内志……二三下
河内集……一九下
河内国上古水土考……一下・二三下
河内名所記……二三下
河内名所図会……二三下
河内名流伝……二三下
鉗狂人上田秋成評弁……七上

閑散余録……五上
菅像弁……五上
勘仲記……一〇上
甘南備神授階千年祭日記……三七下
神主考……三七下

キ

祇園執行日記……二下
己亥浪華紀行……三七上
儀式……一〇上
凝塵成嶽……三八下
擬大将軍上洛記……五八上
吉続記……一〇上
吉部秘訓抄……一一上
吉備津宮神社考……三七下
癸未晩香館文稿……三五下
癸未晩香館文鈔……三六上
癸未文稿……三六上
きみのめぐみ……二五上
客窓訳史……三五上
九十六番歌合……二〇上
牛溲馬勃……四七下
求友編……五六上
九暦……九上
狂歌武射志風流……二〇下
恭公志料……三四下
仰祭余録……四八上
玉海……九下
玉函叢説……一三下
玉藻……九下
玉撰和歌集……二上
玉葉……九下
拠史徴経……四八上
清輔袋草紙……一六上
金玉私抄……一七上
近時義烈伝……五八下
錦所談……六上
近世歌文集……二六上
近世作文集……二六下
近代公実厳秘録……五九上
近代年中行事細記……三上
近代和歌集……一八上
禁秘抄……一一上

ク

愚管抄……八下
九十六番歌合……二〇上
くす花……七上
久世相国具通公記……一〇上
九代暦記……八下
熊野日記……二五上
薫集類抄……一五上
群書類従抄……二下
軍礼叢書抄……五上・三下

ケ

景賢録……五六上
経国集……二六下
継塵記……一〇上
化粧眉作口伝……一三上
月照法師伝……五八上
改正月令博物筌……一五下
鉗狂人上田秋成評弁……七上
蒹玉相倚……三七上
建春門院北面歌合……二上
玄上考……六上
献書日誌……五七上
源註拾遺……三三下
建白諸件……三八上
建白諸事件……三八上
建武年中行事略解……一一下

コ

杠園詠草……一九下
杠園愚草……一九上
杠園雑記……五上
杠園書目録……一上
杠園大人詠草写……一九上下
公宴部類記……二一下
江記……九上
江家次第……二一上
好古小録……六上
好古日録……六上
好古文藻……二六上
江次第抄……二一上
甲申晩香館文稿……三六上
校正職人歌合……二〇上
校正神史引書目次……三三下
江談抄……二一上
弘道館述義略解……五九上
鼇頭旧事記……六下
鼇頭古事記……七上
寄居雑著……六上
弘仁式……一四下
交友人名録……五七下
古歌抄……二上
後漢金印略考……二上
古器考……三上
五弓雪窓先生行状……五七下
五弓久文伝……五七下
古今余材抄……一七上
古今和歌集打聴……一七上
古今和歌六帖……一七上
国史字類……九上
国朝先哲詩文題例……五六下
後愚昧記……一〇上
湖月抄……三一上
古事記……七上
古事談……三三上
御実記……五八下
故実拾要……五上・二下
梧窓漫筆……二上
後中記……一〇上
後鳥羽院御集……一八下
詞捷径……二上
言葉の山くち……一七下

胡二斎先生評選横山初録……五九上
権記……九上
今昔名人生歿年表……四八下
今昔物語……二三上

サ

西宮記……一〇下
再難村田春海之答書……七上
相模国稲村埼建碑紀事写……五八上
作文志殻……二六下
佐久間象山先生履歴書案文……五八上
桜田記事……五八上
坐待旦録……三六下
左大将家百首歌合……二〇上
薩摩守忠度集……一八下
雑録……六下
讃岐典待日記……二四下
実冬卿記……一〇上
実冬公記……一〇上
佐野原神社略記……五八上
亮々草紙……五上
山槐記……九下
山家集……一八下
纂史目的簷言……三七下
三条中山口伝……一一上
三代実録……八下
三長記……九下
三藩事略……五八上
三備史略……三四上
三備史料……三四下
散木奇歌集……一八下
三養雑記……二上
山陽詩文鈔……五九上
山陽類聚……五九上
傘笠考……一三上

シ

詩歌鈔……四七下
似雲聞書……一六上
鹿の屋真萩製元興寺鬼味噌引札……五下
祠官日乗……三七下
私考雑録……六下
史語撫要……四八上
史痕……三四上
事実歌編……五六上
事実文編……四八下
事実文編後篇……五三下
事実文編載著標目……五五下
事実文編雑編……四八下
事実文編目次……五五上
四条大納言公任家集……一八下
地震日記……五七上
史屑……四七上
邇俗雅言……五五下
侍中群要……一一下
事文類聚抄……五七下
史補……三四上
しみのすみか物語……二三下

〔シャ―シン〕

沙石集……二三上
写本六帖詠藻……二上
拾芥抄……一上
秋斎随筆……五上
修史采撫書目……三八上
修史参攷書目……三八上
修史日誌……五七上
修史目的簷言……三八上
周尺説……五上
修史略……五八下
殊号事略……一下
春記……九上
春曙抄……二四上
俊秘抄……一六上
俊頼秘抄……一六上
諸鞍日記考注……一三上
蕉陰茗話……三六下
蕉陰茗話剰篇……三六下
正四位上文祢麻呂忌寸銅碑発掘記……五八上
消暑一適巻……五九上
装束温故抄……一三下
装束考……一三下
装束集成……一三下
装束拾要抄……一三上
装束図式……一三下
消息文例……二六上
正保記……五八上
正保日記増補……五八上
抄物……一一上
諸家随筆抜書……五上
諸家蔵書目次……三八下
職原抄……一四下
職原抄口訣私記……一四下
職原抄弁疑私考……一四下
続日本紀……七下
続日本後記……八下
諸名家詩文彙録……五五下
諸友批評楽翁公行実……二四下
白川尚歯会記……二下
白河楽翁公行実……二四下
不知火考……六上
詞林采葉抄……一六下
自暦御記……九下
心記……九下
壬午晩香館文稿……三六上
壬午文稿……三六上
新猿楽記……二上
神史……三上
神史稿……四八上
神史采用書目……三三下
神史々料……四八上
神史追補藍本……三三下
辛巳晩香館文稿……三五下
辛巳文稿……三五下
神社原由書……五八上
神社取調日記……三七下

神社明細書上簿扣……五八上
新撰字鏡……一五上
新撰姓氏録……八下
津逮余筆……四三下
神皇正統記……八下

ス

水左記……九上
崇恩院内府惟房公記……一〇上
資季卿記……一〇上
鈴之舎歌合……二〇上
鈴屋答問録……七上
すみよし物語……二三下

セ

井蛙抄……一六上
星巌梁川先生年譜……三五上
政記存疑……三三下
精渓文章……五九上
誠之館課題彙纂……五六下
蜻州詩史……五六上
清少納言記校異……二四下
政事要略……一四下
清々舎詠草……三八下
西省友餞録……五七上
清石問答……二上・三下
正続神史……三三上
世事雑記……六下
雪窓五弓先生行実略……五七下・六〇上
雪窓清話……三六下
雪窓先生文稿……三五下
拙堂先生小伝……三四下
先人河州府君遺墨……三八下
先代旧事本紀……六下
仙台名家碑伝……五八下
先哲詩文題例……五六下
占卜考……一下
善隣国宝記……八下

ソ

雙玉紀行……二五上
宋元通鑑摘評……二四上
蔵山集……二上
荘明綱目……一三上
続古事談……二三上
続神史……三三上
続南木誌……五六上
続世継……二三上
村居独語……三六下

タ

大安寺縁起……二下
台記……九下
台記別記……九下
大饗雑事鈔……一一下
大外記師遠記……九下
醍醐雑事記……二下
大神宮儀式解……六下
大日本史凡例……五八下
大府記……九上
大平記武器談……一三上
高山操志抄録……五八上
高山彦九郎伝……五七下
但馬考……二上
多豆舎東脩請取……五下
田鶴舎日次記……一九下
田鶴舎社中詠草稿……一九下
玉あられ……一五下
玉霰附論……一五下
玉あられ論……一五下
玉あられ論弁……一五下
玉勝間……五上
玉たすき……二上
玉浦柞原探索日記……三七下
太郎館叢書……五七下

チ・ツ・テ

竹堂觚賸……五九上
知命記……二上
地名今昔異称……三八上
中右記……九上
中内記……九下
朝野群載……一〇下
月並和歌……一九下
槻の落葉信濃下向病床漫筆……六上
月詣和歌集……一七上
土御門天皇元服記……二下
訂正古訓古事記……七下
てにをはのあけつらひ……一五下
点竄問題集解式……一五上
殿中以下年中行事……三上
天皇冠礼部類記……一一下

ト

侗庵文鈔……五九上
東鑑不審問答……二下
道中膝栗毛六編……三三下
当読書目……三八下
藤門雑記……一下・二下・五上
藤門拾葉……五下
藤門随筆草稿……六下
藤門類纂……一下
答問録……七上
時信記……九下
読外筆綴……三六下
土佐日記……二四下
伴林光平詠草……五下

ナ

内宮外宮弁詳解……六下
長崎奉行歴代名譜……五八下
中西重孝詠草……二〇上
渚のこつみ……一八下

なきさのみくつ……一九下
名草の浜つと……二五上
楢園雑著……二六上
楢園集……一八下
南留別志……五上
南朝紹運録……五上
南部五世伝……五八下

ニ

二十四輩順拝図会……七上
二条院讃岐集……一八下
二所皇太神宮神名略記……六下
日中行事……三上
日本紀歌解槻の落葉……一六下
日本紀略……八下
日本後紀……八下
日本国現報善悪霊異記……三三下
日本三代実録……八下
日本書紀……七下
日本文徳天皇実録……八下
日本輿地通志畿内部河内国……一三下
日本霊異記攷証……三三下
女房私記……二上・三上
女官飾抄……二下・三上

ネ・ノ

寝覚の塵……五上
年中行事秘抄……二下
年々随筆……五上
野さらしの紀行……二五上
野宮定功答問……二六下
祝詞考……七上

ハ

俳文集……二六下
八代集抄……一七上
土津霊神事実……二八下
林子平伝……五七下
播磨路の日記……二五下
晩香館乙酉文稿……三六下
晩香館温史購求募銭規則……五七上
晩香館詠草……二八下
晩香館旧稿……三五上
晩香館甲申文稿……三六上
晩香館雑稿……三五上
晩香館雑載……四七上
晩香館史稿……三四上・三四下
晩香館史論……三四上
晩香館叢書……四七上
晩香館著述目録……五六下
晩香館日記……五六下
晩香館筆叢……四四上
晩香館文稿……三五上
晩香館文集原稿……三五下
晩香館文叢原稿……三五下
晩香館漫録……四七上
晩香館門人録……五七下
伴信友占卜考……一下

ヒ

非職事雲客所役秘抄……一一上
直垂考……三下
備中名勝考弁疑……三四下
必読書題言彙纂……三八下
比那能歌語……二下・一六上
日次雑事記……一九下
備忘(歌日記)……一九上
備忘(歌文稿)……一九下
百首異見……一八上
百人一首改観抄……一八上
百人一首拾穂抄……一八上
病榻暇筆……三七上

フ

服暇雑穢令……五上
服飾管見……二下
服飾漫語……三下
福山管内地理略……三八上
袋草紙……一六上
袋之図……三上
負暄閑談……三六下
伏見院御記……九上
伏見院宸翰装束抄……二下・三上
扶桑略記……八下
物品識名……一五下
ふゝくろ……二五下
夫木和歌抄……一七下
冨美濃多根……五六上
冬の日かけ……五八上
文恭公実録……二四下
文藻行潦……二六下

ヘ

平義器談……一三上
平家公達巻……二下
平家人物論……二下
平戸記……九下
瞥聞片玉……三五上
勉強録……四七上
編輯着手ノ方法……三八上
弁玉霰二論……一五下

ホ

法成寺関白道長公記……九上
宝石類書……一上
蓬莱抄……一一上
法隆寺伽藍縁起并流記資財……二下
芳烈公略譜……五八下
北山抄……一〇下
北巡日誌……五八上
北面初記……五上
本教館学規付学論……五九上
本草和名……一四下

本朝世紀……八下
本朝文粋……二六下

マ

枕草紙異本……二三下
枕草子考……二四下
枕草紙杠園抄……二四上
枕草子私記……二四上
枕草子の中の説……二四下
雅亮装束抄……一三上
増鏡……二三上
松平定信行実……三四下
松田謙斎批評文稿……三五下
万一記……一〇上
万代和歌集……一七上
万葉緯……一六下
万葉集……一六下
万葉集私記……一七上
万葉集旁註……一六下

ミ・ム

みをつくし……六上
水鏡……二三上
御堂関白記……九上
源家長日記……二四下
妙槐記……一〇上
妙薬手引草……一四下
睦月八日記……三七下
村田嘉言書簡……五下
村田春門家集……一九下

メ・モ

名家詩歌文抄……五五下
名家文録……四四上
明訓一班抄……五九上
明月記……九下
名目抄注……二一下
文徳実録……八下

ヤ

訳文筌蹄……二六下
八雲抄……一六上
八雲御抄……一六上
康富御記……一〇上
康頼本草……一四下
柳沢吉保伝弁誣……五八下
野府記……九上
山多豆考……六下
大和魂……五六上
大和物語……二一上

ユ・ヨ

輶軒小録……五下
ゆづるはその→杠園(こうえん)を見よ
吉田家譜……三五上
吉野花見の記……三五上

ラ・リ・ル

楽翁公行実……三四下
楽信寮詩文課題彙纂……五六下
蘿月庵国書漫抄……二下
乱婚伝……五八上
俚諺叢録……五五下
六国史撫要……四八上
李部王記……九上
梁塵愚案鈔……二〇下
令義解……一三下
令集解……一四上
令御抄……一四上
隣女集……二上
類聚三代格……一四下

レ・ロ

霊元帝修学院御幸宸記……二五上
霊神事実……五八下
礼物数……二下・二一下
歴代一覧……三八上
六十四番歌結……二〇上
六帖詠藻……二上
漉水余話……三七上
六百番歌合……二〇上
論孟記事……四八上

ワ

和歌庭訓抄……五上・一六上
和歌用意条々……五上・一六上
和漢今古文集……二六下
倭名類聚鈔……一五下

関西大学図書館シリーズ

一　関西大学雑誌目録　和文篇
二　関西大学論文目録
三　関西大学所蔵　細江文庫目録
四　関西大学雑誌目録　欧文篇
五　関西大学所蔵　参考図書目録　欧文篇
六　関西大学所蔵　大阪関係資料目録
七　関西大学所蔵　生田文庫・頴原文庫目録
八　関西大学雑誌目録　欧文篇　第二版　総記・人文社会科学
九　関西大学雑誌目録　欧文篇　第二版　自然科学・工学
一〇　関西大学図書館蔵書目録　和文篇　第三部第三巻　経済・産業
一一　関西大学雑誌目録　和文篇　第二版　自然科学・工学
一二　関西大学図書館蔵書目録　欧文篇　第三部第三巻　経済・産業
一三　関西大学所蔵　吉田文庫目録
一四　関西大学図書館蔵書目録　和文篇　第三部第二巻　第一分冊　政治
一五　関西大学所蔵　岩崎美隆文庫・五弓雪窓文庫目録

關西大學所蔵
岩崎美隆文庫
五弓雪窓文庫　目録

昭和五十一年三月二十日發行

関西大学図書館
大阪府吹田市山手町

印刷　ナニワ印刷株式会社
大阪市北区川崎町三八